

川柳塔



No. 914

七月号

予 告

第九回 川柳塔まつり

と き 10月5日(日)

と ころ アウィーナ大阪

◎詳細は8月号でお知らせいたします。恒例によ
って同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親会を
開催しますのでふるってご参加下さい。

選者交代のお知らせ

九月号(七月投句締切分)から来年八月号ま
での選者を次の通り交代します。

水 煙 抄 板 尾 岳 人
茴 香 の 花 藤 田 泰 子

川 柳 塔 社

路郎賞・川柳塔賞の応募は

八月号の刷込み用紙で

①川柳塔欄・水煙抄欄に6か月以上、出句した
人に応募資格を認める。

②平成14年9月号から平成15年8月号までの入
選句(自分の句を出句する)

③8月号刷込み用紙に5句を楷書で書き8月10
日必着のこと。

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い
方を選択して応募して下さい。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川
柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となります
ので、間違いないようにお願いします。

よかつた香川大会

河内 天笑

第27回全日本川柳2003年香川大会は、平成15年6月14日の理事会及び前夜祭、そして15日の総会及び川柳大会と表彰式が会場のマツノイ・パレス（クリスタルホール）で催され、大会当日参加者

数も過去最高の八五八名を記録するなど、大変な盛り上がりを見せたことは喜ばしい限りです。これまでのトップ、愛媛大会（八〇五名）を越えたのは地元香川の頑張りもさることながら、愛媛の応援も大きかった事でしょう。とにかく2003年香川大会はめでたしめでたしとその幕を閉じ、次回開催地の埼玉県へバトンタッチされました。第28回埼玉大会の更なる発展を期待して止みません。

川柳文化がこのように毎年大いにエスカレートして行く姿は、私達の切に念願

しているところで、川柳の社会化に尽くされた六大家の先生達、特に今回は地元四国の前田伍健先生も溜飲をさげて居られることと思われます。今後益々、日本の伝統文化を担うわれわれが「川柳人パワー」を発揮して日本列島の随所に川柳の花火を打ち上げましょう。

文化庁文化部長の寺脇研氏の「我が国文化と青少年教育」と題した講演は「文化の力で日本を元気にしよう」という内容で、さすが文化庁と思わせるテンポで軽妙に話を進められ、約70分のお話も長く感じませんでした。また「色男かねとちからは無かりけり」の川柳を引き合いに出され、金も力もない色男が斯くもてはやされたのは、色男の持っている「文化」なんだと力説され、思わず膝を叩きました。また、20世紀後半は二大国の力で戦いを抑止してきましたが、この21世紀は「文化力」でいくさを抑止する世紀だとお話を締めくくられました。

今大会は川柳塔社からの出席も頗る順

調で、大阪勢が44名、鳥取勢が25名など90名を越え、同人の吉田孔美子さん（鳥取・鹿野町）が大会賞を獲得しました。

特筆すべきは中原諷人氏が指導して居られる鹿野町のジュニアの大活躍です。香川県知事賞を鹿野中二年生高田寛明君、香川県教育長賞を鹿野中二年生井上愛子さんが受賞。この二人のほかに同じ中学の一年生村上祥吾君、中学三年生井上裕華さん、中学二年生仲川ちふみさん、同学年の野藤恵さんの四名が秀句に選ばれました。ジュニアの部の秀句12句の半分の6句を鹿野中勢が獲得したことは、まさに驚異的で諷人門下から、次代の川柳を担う作家が現れることを確信した大会になりました。

くつしやみをすれば共鳴するギター
怠ける脳にシヨックを振りかける
水だけで半月生きて帰りはり
お年寄りしか公園に来てくれず
裏切りは笑いとばしてやりましょう

座右の句

子を死なし学校に子の多いこと

私の句

闇市の匂いが僕の青春譜

森本弘風

(路郎)

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原主青

■巻頭言 よかった香川大会

古書の楽しみ

川柳塔(同人吟)

自選集

水煙抄

麻生路郎物語(19)

愛染帖

京都塔の会吟行

俳風柳多留二四篇研究

茴香の花

「あきらめ」

一路集「古」

「まつわる」

河内天笑	……(1)
栗原道夫	……(2)
河内天笑選	……(4)
奥田みつ子選	……(56)
東野大八	……(79)
波多野五葉庵選	……(82)
都倉求芽	……(85)
政岡日枝子選	……(88)
久谷まこと選	……(90)
上田俊路選	……(90)
米澤俣子選	……(91)

古書の楽しみ

栗原道夫

昨年の川柳塔まつりでの「おはなし」の発表原稿をまとめていた合間に、「橘高薫風川柳文集」を読み返していたことである。ふあうすと川柳社の小池鯉生氏について書かれた「句集二冊」という文章がある。「鯉生さんは戦後自営の商品倉庫が類焼、結核の療養も重なったことから神戸の生活を棄てる羽目となり、東京での再計を計られる。」とあり、鯉生氏は東京に行き、川上三太郎宅を訪ねて、路郎句集「旅人」を恵まれる。

もしかと思って、本棚にある「旅人」を確認した。見返して縦書きで、「三太郎先生より贈らる、／於東京中野、先生宅、／昭和三四、一、二二、／鯉生」と万年筆で書き込みがあり、その左にサインペンで、「東京へ転住の覚悟して上京、／先づ三太郎先生宅を訪ぬ。」とあった。(／は改行を示す)。「川柳塔」の巻頭言でも読んでいたはずなのに、気が付かなかった。私の持っている「旅人」は、大阪駅前第一ビルにあった浪速書林(故高杉鬼遊氏が教えて下さった店)で入手したものである。「旅人」が、三太郎、鯉生という川柳家の手を経て、私の元にあることがありが

初歩教室「公園」……………三宅保州：(92)

秀句鑑賞 同人吟……………津守柳伸：(94)

水煙抄……………山口高明：(96)

■句集紹介 『葉ずれ柳』……………片岡湖風：(97)

遺句集『古里』……………村上玄也：(98)

■エッセー 冷蔵庫の中を覗く……………小川注湖：(99)

六月本社句会……………(100)

各地柳壇(佳句地十選／安芸田泰子)……………(104)

全日本川柳二〇〇三年香川大会……………(119)

柳界展望……………(159)

七月各地句会案内……………(160)

■編集後記……………楓葉・希久子：(162)

座右の句

飲んでほしやめてもほしい酒をつぎ (葭乃)

私の句

DNA一言多い孫育ち 古今堂 蕉子

たく感じられ、嬉しさが込み上げてきた。

古書を読む楽しみは色々であるが、書き込みやチェックから、元の所蔵者がどのようにその書を読んだかを想像するのも、その一つだろう。『旅人』の92ページの次の句に、鯉生氏はチェックを入れておられ、「34／1／22の日の鯉生」の書き込みがある。

気の弱いくせに鱗の帯をしめ

路郎のこの句に、神戸の生活を棄てることを余儀なくされ、不安を抱きながら東京に乗り込んでいく御自身の境遇を重ね合わせていらつしやるのが想像できるのだ。句集の最終ページ(P698)の左上には、「34／1／27 第一読了、34／1／31、第二読了、40／3／第三読了」と横書きで三行に分けて書き込みがある。(読点は改行を示す。第三読了の日は記されていず、空白のまま)。「旅人」を手にとってからわずか十日の間に、二回の読了。「旅人」を貪るように読んでいらつしやる鯉生氏の姿が思い浮かぶ。

私の本棚には、『旅人』以外にも、古書店で入手した多くの川柳書がある。薫風句集『肉眼』を二冊持っているが、いずれも天牛堺書店で入手したもの。そのうちの一冊には何と、故谷垣史好氏宛への薫風先生の葉書が挟まれていたのである。

路郎の忌 天牛に来て落着きぬ 薫風



河内天笑選

堺市 矢倉五 月

持ち玉は直球だけの人が好き
鏡見る時は老眼鏡ははずす
追風に思わぬ方へ流される
どうせ元他人と妻が拗ねている
ここ一番ダイヤの指輪填めて行く
前髪をすつきりあげて湧く自信

大阪市 西出楓 楽

京うまれのなにわ女で現実派
ピンラディン フセインきつと酌み交わす
新緑の中へ魂解き放つ

いっそ吐くなら自分が酔える嘘
テレビから貰った知恵で根付かない
家出など如何と若葉そそのかす

和歌山市 木本朱夏

余白から風の匂いをする画集
幸せが見えるカレーのコマーシャル
骨の無い魚と骨のない親子

何年も薔薇をもらったことがない
真剣に生死みつめる血糖値
一面に花 反戦歌うたおうよ

弘前市 高瀬霜石

どこからが老後年金枯れてゆく
坂道の途中で虹を組み立てる
天引きをされて庶民に牙がない
パソコンに一億人がよりかかる
泣き虫を支えてくれた蕎麦枕
適量は知らず欠伸がでたら寝る

熊本県 高野宵草

バイクから会釈してゆく酒屋さん
金婚のいまだ空気になれず居る
自己反省嫌いな顔が居る鏡
楽しさを妬む時計が早まわり
何をしに來たのか階段降りてみる
サバ読んで行っても妻に待たされる

箕面市 岩 津 ようじ

痛かもね八十年も生きた罰
内視鏡で見る癌まるでプロッコー
飛び下りれば終るがきつと痛からう
町内の話題昨夜の救急車
病状を全部知ってるその日記
婦人服売場不景気嘘のよう

富田林市 藤 田 泰 子

母の日に楽に歩ける靴もらう
憎しみに変らぬうちに別れよう
ベタジーニのような相手を探して
阪神戦私もガムを噛みながら
視野無限前に向かって打つショット
バイキングみんな賤しい顔になる

富山市 舟 渡 杏 花

無菌室に男を吊す二・三日
言訳の一つ死ぬまでかかりそう
バツカスの泣き上戸には泣かされる
台本の通りに読んで叱られる
一輪のバラに極まる消去法
対岸へ薫いっぱんのいのち綱

羽曳野市 徳 山 みつこ

青葉道抜けて私が透き通る
母の日の電話へおおきにありがとう
油断大敵腰に赤ランプがとる

ナツメロで心に湿布あてている
隙ついてアスバラはすぐ葉に化ける
どこまでの手抜きか骨抜きの魚

海南市 三 宅 保 州

いつ死んでもおかしくないと言う主治医
生まれてきたように死ねたらなと思う
浴びるほど薬を飲んで元気です
私の思いどおりにならぬ影
かまきりは折る姿の修行僧
濡れ衣は晴れたけれども乾かない

箕面市 出 口 セツ子

笑っても独り離散の夜を過ごす
淋しさを見せたら私消えてゆく
真心を写すレントゲンが欲しい
逝く時の情景を想像してしまふ
必要とされたい雑事に追われてる
知っているつもりで解ってない息子

鳥取市 倉 益 一 瑤

ピンチになると母は笑顔を振りまいて
道草は楽し長生きしたくなり
友達をたんと持つてるだんご鼻
負けん気の山よ噴火をするなかれ
頂点に立つと梯子を揺すられる
アメリカの友かベットかにつぼんよ

熊本県 岩切 康子

時々は惣菜屋から楽貰う

案ずるより体当りする癖がつき

珍しい花はカメラに先ず納め

菖蒲束軒に投げ上げ亡母偲ぶ

それからは赤服好きになりました

唐津市 井上 勝 視

焦るまい浄土の席はちゃんとする

さらけ出しアハハと笑うしたたかさ

無駄口が中身の軽ささらけ出す

不況風命よりカネ重くする

賞味期限ギリギリ値引き買う暮らし

唐津市 宗 水 笑

青春の美学ジーンズ膝の穴

石段の途中で信心息を継ぎ

口下手な夫の分も喋る妻

腹八分格言無視のバイキング

アイディアを相手に貰う聞き上手

唐津市 樋口 輝 夫

お隣も旦那が運ぶゴミ袋

晩酌で酔えぬ男が行く屋台

横綱にやよう使わない猫騙し

ここだけの話を聞いて騙される

まっすぐに物言う質で煙がられ

唐津市 山口 高明

父さんの潰瘍つくる不肖の子

雨の中巡る札所の御接待

村々の古老の民話聞き歩く

雪国の生まれスッポンボンで寝る

農を嗣ぐ息子の嫁は異人さん

唐津市 久保 正 剣

おあずけが好き女と遊ばない

後家さんと程よい距離が保てない

消費税もいただいてますラブホテル

部屋割りが済むと幹事は闇に消え

携帯で別れを告げる卑怯者

東かがわ市 清川 玲 子

豆しほり一本宴盛り上げる

バスタオルばらっと落ちて大慌て

気配りの姑が煙たい若夫婦

医療費の値上げ通院鈍らせる

戦争に肺炎世界揺さぶられ

東かがわ市 瀧 井 勝

祝福に応え自信の娘の笑顔

価値観が親とは違う子の進路

グルメ族嘘八百が見抜けな

田に張った水輝いて早苗待つ

長の座に就いて祝辞が上手くなる

東かがわ市 伊勢 八重子

子を想う母に打算も見栄も無い
無口でも存在感のある魅力
そばに居てくれよとポツリ言うお人
ふる里の地図塗り変えた埋立地
母という貫禄付いた妻になり

東かがわ市 原 賢

人生の付録休まず辞書を開け
きつと来る春を信じて夢つなぐ
惚れられた貧乏神と同棲中
女房に尻叩かれて生きている
嘘ひとつ許すと碧い空がある

愛媛県 中居 善信

たった二日病んで浄土へ行った母
物忘れ歩いたあとを探してる
定期昇給意欲の湧かぬ言葉だな
陽が昇る僕はちっちゃい人間よ
都市化する土地で情けが錆びてくる

松山市 古手川 光

ありのまま人が生きてる釜ヶ崎
攻撃の大義捜してもう三月
注射する血管叩き怒らせる
労わって時には修羅になる介護
サスケは覆面他の議員は仮面です

松山市 高橋 宏臣

面白い話に寿命延ばされる
花びらを浮かせひとりの酒を飲み
能面に心の中を見つめられ
残り火を煽っただけの春の風
若い気でいてるに痛いところ増え

高知市 北川 竹萌

後世に残す一言本になる
生涯に誠実一路鍵かけて
極印の名誉会員恐れいる
卒寿越え生きて賜るうれしい日
うれしさは金と銀との光です

砂川市 大橋 政良

動静をさぐるアンテナ立てている
古時計俺もお前もずる休み
鳳仙花腹丸出しにしてはじけ
芽吹くものみんな芽吹いて渡り鳥
人間の釣れる疑似餌を考える

青森県 西谷 大吾

葉桜となって命のたぎる音
寂しさを温め合ってる焚き火の輪
くたびれた影を曳きずる峠道
るいるいと石積む婆の恐山
石一つ積んでは語る水子塚

青森県 小寺花峯

障子の穴に広がっている世界
口止めの期限がなくてかく寝汗
父の背の堅い巨塔が老いてくる
道草だけの人生で髭が生え
変身の過去に触れてはならぬ傷

黒石市 相馬一花

仏壇を閉じて再婚話聴く
鏡には嘘をつけない深い皺
あつさりと諦め切れぬ片思い
浮気する夫の首をすげ替える
泥酔を正気に戻す請求書

十和田市 阿部進

いいことがそんなに続くはずがない
見て見ない振りをするのも生きる知恵
現世はわき見する暇などはない
少しでも若く見せたい薄化粧
子供だと思つて居たらババになり

弘前市 一戸ツネ

満開の桜と遊ぶ地藏さま
天空の闇に孤独をぶらさげる
死角から本音のメール押してみる
爪先は挽歌のリズム阿弥陀くじ
半額の鰯と語る赤い爪

弘前市 須郷井蛙

失業と知らずほめられ昼の風呂
増産が来る日を信じ稲づくり
デパートで半日保育して帰り
お茶漬で最後は終る三次会
ワイドショー昨日の乱れ寄せ集め

弘前市 宮崎ヒサ子

桜散るはや亡姉の三回忌
謎が解けもう菜の花は真つ盛り
頂き物の西瓜初めてなお美味し
五月晴れプラス思考の案を書く
あなたから風邪移されたとは言えぬ

弘前市 高橋岳水

煌々として不夜城の花万朶
桜咲きいつ気に動き出す津軽
媚売らぬ花が花屋で売れ残る
言葉より花一輪にある癒し
落味噌にとける田舎の春の味

弘前市 福士慕情

色付いたさくら一気に咲くつもり
ボス猿が渡つて見せる丸木橋
魚釣り可哀そうだが締めてやる
霊柩車縁起が良いと言われても
アルバムのセピアになった女と逢う

さいたま市 八田 敏

妻介護どちらが先かふと思ひ
同期会休めばすぐに見舞来る
ストーブをやつと仕舞えば初夏の風
無責任団地役員あみだくじ
壊しては作る歴史のイラク戦

佐倉市 岡 井 やすお

途上国と先進国が入れ替わり
いのち買う金もそろそろ底をつく
白内障手術成功空青し
散り際が今年の桜良かったよ
自主的に学べ学校週五日

東京都 岸 野 あやめ

女子アナも噛みつきそうな北朝鮮
戒名と本名 雅号使い分け
もし告知されたらウインクしてほしい
東京も悪かあないね回り寿司
春の鬱しつかり者にボケが来る

東京都 後 藤 早 智

温泉が湧いた都会のど真ん中
源泉だ花粉症にも効くらしい
墨好きの心音跳ねる書道展
留学子の夢を応援したくなる
こころ対こころ国境軽く越え

東京都 播 本 充 子

呼びとめて両手に余る夏野菜
はにかんでママになる日を告げにくる
にこにこと私に守るものがある
おめでとう笑顔のままで泣いている
遠方の客が宴を独り占め

横浜市 保 田 絹 子

その昔遣唐船も風を待ち
大瀬崎此処よ灯台守の歌
こんもりの森はさながらブロッコリー
飛魚の飛行数えて童心に
新緑に響く祈りのカンパニーレ

横浜市 菊 地 政 勝

紫陽花の嘘にはとても適わない
老醜を晒したくないプチトマト
共稼ぎ辛抱してるのは子供
山荘へ来て草取りをして帰り
正論を吐く毒舌は理解され

横浜市 小 野 句 多 留

父の背は一流を自負憚らず
ケイタイを挟まぬ指を持て余す
終結の残務に群れる虫がいる
ねんざして追いうちかける妻の舌
入社式美人社員をチェックする

横浜市 清水潮華

五月晴去年の日傘出してくる

怠った消毒バラの花弁欠け

ガムを噛む野球選手の真似で噛む

二十五度越えてゴキブリ姿見せ

うっかりが続き税金まで忘れ

富山市 島 ひかる

般若経 一心に読む登山靴(慰霊登山 2句)

雪溪へ手向けた花と名が消える

六地藏みんな私を呼んでいる

弥陀の手にきつと縋ってゆくラスト

ユニークな征子飛び出す間違い絵友の川柳句集

静岡県 菌田 漠 杳

お婆ちゃんとうとう駄菓子のお店をしめ

放牧の牛の一声青さ踏む

川筋がすつきり晴れて光立つ

苗床を覗く日課に双葉出る

乳匂う子を押しつつ嫁出掛け

静岡市 安本 晃 授

合掌の十指で掬う百の幸

極楽を信じ病む母花を抱く

嘘つきの爪痕残す内緒事

知恵袋ふくらむ孫の成長期

白足袋を履くとリッチな父になる

愛知県 早川 盛夫

乗り継いでから方言がきつくなり

割り勘でいつも得するビール腹

ライバルの嫌いなものは皆んな好き

秀麗な富士も噴火の罪を持ち

どくだみが可憐な花をつけました

京都府 稲葉 冬葉

花活けて五月のうつを吹き飛ばす

居ても居なくても支障のない私

疑えばせんないことぞ恋の乱

タンスの中に眠らせてある一張羅

博愛に誤解もたんとありまつせ

京都府 丹後屋 肇

花筏八つ裂きにする鯉の髭

通り抜け途中で杖が喘ぎ出す

曼荼羅の隅に私も乗っている

補聴器が目覚める野鳥の過ぎる声

銀行の預金に保険掛けて置く

京都市 都倉 求 芽

晩春だ初夏だと衣がえが追う

消しゴムにあだこうだどつつかれる

かしわ餅もらって新茶買いにゆく

悪王のコレステロールに苦戦する

美酒美食すべて敵なり血糖値

大阪市 星 野 きらり

冷えのぼせ弥生の花も私も
赤土を抱いて筈ご到来
蘭展でカトレア女王然といふ
その話聞いたと言わず箸休め
お灯明ゆらゆら父ちゃん返事して

大阪市 榎 本 舞 夢

微笑みを絶やさぬお方目指してる
待っていたチャンス到来ネジを巻く
心打つドラマ生き方変えて見る
うれしいとおまけ上げたくなる私
アイドルを目指しせつせと爪を研ぐ

大阪市 榎 本 日 の 出

大阪の赤字知ってる無料パス
遅いのはDNAのせいにする
握手した強さを今も忘れない
言いかけて止めた言葉に眠られず
政治家の重い罪にも保釈金

大阪市 中 澤 伽 羅

ローカル線道草ばかりさせたがる
私かて待ち合わせする戎橋
友だちがたくさんあって淋しがり
友だちと言われたくない人もいる
人ごとで無いとしみじみ語り合う

大阪市 大 川 桃 花

点字打つ十七歳のボランティア
仮病の咳したら熱が出て来たよ
ゴルフボール転がして押す足のツボ
巡礼と道連れになるハイキング
五百羅漢四角いお顔見当らず

大阪市 川 端 一 歩

いい人といい汗かいて飲むビール
ボケ少し延ばす古本漁りする
妻という杖にだんだん頼り勝ち
お墓にはいい話だけしておこう
マスコミがボケをときどき狂わせる

大阪市 古 今 堂 蕉 子

保証期限切れてガタガタ生きてます
物搜す不毛の時間だと思ふ
人生の答死んでも出ないだろ
触媒になる人がいて皆丸し
恋人は過保護に育ったお人好し

大阪市 熊 代 菜 月

ローカルで行く駅毎の顔が好き
越前の水仙凜と咲き乱れ
家族でも境界線を持つている
母の日に一人で墓参ごもく寿し
国自慢させたら皆なゆずらない

大阪市 鈴木 トヨ子

結願へ足どり軽く遍路杖
難聴と二人三脚五月晴れ
幸せか医者梯子で出来る友
ゆつくりと羅漢に託びる事があり
ひこばえに明日の活力教えられ

大阪市 伊藤 博仁

花に風はかなきものよ南無阿弥陀
鶯も迎えてくれた墓参り
食堂が二時までだったパンを買う
スーツ着た孫を回して肩がこり
道徳が教科にはない塾の前

大阪市 板東 倫子

ジョークでもサーズですかと言えぬ
転換のミスと誤魔かす誤字脱字
終バスは酔うた男とわたしだけ
戦終る正義とは一体何だろう
私だけの世界が欲しい大宇宙

大阪市 川久保 睦子

楽しいことばかりが残る忌がめぐる
右からの助言に左耳すねる
晩酌で男の顔をとりもどす
花が散り死とは何かとふと思う
ひと言が敵と味方を入れかえる

大阪市 町田 達子

絢爛とひらどつつじの通り抜け
北極熊の生態を知るミュージアム
幻想的なオーロラ溜息の増堀
雨の日を出掛ける棟方志功展
一陣の風が夢から引き離す

大阪市 津村 志華子

風さやかわたしも風も蝶になる
計画は空振りばかり夢ばかり
急がねば目当てが逃げるまわり寿司
老いばかり助け合つて過疎の村
万本の花でも足りぬ母の恩

大阪市 鶴田 遠野

資金繰り夢の中で追う論吉
斜に構え決算書読む監査役
ストレスを覚悟で向かう行楽地
百均と知らずお呼ばれ器誉め
急患にたよりなさそな研修医

大阪市 川原 章久

リストラに春は名のみの風が吹く
五月晴れ今日は忙しい洗濯機
春雨が主婦よ休めと言うて降る
扇子から人間臭い父の風
句碑ばかりやけに目につく法善寺

大阪市 前 たもつ

ベランダに出れば園児と鯉のぼり
学力も体力も落ち五日制
納豆を食べさせられる週一度
畑仕事ウォーキングと違う汗
母死んで六十年は泣かず生き

大阪市 岩崎公誠

飽和した消費に沈む小型店
軽妙な大阪弁で骨抜かれ
ネット死は辞書にまだ出ぬ新奇病
不参加に丸印入れまだ迷う
義理立てて入った保険赤ランブ

大阪市 神夏磯典子

宇宙などさほどに遠きものならず
閉じこもる私を口説く薫風よ
季節の香添えた弁当よく喋る
雑魚なりの人生背筋ピンと伸び
神棚に祀られている不幸せ

大阪市 小糸昭子

朝帰り猫の集まる駐車場
無礼講猫がお腹を踏んで行く
朝霧に子連れの猫が消えてゆく
仲直り壊れた時計直りそう
故里の訛りに引かれ物産展

大阪市 津守なぎさ

百均のつばへ豪華に活けたバラ
鑑定団家宝のつばの鼻を折る
文庫本葉がわりのテレカード
浮気ぐせぶんぶん匂う低姿勢
ガイドより知ったかぶりをしたい客

大阪市 津守柳伸

ひと言が過ぎる女のバイタリティー
カラフルな傘ルンルンの雨おんな
築五十年白蟻さんのお出ました
衣更え重い荷物は捨てましょう
風みどりあるけ歩けとそそのかす

大阪市 杉澤汀

エプロンをかければ何かしたくなる
パン焼けたコーヒ湧いたとピーピー
食べ残すまいぞ後片付けの身は
捨てるゴミ甲乙丙にわけられる
酒の爛チンでは何かもの足らん

大阪市 浦田綏子

豌豆^{まめ}ごはん供え阪神勝ちました
行列が出来てお味はもうひとつ
夏が来て誰も来ない日新茶点で（八十八夜）
人権を言うなら要らぬ有事故
あかぎれも夜なべも知らぬカーネーション

大阪市 小泉 ひさ乃

一時を春爛漫に酔い痴れる
ゆかた着た素足に藍が良く似合い

取りあえず笑顔を返す難聴で

宴会は音痴の方が座を沸かす

亡母の過去知る古だんす捨てられず

大阪市 清水 絹子

物干しに家族出揃う雨あがり

仁徳陵今にかがやく堺市史

帰国の子百均さんの上得意

リアシート孫とうつらの嫁まかせ

散らかしていてもさわるなボクの部屋

大阪市 西川 更紗

眠ってる脳を揺さ振る介護料

お節介が人の噂を持って来る

お忍びで向き合う人の側にいる

木洩れ日が優しく包む車椅子

お向いの花に見とれて鍋こがし

大阪府 米澤 淑子

背のびもう止そうよ先は見えている

青い瞳に古い和服がお気に入り

教会の鐘はみどりのいろで鳴る

深呼吸磯の香りを持ち帰り

潮吹いて桶の浅蜷は海を恋う

大阪府 杉山 隆盛

血の巡りよくて梗塞なぜ起きる

病窓の雲に願いと祈り乗せ

千羽鶴千の祈りを孕んでる

さつき咲く想いをはせる美津留さん

あじさいの花と一緒に智子の忌

池田市 栗田 久子

生きるためすばつと消してしまふ過去

葉を揺する風を楽しむ夕涼み

沈みゆく夕日せつない竹の秋

あつさりと兜を脱いだまでのこと

食べて寝てこんなぜいたくあるやろか

和泉市 中川 楓

夜桜へ晶子鉄幹気取りして

生きざまを見よと淡墨桜咲く

怒っている時も弁当夫に入れ

失せ物がひよっこり出たよ子供の日

老人会もう六十はまだ若い

大阪狭山市 矢野 梓

候補者に期待するから腹が立ち

古稀近く時間に加速ついてくる

両方の話を聞いて惑わされ

乾杯がすみ百人が喋り出し

冷奴毎晩食べて飽きもせず

河内長野市 山岡 富美子

堺市 神原 文

肩たたき尻尾だったと気付かされ
思慕ひとつ紫陽花いろの雨に溶け
くちなしがロマンチックにする垣根

一枚のお札へ千の物語

サムライが伝説を生む大リーグ

河内長野市 村上 直樹

赤いシャツやつと着る気になれて古稀

ご都合で聞き違えする妻の知恵

つい漏らす愚痴とばやきが生む喜劇

説教も欠伸で返す十七歳

警策が朝を切り裂く座禅堂

河内長野市 加島 由一

青春を懐かしむのはまだ早い

熱が冷めると男がアホに見えてくる

生きているだけで百点くれる母

きっかけは月が美しかったから

医者言う通りになった血糖値

堺市 源田 八千代

故郷にただ朽ち果てていく生家

青々と小波の立つ田植あと

卯の花の香に誘われて太鼓橋

イラク戦神の意志ではありません

老夫婦波風立たぬように住み

バラ好きの母へ母の日バラが来る

若みどり只今恋の真つ最中

庭の松僕の来し方知り尽し

老樹なお新芽吹く意気学ばねば

落葉掃く樗もわたしも衣替え

堺市 志田 千代

現役のころの手帳の厚さかな

ころざし持たず聞かれず女の子

爺ちゃんも今日は男の匂いする

作ってもナベカマまでは洗わない

ハンカチを一回も使わなかった

堺市 齋藤 さくら

母の日に元気な声のプレゼント

パチンコも酒も止めたと三日だけ

発泡酒値上げされても飲んでいる

アザラシに騒げる国に住んでいる

かずかずの悩みのひとつお献立

堺市 村上 玄也

定昇もそのうち死語になるだろう

自画像は明るい色で仕上げとく

息抜きのつもりの酒に掬われる

ワープロのような字を書く几帳面

ポイントが溜まった頃に店がない

堺市和田つづや

涙にも意志があるのか止まらない
正直に生きる分だけくたびれる
ほこほこを感じる人と差し向い
十戒をいくつ守っているだろう
灰皿に男の嫉妬あらわなり

柏原市永浜加津子

平穏な余生どっこい儘ならぬ
思いきり転んで見事吹っ切れる
雑草も負けじと緑主張する
会いたくて会えば別れのつらさあり
会心の笑顔見たくてプレゼント

岸和田市井伊東吉

貰い手の無い竹の子が泣いている
切り花の牡丹に見入る集金人
地方選終り赤ん坊よく眠る
SARS禍にマスクメーカー有卦に入る
パチンコの客見りやわかる失業率

岸和田市岩佐ダン吉

戦争はあかんと人文字がでかい
輪切りされた脳と対面させられる
シャッター通りとほとほと行くメーデー旗
威儀正し点字句箋と対峙する
猫の餌横目に昼を食べている

四条畷市吉岡修

温かい人魚の肌と勘違い
肩書きを取ったら鬼もただの人
地球ごと一息つけるときはいつ
大国に笑い袋を壊される
ご返事は素顔見てからするつもり

吹田市山本希久子

B面も忘れてならぬ余生の譜
も一人の自分と対峙雨の窓
棘を持つきつと淋しい人だろう
振り向かず行くところまで行こう
卒寿半ばの母には母のスケジュール

吹田市岩屋美明

薫風を絵の具に溶かす写生会
一日中元氣の出ない休肝日
薄情な人に肩入れされたはる
いっぱいに愚痴を並べた爛冷まし
仕事では振わぬ知恵を回す余暇

吹田市大谷篤子

飛びたてる姿勢でチャンス待っている
開運のチャンスが来たか亀がくる
友達の約束はごに孫の守り
消印をたしかめて見る懐かしさ
縁あって夫婦静かに五十年

高石市 浅野 房子

豊中市 吉田 あずき

我が家にも固定資産税という家賃
旗色をきめかねて八方美人

切り札はもう出尽くした終の章

嘘ついた罰は瞬時にやってくる

腹八分言いたいことも八分目

高槻市 傍島 克治

井の中が安住の地と知る蛙

おーいお茶やなんて言えたものじゃない

借金が取りに行かせぬ忘れ傘

見るほどにうつとうしいね鬱の文字

理想とは適わぬものとやつと知る

高槻市 江原 秀夫

虚と実のいくさ神代の昔から

奔放な男を活ける妻の壺

湯のけむり枯れた二人に虹が立つ

墨の香が書斎に満ちて梅雨に入る

梅雨晴間屋並が光るスタレ越し

高槻市 西谷 治三郎

携帯を使わぬままに歳重ね

限定と権威づけても売れ残り

食べさせる親がアーンと口を開け

まだ傘寿花の傘寿と眉を描く

低金利預けしぶりをやっている

老後設計 国に抹殺されました

職探しもはや大志もすり切れる

鳥へ花へ言葉をかける侘住居

飽食のつづきの空に飢餓がある

恥かいた事も笑いに出来る歳

豊中市 山門 タミ

窓開けて朝の空気を一気呑み

晴れた日は心もはずむ洗濯しよ

遠く住み電話で元気たしかめる

笑われているとも知らずまくしたて

亡父さんとあの世で萌えよ待っててよ

豊中市 安藤 寿美子

かぞえ歳満歳お祝い何度でも

ぼろぼろになってもこの世に居たいねん

ヒトゲノムわからへんけど生きてます

老人会大正生れは二・三人

二人ずつ等間隔の加茂河原

豊中市 水野 黒兎

若いねはほめ言葉かと思う歳

健保料元など取らぬ心意気

節穴の向こうは昭和前世紀

定年にのつべらばうの名刺持つ
アラジンのランプが曇る血の砂漠

豊中市 松岡 久留美

目立たない育ちの良さが魅力です
良い話裏の打算が見えかくれ
裕福で他人の痛みわからない
母の居る苦屋の灯なつかしい
老いてなお新しい服目に止まり

富田林市 大橋 鐘造

思い出の中に美人の亡母がいる
シナリオの通りに来ない僕の春
幾度か人を泣かせた白い指
笑ったら笑い返せと父の檄
もう一度呼べば来るかも知れぬ春

富田林市 中井 アキ

加速度が付いた私の忘れ癖
ハンドルの遊びが欲しい嫁姑
水たまりいくつ越えれば虹に逢う
欲ひとつ畳むとゆるむ固結び
まな板の傷を残して姑が逝く

富田林市 中崎 深雪

森の中 心を洗う鳥の唄
ボス猿の背に哀愁が漂う
障害の子からカーネーション届く
謎めいている君解いてみたくなる
戦争がぶんぶん匂う有事法

富田林市 片岡 智恵子

栄養をつけとこ風邪を移される
人生百年これから何か始めよう
体調が悪くて嘘が弾まない
検診へ心と身体整える
わが城にねかす糖味噌半世紀

寝屋川市 坂上 高栄

過去は皆御破算にした青テント
計報欄せめて黙祷レクイエム
鎧櫃開けて一人の棕買う
川風に緋鯉真鯉が跳ね返り
二人して築いた城を孫にあげ

寝屋川市 平松 かすみ

指折れば恐い歳です我が娘
インブットご先祖様のご命日
検査値はマイナスなのに目が痒い
兎小屋二人三脚して建てる
踏台になってしまった文机

寝屋川市 森

ライブは熱く元気でいて欲しい
想い出はいつしか浄化されている
思案する机ビー玉遊ばせる
トラウマが寝つきの悪い夜にする
休日の父かさ高く座るなり

茜

寝屋川市 江口 度

風向きを変える手馴れた妻のお茶
離婚するようにリストラされました
楽園に老いたビエロが迷いこむ
収賄とおまけに弱い日本人
新型も肺炎だけは嫌われる

寝屋川市 籠 島 恵 子

井勘定墓穴を掘っているようだ
石橋を叩いているが抜けている
しつべ返し予告はちゃんとしてあげる
やわらかな言葉で人の輪をつくる
柳に風今日は吹かれておればいい

寝屋川市 酒 井 勇 太 朗

夢に酔い船にも酔うたセーヌ川
緑なす黒髪染めて時流とか
ブランドであればデザイン問うてない
出来すぎた話一二の足踏んでいる
マスクして流行先端行くつもり

寝屋川市 富 山 ルイ子

真剣に私に向いてくれている
ボランテア出来る自分に満ち足りる
わたくしの舟わたくしが舵をとる
洗脳されるほどわたくしは純でない
ゆつくりとわたしの道を歩きます

羽曳野市 川 口 信 子

留守電に独り相撲の話おく
気兼ねなく猫が横取る妻の膝
靴音にまた騙された花時計
神仏にまかせて生きる浮き沈み
ポケットに鬼と結んだ手を隠す

羽曳野市 吉 川 寿 美

路のとう長けて山家におそい春
花鉢に鍵を預けて母ひとり
小走りに女の坂が暮れてゆく
残り時間夫のカルテとしめりがち
カフェオーレ二つ静かに刻が過ぎてゆく

羽曳野市 三 好 専 平

四捨五入しないでほしい民主主義
アイちゃんと呼ばれて欲しい愛子様
ウィルスの乱にホテルが音を上げる
キーひとつ押すと地球は粉微塵
ETC通る車が見あたらす

東大阪市 笠 井 欣 子

ゆつくりと生きしつかりと遊びます
もう履かぬ想い出の靴化粧する
溜まる皿洗いながらの独り言
さわやかなときめきもある姥ざかり
胃が重い一寸秘密を溜めすぎた

東大阪市 谷口 義

スランブになるほど上達していない
あつさりとしているようでしていない
遠回しなことは言えない性分で
故郷の水平線を見て帰り
神様にお願いをする三つ以上

東大阪市 中岡 妙

留守電にもっと上手に言えたはず
お隣と春分け合うて蕨めし
ザクザクと音高くして蕪刻む
年齢に歯止めかけたい夢の恋
ペランダのトマトの花を愛おしむ

東大阪市 北村 賢子

生きている実感今朝も陽が昇る
ホップステップジャンプで虹をつかみとる
テレシヨップ靴に靴ついてくる
ピント外れの答え悲しい母の古い
まつわりついた娘今まつわりつかれてる

東大阪市 安永 春

クーラーに弱くてズボン真夏でも
カレーならすぐ間に合わすレストラン
入院患者化粧をしてはいけません
余所見せず見守り給う仁王像
恐いほど星が降る夜の二人連れ

東大阪市 指宿 千枝子

シエルターにもなる地下鉄のその深さ(モスクワ 3句)
モザイクの地下天井画空を飛び
旅人をやさしく包むクレムリン
エルミタージュ疲れをいやすカプチーノ(サンクトペテルブルグ)
たき火する渚の男へ思い寄せ

枚方市 海老池 洋

ワンカップに溺れかけてる志
聖書繰る後ろめたさを持った指
命名の紙は祈りを抱いている
ひと言のうかつが呼んだ隙間風
公害もなかった頃の日向水

枚方市 宮川 珠笑

育て終えおさななじみに戻る妻
ストレスを昇天させる大あくび
白内障いえて節介癖もどる
凜々しいと所帯やつれをほめられる
金貴い犬の散歩に伴する

藤井寺市 高田 美代子

氣にいらぬ枝なら惜し気なく払う
未来永劫キミとは水と油だね
住めば都で骨を埋める片田舎
きっかけは些細なことで仲直り
理性ある女がどうも嫌われる

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

松原市 國見 蘭香

忘れてたなんて取りつく島もない
牡丹からつつじへ舵をとる微風
斜交いに薔薇のアーチを抜ける雨
俄雨貸してもらえぬ軒がない
変らない言葉で釘を打つてくる

藤井寺市 太田 扶美代

ジャンケンで決めた椅子です腰据える
目礼で始まり懺悔で終る恋
花の種放浪癖を持っている
どの党も嫌いになった選挙戦
無農薬うちの野菜に惚れている

藤井寺市 楠 昭子

マイホーム建てて夫婦のすれ違い
猫ふえてネコに扱き使われている
一言が祟り左遷の辞令くる
よく喋る男の口に要るチャック
鏡の中の私も歳を取っている

松原市 小池 しげお

お金より好きだと言える人ができ
有難いお経短くして貰う
理事長の眼鏡を拭きに行ってくる
神さまと会える気がして顔洗う
握力が弱って愛が掴めない

介護法今は支えている元気
無神経やりほうだいの子の躰
口にせずやる事はした爽快さ
立ち呑みは明日の充電許しとこ
正直な風に出合えてすがすがし

八尾市 高杉 千歩

身だしなみ鏡が恐い美容院
間違っても三度つづくと恐ろしい
カレンダーに約束ばかり血糖値
増税も忘れビールへ梅雨あがる
有情無情眠り薬が離せない

八尾市 山本 宏至

わたくしの昭和にいつもやのまむし
頭脳明晰経験豊富職はなし
お金より貴重な時間もつゆとり
同居して馴らされました嫁の味
忘れたとかるく一言いなされる

八尾市 内海 幸生

デジカメで取り直せたら人生も
めしべまでピントを合わすものでない
お祈りをして撒いている花の種
パソコンよ読めるか僕の寿命など
人格者とは言わぬけど句はうまい

八尾市 村上 ミツ子

童謡をうたつて過ごすこどもの日

母の日に自分で花を買うてくる

やる気まだ眠ったままの三回忌

つくり笑いで血圧を下げてます

お財布にやさしいおかず買うてくる

八尾市 吉村 一風

朝一番妻の笑いでバン踊る

台所もピカピカ妻のいい笑顔

奇麗ごとだけでは話まとまらぬ

金無いが地獄をうまく泳げるか

人を信じたヤケド黙つてもらつとく

八尾市 神原 まさしと

ゆきあたりばつたり掟ない殺し

猿山の掟守つてボスが去り

船酔いでわやくちゃだった初デート

ちょんまげを切つて反省したつもり

百均で百円玉が胸をはる

八尾市 生嶋 ますみ

ハンサムな医師へ血圧あがりきみ

少子化に生まれて光る鯉のぼり

ばあちゃんと呼ばれたくない息子から

こぼれ種主役になっている花壇

カラオケへ何時もの顔が寄る三時

八尾市 宮崎 シマ子

言うた時間に帰つたことの無い妻だ

休みたがる脳にときどき水かける

タコ焼の熱さしぶとく耐える舌

遊びつかれたベア結婚にたどりつく

子にそつぽ向かれる親のあいまいさ

八尾市 篠原 いつふみ

朝市のお国訛りに乗せられる

冷かしを買う氣にさせた褒め上手

歯を削る命も削る音出して

古い師女難の相はおまけです

懷を急いで通る諭吉さん

八尾市 井尻 民

二人ならやっていけるとプロポーズ

踏み込めぬ境界線を妻が引く

信用をストンと落す二枚舌

迷信と知つても鬼門掃除する

念おしたはずの歩幅が揃わない

芦屋市 黒田 能子

少しずつ燃えて長生きするつもり

後ろ姿一番知らぬのはわたし

買ひものという目的のあるウォーキング

ぶらぶらとまだ暮せない予定表

親しみのわく口元のごはん粒

尼崎市 長 浜 澄 子

八つ当りする先がない猫の鈴
雨つづきぶらりシネマに足が向く
秒針に急かされている折返し
着メロが変わり男もまた変わり
杜用族遠のき街の灯が消える

尼崎市 田 辺 鹿 太

雷が落ちても動じない薔
荒れた掌がよう帰ったと抱きにくる
双方の言い分を聞く膝の猫
悩みから解放された日のビール
露出度の高い服ほどよく売れる

尼崎市 松 下 比 ろ 志

仁王の眼に邪気払われて寺参り
たくさんの雑念籠もる滝の音
棘を持つ理由は聞くまいバラが咲く
流れないモヤモヤ溜る後頭部
底辺に居ると思えば楽になる

尼崎市 軸 丸 勝 巳

乏しさの楽しみ知らぬ現代っ子
八十八夜毎年届く香りの茶
鯉のぼりマンションに住み立ち泳ぎ
七色の声よしきりに足を止め
父の日は何もいらんと母の日に

伊丹市 山 崎 君 子

カーネーションころ通じる娘の匂い
針とれたタマちゃん迎えるえびす顔
三連休パソコン特訓娘はきびし
老いひとり三時は三時腹の虫
がじゅまるもお年召します同窓会

川西市 西 内 朋 月

無茶なことした悪友も灰汁が抜け
苦手なひとの横の席だけあいている
農薬を撒かない土にいるみみず
神ほとけ信じなくても生きられる
睡魔くるまで飲んでいる独りもの

神戸市 池 田 善 守

吾が歳を考えもせず儉約し
八十になりわずらった五十肩
一日一日真剣勝負で生きる日々
拭き掃除右手左手平等に
核捨てよ言うなら世界皆捨てよ

三田市 北 野 哲 男

候補者のあいだは誰も握手好き
お互いに尻尾つかんで輪を作る
花粉には弱いが脂粉には溺れ
フライングそのまま走って孫も出来
妻の留守門限なくて落ちつかず

西宮市 緒方 美津子

一徹の父へなへたと独楽止まる
隙みせてしまったアンパンがうまい
風船とばしたくてゆく甲子園
あの空気ふれたくてまた寺へゆく
パソコンに遊ばれている老いの日々

西宮市 山本 義子

荒療治しようかわたし自身をば
常識の切りとり線がずれてくる
鬼や蛇になれず人間やつてます
今のところ右手左手まだ動く
善人のふりしてただけバラの刺

西宮市 西口 いわゑ

ユニークな意見へみんなしんとする
都合よい嘘なら信じようとする
とつ弁の花も実もあるジョークです
四月七日アトムと同じ誕生日
新緑に迫力もらいはずんでる

西宮市 亀岡 哲子

寒暖へ急を要する衣更え
葉桜やまだほつと数椿
皿割れてそれでも笑う子供の日
逢うたびに若い若いと言ひ合うて
履きなれた靴が寄り道ばかりする

西宮市 秋元 てる

憎いとは違うがよそよそしい背中
ようもてたはずない私を妻にした
ほろ酔いの味も知らずに生きた馬鹿
逆らわぬ事だこの手のお顔には
もう少しこの世ぶらぶらしていたい

西宮市 刈田 泰司

指先まで比べてはしゃぐ主婦の旅
四月馬鹿真面目に嘘をしほり出す
悪友とバツタリ街のケモノ路
福よりもチャンス下さい恵比寿神
ピアノ弾く指に譜面をめくる指

西宮市 門谷 たず子

平和いつまで夫の寝息おだやかに
宿命と思う余生の九十九折
電子音二階は二かい子の暮し
鍵の鈴たしかに夫の現在地
輪ゴム一つ飛ばして愛を確かめる

姫路市 古川 奮水

スキップがぎこちないけど一年生
酒盛った帰宅の足は恵比寿顔
閑空に降りてもマスクはずさない
マスクなどいらぬ国内バスツアー
鉄道の軋みが静か雨模様

生駒市 飛 永 ふりこ

連獅子の息がびったり雅やか
気がつけば即かず離れず真珠婚
人麻呂の歌碑に大和のルーツあり
諂いがすぎると値打下がります
生きた術父が背中に書き残す

香芝市 大 内 朝 子

一本のカーネーションにある絆
その時を精一杯に生きる輩
釣り上げるまではとつてもまめでした
にんげんで理屈通りに生きられぬ
西方へ花を摘みつつみ歩いてる

橿原市 居 谷 真理子

軍曹の石は大きい村の墓地
裸婦像の乳房が軽い休館日
菜種梅雨死刑の文字が太い記事
おじさんが隅で泣いてる映画館
優男はなさいならと切れてやる

奈良市 天 正 千 梢

つよがりが一人生しみ酒を注ぐ
世渡りが下手な人です好かれてる
八十路坂自分の旗をまだかかげ
原点はいのちの尊さ教えこみ
物差しの犠牲になるなランドセル

奈良市 米 田 恭 昌

アイドルがお面を脱いだお手洗
血統書付けん百万と言う子種
気がかりは嫁ぐ気のないやんちゃくれ
急ぐまいひと駒ずつをマイウエイ
あっち向いてホイもう踊ってるお人良し

大和郡山市 坊 農 柳 弘

床遊び祇園囃しの露払い
四万十の清流鮎の逆上がり
生と死の狭間で燃やしてる命
念入りに微罪を探るコンピュター
6Bの癖字が躍ってる句箋

和歌山市 牛 尾 緑 良

一筆箋それでも愛は続いている
人事課の机が知っていた左遷
出来そうもないパソコンと語り合う
例外は通用しない住民課
神様を頼りきってる受験票

和歌山市 西 山 幸

父の日の亡父と一献酌み交わす
夏帽子下手な考えなど止そう
草取りをしただけで日が昏れるなり
サングラスでは隠せないさむい顔
家計簿の中でまいにち老いてゆく

和歌山市 桜井千秀

スベアがない余生無駄なく過ごさねば

流行り廃りに慣れて風鈴懐かしむ

贅沢な記憶に親の恩思う

脳味噌と口が直轄誰のこと

ニューヨーク闊歩曾孫のビデオから(ニューヨーク駐在六ヶ月)

和歌山市 福井桂香

緑に飢えて私もヒート・アイランド

ときめきを隠すブルーのハンカチで

通り一遍の答えが好きな塩コシヨウ

傷口を癒すほのかな木の芽和え

天国へ二人で行ったのは昔

和歌山市 古久保和子

枕ふたつ活断層の上に置く

足腰が弱くなったかよく吠える

バストより胸囲に自信持っている

空豆のふくれっ面と吟醸酒

コンビニの客は無口な人ばかり

和歌山市 青枝鉄治

ダルマに目入れて恩義をもう忘れ

役職に就いたら減った愚痴の数

手みやげへ自慢話がお供する

倒産の社が緞帳で生きている

カラオケがこんなにうまい落ちこぼれ

和歌山市 田中みね

飽食の付けに脅える血糖値

うつとりと妻を眺めたその昔

まだ一寸あなたの事が好きなんよ

巨人負けぶんぶん妻の低気圧

下手な嘘見抜けぬボクとお思いか

和歌山市 吉村さち子

褒められて三日も続く木の芽あえ

保険屋が葬儀の安堵売りにくる

クラス会誘えば皆病もち

マネキンも一枚脱いで初夏の色

暦より肌で季節を知らされる

和歌山市 上地登美代

飾りものなにもない手で鋏を振る

ナメクジのために作っているイチゴ

まだ薄くセクハラされる豆の莢

来世の夫口ポットかも知れぬ

タマちゃんも狂ったらしい羅針盤

和歌山市 山口三千子

古希迎え流れにまかす花筏

真つ当に生きて思わぬ水溜まり

留守電に切り変えて寝る昼下がり

錯覚の世に生き時は加速する

手の平を返すあなたへ意趣返し

和歌山市 松尾和香

雑草と競うて咲いた花いと
夜桜に母の面影追う生家
うすれゆく思考回路に友の喝
週末はジバンゲ リフレッシュの車窓
山坂を越えた私をつつむ花

海安市 谷口義男

売り言葉買えば虚しい風が吹く
不況下の冷遇に耐え時期を待つ
不況風医療費締めている患者
美しく老後を生きる工夫する
相槌を打って聴きたくなる本音

和歌山市 福本英子

懐かしい過去と触れあう衣更え
可愛がり過ぎて大事な花枯らす
入れ替えに四人横綱載った記事
五月病にもなれずに未だフリーター
隠しても臭うぎょうざを食べた人

和歌山市 細川稚代

信号を渡る歩幅にある不安
あいまいに出来ずストレス溜めている
連休へ赤丸つけて友を待つ
手作りの干大根を手土産に
二年越し生きたメダカに語りかけ

和歌山市 松原寿子

じつくりと身に置き換えて責めて見る
薔薇の朱が胸の緩みへ舞い降りる
空白のページがある日喋り出す
人ひとり想う疼きがおさまらぬ
ふっ切れぬ迷い出口が見当たaraぬ

鳥取県 土橋はるお

痛い目をして覚えたら忘れない
トラクター止めて携帯かけている
正直な女を映す水溜り
太陽を強い味方に耕そう
サムライは芋焼酎が好きらしい

鳥取県 谷口次男

熊の手がハンドクリーム塗れという
あの頃はメダカうようよゴミだった
六道で一人さ迷う孤独癖
ひと言が五臓六腑にしみわたる
私には秘密も金庫もないなあ

鳥取県 新家完司

素面ではサブちゃんの歌うたえない
世の中を甘く見ている鼻ピアス
鯉のぼりの目玉が光るいい季節
火葬場はきれいなゼロにしてくれる
年金で野生の象を見に行こう

鳥取県 山 本 正 光

雨あがり初夏の大山独り占め
味噌汁と浅漬けだけで食すすむ
大相撲ハワイ モンゴル トップの座
プロレスの仮面議員もいる日本
日本の最北端で湯にひたる

鳥取県 吉 田 孔 美 子

収入も責任もなし良く笑う
初鳴きを真似て笑って夕焼ける
御先祖に笑われそうなぼたちだ
笑われる事を覚悟の一夜漬け
哀しみを百回咀嚼チャップリン

鳥取県 澤 裕 子

五月晴れ脳がいつときからになる
グロッキーになるまで食べるバイキング
若鮎はときめきながらジャンプする
生きている限り煩惱捨て切れぬ
手の届く近さに辞書を置いている

鳥取県 西 原 艶 子

連休のバスで各地の訛り聞く
満二歳猫もわが家の顔になる
掴み捕りイワナの命もてあそび
高級な車に乗ったことがない
忌が巡るたび面影が膨らまる

鳥取県 村 上 信 子

陳情の五分半日待たされる
のびのびと育ち無欲な人になり
わたしより先にキャベツを食べる虫
草餅に砂糖きかせて亡母の忌に
姑さんの出番セールス丸め込む

鳥取県 上 田 俊 路

花の微熱に触れてゆく交配の筆
梨園の小屋で生きてる古時計
五月雨は新芽うるおすいのち水
怪我をする度に生き抜く知恵が増え
ひと許す心亡母から譲られた

鳥取県 石 谷 美 恵 子

現実を白内障の目で覗く
病む人がみれば馬鹿気たダイエット
栄養の高い卵が安過ぎる
雨の一日見舞いの梯子して暮れる
喪の明けた女鮮やかに変身

鳥取県 林 露 杖

高々と村に一竿鯉鱗
老鶯の声万緑の深みより
スーパールの粽で済ます節句です
しどけなく花弁かさねて牡丹散る
白装束ふつとオウムを想いだす

鳥取県 土橋睦子

守護神が私の背を押しに来る
横糸の妻がしっかり舵を取る
銀鱗が川をはさんで空に舞う
麦畑 雲雀の住める土地がない
美しいマニキュアの指迷い箸

鳥取県 奥谷彩子

大空に融ける七色シャボン玉
腹八分夢五分の駒手の中に
どん底をはい出す靴は軽い靴
鷹になる夢見て塾を梯子する
よたよたよた回り続ける夫婦ごま

倉吉市 森川あらた

顔洗う弱音を吐いてなるものか
風波を読んで次の手考える
ハードルが高くて立ちすくんでいる
心地よい季節裸足になってみる
飛ばされぬために脂肪をつけている

倉吉市 淡路ゆり子

美しく生きる努力を模索する
早寝して明日の元氣蓄える
手抜きして痛む足腰いたわろう
寝た切りの老母の手首の鈴が呼ぶ
つなぐ手に弾みがついて唄になる

倉吉市 最上和枝

連休の計画雨も視野に入れ
体重計に一喜一憂まだ女
ぷかぷかと煙草をふかす場所が無い
肥提げて花とお話するくらし
梅干の不覚天日にさらされる

倉吉市 山中康子

輝いた日を眼裏に今静か
テレビ見て眠り上手な夫案じ
胸襟を開き相手の出方まつ
戦争がすんでサーズのお出ましか
先ず食べて熱と元氣と知恵もらう

倉吉市 牧野芳光

偉くなったような気がする観覧車
正直な人であんまり人褒めぬ
金がないとき資本主義嫌になる
転ばぬようにじつくりと登る坂
白い杖優しい人を連れて来る

鳥取市 富山 檳榔樹

脳天をゆっくり攻める南風
紺碧の空に描きたいおんなの名
野仏の声で睡蓮花開く
明日開く花がゆっくり窓を向く
背広脱ぎ田んぼ耕す孫がいる

鳥取市 田中 童子

地図で見た日本は赤く燃えていた

みな帰り手酌でつまむ子のみやげ

食べる前 歯を外す父はめる母

マニユアルもレールも無しで子を育て

主婦なのにゴキブリ叩きできません

鳥取市 徳田 ひろこ

空を観るだけでも価値のある小径

贅沢を五感に溜めている散歩

すごいポカするので焦らないで往く

腹八分ことば八分がいいけれど

留守電のなかで日本語きこえない

鳥取市 加藤 茶人

一週間妻の老後は趣味で埋め

原点に帰れよ何か見えてくる

手料理に愛情を盛るさじ加減

謝まればすむもの意地を張ってもめ

倅せの数ほど洗たく機回る

鳥取市 録 沢 風 花

金婚の記念写真はまだ元氣

桐の花咲いて五月の風薫る

菜の花の原風景に母という

ダイエットちらしのように痩せもせず

多事多難思い出しては酒を注ぐ

鳥取市 春木 圭一郎

精一杯やって結果にこだわらぬ

失敗を割り切り次へ準備する

行きづまり見方を変えて道開く

手のひらを眺めて自分取り戻す

現実を受け入れ悪いとこ直す

鳥取市 上田 一 京

スキヤンダル撒いて男が出世する

豊かさが溢れ空しい人ばかり

ライバルの癖のみ込んできたゆとり

人の世や忘れることも薬かも

無理などはすまい峠はもう過ぎた

鳥取市 岸 本 宏 章

負けて勝つとても凡人にはできぬ

他人には何の値打ちもない家宝

約款をじっくり読んだことがない

そっくりの似顔絵すこし味がない

ほとんどの人は無視する正誤表

鳥取市 岸 本 孝 子

狂わずに咲く花だからいとおしい

貧乏が教えてくれた魚好き

身の丈に合った暮らしで恙ない

ひとごとと思つた古稀がもう近い

九条が記念日ごとに汗をかく

鳥取市 中村 金祥

不景気の底は二重になっている
田植終え蛙の唄に慰勞され
イラクの地土足の跡を月照らす
鳴き砂の音が私をなぐさめる
給与カットお陰か2キロ痩せました

鳥取市 永原 昌鼓

節くれた指に農婦の自負がある
花粉症小さい敵にグロッキー
毛先までDNAが付きまとう
ブロックの隙間に草の意地を見る
笑い皺増やしてくれる孫という

鳥取市 有沢 せつ子

バスで来た事を忘れて西瓜買い
どう包み替えても西瓜らしくなり
夏向きに替えて花壇をリフレッシュ
メールより側で励ます手紙好き
六本木ヒルズ威勢を見上げさせ

鳥取市 美田 旋風

老夫婦だけが目につく都市砂漠
天国に地獄があったコロンビア
日本はどこへ行くのかカタカナ語
目を入れたダルマ宝の山へ向く
蛙の子先ずは親の背みて泳ぐ

鳥取市 西村 黙光

夕暮れになるとそわそわ落ち着かぬ
年金に身の程知れと諭される
胃カメラに相談しつつ酒を飲む
呆け止めに毎夜嗜む薬草酒
薬草は自家菜園の主力品

鳥取市 福田 登美

白髪染め少し若い気取り戻す
年金に心の飢えを覗かれる
同居にも孤独あるとは気づかれぬ
燃え尽きたはずの炎にふと出逢う
牡丹好きやさしい人がもつと好き

鳥取市 前田 一枝

古時計動かぬままに春はゆく
裏街にかんしゃく玉を捨てて来る
良い陽気貸しかりなしの青い空
お払いに貧乏神が応じない
うそ少しまぜてうわさも派手にする

鳥取市 武田 帆雀

風入れる窓から人が覗き込む
ご用心しなはれ花の甘い蜜
勲章が百円館に売ってある
筍が子分を連れて藪を出る
狸より先輩格の村の猫

鳥取市 夏目一粹

にんげんと蒲団あたたため合っている
どの花も子どもと思ひ育てる
遠足に行く気でいつも出掛けてる
線上をはみ出す歩く難しさ
風船にため息を詰め飛ばして

米子市 光井玲子

バイテク全盛旬の味忘れそう
枯れてゆく私を飾るものがない
古いノートにしばし時間を盗まれる
長い道縦糸だんだんに弛む
頭切りかえてピンチを抜け出した

米子市 木村春枝

石橋を叩いて朝の第一歩
若者がテンポ合わせてくれている
看護師が天使に見える快復期
犬と行く朝の空気のさわやかさ
退屈を持てあましてる犬という

米子市 白根ふみ

ばたん園出てからどつと花疲れ
遅ざくら大器晩成らしく咲く
若者のいない緑の山ばかり
鶯の人の気配で囀りぬ
合併という名で町がまぼろしに

米子市 野坂なみ

イラク戦終りウイルスとのいくさ
魚びちびち人もびちびちして夏だ
放し飼いの鶏も卵も活きがいい
玉砂利の道おしゃべりは似合わない
ジジババさまが動こうとしなくなった

米子市 澤田千春

新芽吹く私も壁を突き破る
庭の木が音もたてずに芽を吹いた
焦らずに待てばごろんと明日がくる
ピアノから小人が踊る初夏の宵
故郷で落した笛の音に出逢う

米子市 林瑞枝

藤寺のこの世生き抜く巨樹に触れ
夕焼けに染まる耳あり遠い海
日舞舞う眩しき友へ声を掛け
咲き誇る藤の木陰で昼弁当
驚見という若布御殿を見て通り

米子市 木村富美子

息切れがするほど進む世をこぼれ
一族の栄えを祈る長となる
目がうるむ命限りの花吹雪
千鳥足踊りつかれる影法師
強がりにはよそう手足が踊らない

米子市 政岡 日枝子

牡丹馥郁 亡母が潜んでいる気配
桜から牡丹わたしに変化なく
感情線切り捨てこじんまりと老い
原点の島の言葉で世を渡る
無意識に自分の顔になる粘土

米子市 青戸 田鶴

だらしなくなった私に日々の鞭
光るもの消えたあなたを信じます
プロジェクトX男たちの花道だ
一極集中東京だけのもつ文化
果てるまでこの一途さをもつだろう

米子市 中井 ゆき

大声で笑う友達待っている
湖の落日神話にじませて
花守りを自負して花と話しこむ
湖はしじみ舟から夜が ажける
花一杯咲かせ独りの誕生日

島根県 森 茂美

有刺鉄線ある沖縄も日本国
強国の野望が起す砂嵐
無人駅昨夜も泊る人が居た
鷺が野性の声で初夏を啼く
投票所空気がかたい無音劇

島根県 伊藤 寿美

花水木の下哀しみは不意にくる
幕を引く病夫の背中を眼に刻む
退院を覗いてくれた藤の花
島の子の島唄響く甲子園
春うらわたし無呼吸症候群

島根県 榊原 秀子

落椿ボトリなんだかいやな音
用心の傘は結局杖にする
えびね蘭応えてくれた花の数
飛行機がこわくて辞退した旅行
柳人名鑑おかげでふえたお友だち

島根県 多々納 テル子

名優のビデオに酔って小半日
ここまでと体に聞いて草を取る
疲れたか語尾に思わず棘がある
来月の予定つまっている元氣
善人になったつもりで写経する

出雲市 竹治 ちかし

今日の幕すぐ引きたがる酒二合
神様は平等同じ歳をくれ
他人には聞こえぬ不協和音聞く
みんな良い人だと思ふ余裕の日
携帯がないと半人前になる

出雲市 園山 多賀子

薫風に口説かれて編む私小説
三面鏡私に同じ貌がない
懺悔録羊に食べて貰います
春光に私の海も凧いでくる
群れて翔ぶ鳥が和音の風孕む

出雲市 吉岡 きみえ

視界みな花花の春です
ラジオから笑いもらっているわたし
招待のなんじやもんじやの花の下
男にはネクタイという枷がある
雑草が私を嗤う根くらべ

出雲市 城 多喜

野茂さんは好き阪神でないけれど
発声の練習をするひとり言
もやもやも一緒に切った長い髪
とまどいを隠す小さな咳をする
泣く準備出来てないのに出る涙

出雲市 青山 久子

山坂を越えて手毬は柔らかい
憎らしいほどに元氣な予定表
つよがりの裏に涙の壺がある
ゆく雲も風も許して月は澄む
子の末をみつめていたい母の川

出雲市 小白金 房子

間違いを素直に詫びて丸く住む
母と子の手づくり泳ぐ鯉のぼり
行商のお世辞上手に昆布売る
れんげ田で遊んだ遠い首かざり
若き日の思い出畳む雨の窓

出雲市 岸 桂子

心乱れて仏の花が枯れている
胸に住む人と時々話する
する事を一日延ばすわるい癖
移り香を残してシャボン玉消える
疑いを持ったまんまで橋渡る

出雲市 伊藤 玲子

ブランコに揺れると遠い日の餅
眉ひいて締まった顔も見せておく
五十年二人で醸す味噌の味
石段の窪みにいくつもの祈り
眼帯を外すと待っていた緑

松江市 三島 淞丘

職退いて一段落とす梯子酒
蹟いたあたりに打った句読点
脳細胞晩学という油つぐ
先達が敷いたレールが錆びている
聞かぬふり極楽からの誘う声

松江市 銭山昌枝

けんかした後で独りの日を想う
犬にまで当たり散らして出て行つた
夫々の育ちが妥協してくれぬ
根拠の無い自信古希だと言いつらす
記念品時計ばかりが溜まりだす

松江市 津川紫晃

人情に飢えて浪曲きいている
喉仏びくり動いたおどり食い
メーデーに唄を忘れた労働者
新しい靴と行き先考える
一杯の水がじんわり効いている

松江市 小川注湖

少子化で出雲神様暇になり
川柳塔百寿の気合い貰う絵だ
夢多く主役へ競う宝塚
義理チョコで生れたケガは身にこたえ
一途な願い通じぬはずはないだろう

岡山県 小林妻子

トイレ休憩武蔵の里も沸いてます
退屈が探して歩くお茶呑み場
潤滑油で動く足腰ならいいが
破魔弓も兜もいくさ臭います
次の世へ行くまで連休なんですよ

岡山県 山本玉恵

天辺ではっきり見えて来た痛み
想いひとつずしりと残し遠ざかる
ひとねむりしてから明日を考えよう
鉛筆をけずれど想いまとまらず
生き方の指針のほしいペンの先

岡山県 大石 あすなろ

補聴器を付けると三猿がくずれ
スパイスの効いた助言をかみしめる
酒好きの亡父にまんじゅう供えとく
単細胞同士くつろぐ午後三時
輪の中で笑い袋の紐を解く

倉敷市 井上富子

待つ外はない深爪の苦笑い
お笑いの種がはじけている茶の間
特大の堪忍袋を縫っている
生真面目な種から四角い花が咲き
人工呼吸で死神が押し出され

広島市 森田 文

ハイキング初夏の小川は上機嫌
保育所のこいのぼりたちまだ仲間
強すぎる自我に孤独と対峙する
ワインパーティー飲めぬわたしは長寿水
解消のできぬ悩みに祈りだけ

竹原市 小島 蘭 幸

旅人に島は恵みの雨となり
なにもかも未完で生きているのです

川掃除蛭は還っては来ない

白装束お遍路さんであるように

結婚記念日忘れたふりをしておくか

竹原市 岩 本 笑 子

これからは二人長男の門出

流されまいと葦の葉っぱは考える

塩砂糖減らないままの一週間

仏壇の前には猫の指定席

雨の神もきつと見ている花田植え

竹原市 森 井 菁 居

デパートが呼んでるサマーコレクション

温厚さが裏目時には怒らねば

意外にも威張る相手の薄っぺら

藤だなの下でロマンを組み立てる

助け船信じず僕の道を行く

竹原市 石 原 淑 子

ラベンダー北海道へ花見旅

イラク戦痛みは光熱費アップ

山野草小さな鉢に観る宇宙

私の末期の顔を磨かねば

ひっそりと一生懸命咲いて散る

広島県 藤 解 静 風

見栄という飾りが前を行きたがり

一匹の男が天を向き 終わる

母を亡くして気を遣う子になった

独り身の父尺八をよく吹いた

スッポンを飲んで元氣になれと言う

広島県 福 島 万 年

同人誌五百羅漢の声を聞く

自信満々遅刻してくる八重桜

妻の歯がコップの中で凄んでる

再びの愛の手順も懐かしく

傘一つ二人に雨が降り止まぬ

宇部市 平 田 実 男

ハイハイを二度重ねるとノーになる

貸し借りが絆太くも細くもす

どこからか出てくる酒代タバコ代

かじられることが嬉しい老いの脛

ポイ捨ての不安持つてるのは・お・と・こ

美祿市 安 平 次 弘 道

前向きに生きる女の束ね髪

九回裏わが人生にさも似たり

目線下げて見ればホントが見えてくる

右下りの不況二人で笑い合い

うなずいていても味方と限らない

熊本市 永田俊子

物忘れ周囲がひそひそ話する
あいまいな笑顔で風を避けている
人の情け知っただけでもいい落伍
握手して相手の温度読んでいる

唐津市 丸晴翠

男やめめはエブロンに花咲かせ
夫婦から戦友となるパートナー
針に糸通って夜なべまた続く
いかけ屋の手をマジックと見つけた日

東かがわ市 池内かおり

終盤に橋も私も化粧する
旧交を温めているレジのそば
赤福を汗を拭きふき本家まで
念力をかけても空かぬビンのフタ

東かがわ市 神保坊太郎

鉄持つと踊り始まる種袋
おふくろの袋にでつかい海がある
この道は一度来た道でも迷う
金魚屋がもう担がなくなった夏

東かがわ市 川崎ひかり

生きたとは片道切符のひとり旅
どの道を抜けても母の海に着く
人生のはかなさを知る事故現場
責任をとらぬ自由をふり回す

松山市 宮尾みのり

絵手紙の下手にやっぱり無いセンス
人間をします迷い道ばかり
残された者へ法事というけじめ
年金が杖にならない近未来

松山市 丹下美津子

谷底の町を見下ろすバスの窓
今風の便利瀟洒な家而建て
父さんのお気に召さない家而建て
持つて逝ける物でないから娘へ貢ぐ

高知県 赤川菊野

一枚の葉書がドラマ書き替える
新しい明日が来るので生きられる
追憶は空一面の艦載機
逝く時は桜ふぶきの中と決め

高知県 小澤幸泉

高校の門が重なるように見え
たった一本の白い道だけ見えてくる
白内障きたか仲良くしてゆこう
その節は苦劳かけたネ血糖値

弘前市 岡本花匠

朝まだき釣果に期待解禁日
どっこいしょ口癖になる笑い草
糠床を根気よく捏ねる母の愛
一文字の墓標も夢の浄土みち

弘前市 櫻庭順風

耳鳴りはがじゃがじゃと来てさつと去る

止まらない止まらない狂乱となる

耳鳴りは止むのは黄泉路しかないか

すすごと帰る耳鳴り憐れなり

弘前市 蒔苗果林

草の庭と人嘲うほど伸び放題

虫達の花撰み見る眼の葉

蟻の列日がな車のラッシュのよう

油虫 蟻に飼われてプンプクリン

弘前市 今愁女

カタクリの花つつましく誰を待つ

美しい想い出さそう水芭蕉

カッコーへすでに日課の草を引く

かきつばた絵巻の如く水の辺に

富士宮市 渥美弧秀

視野一ぱい青葉の燃えて散歩道

鍵盤にシヨバン流れて躍る宵

五月雨の寝椅子に柳誌小半日

視野一ぱい富士眺めつつ万歩計

滋賀県 中宗明

初節句孫を囲んで美酒に酔う

寒行に凍てつく水を冠る僧

言にくいことはメールで全部言い

塾教師学校よりも粒揃え

亀岡市 井上森生

未知一杯旅はまだまだ終わらない

奥方は今年もトラに賭けている

ひと時をつつじ屏風の夢の中(長岡天紳)

傘さした牡丹の彩に癒される(乙訓守)

京都市 高島啓子

幸せに飽きたか猫は家出する

アトム切手あつたら早く届きそう

身延線右に左に富士の山

好物の鰻にも飽き母が逝く

大阪市 川内叭笑

無理してた父の姿が今の僕

ほどほどの理性あるうち猪口を伏せ

口八丁手八丁が無茶を言う

拉致事件 人権無視でいまだ闇

大阪市 中村叡子

初孫が初給料で旅行券

じいちゃんはジャンケンゲーをすぐ忘れ

桜餅好き塩味の葉の香り

同年の隣人逝去大シヨック

大阪市 奥村五月

検査後に主治医のちよつと恐ろしい

定年後作る名刺は軽くなる

うとうととしても議員は金になり

露天風呂妻のやつれが身に染みる

大阪市 渡部 さと美

美容室行き届いてる鼻ピアス
預金帳マンガチックな絵の軽さ
青嵐いくたび人に許されし
マッサージふくれっ面の頬をして

大阪市 松尾 柳右子

家族皆揃うと食事美味しいね
私老い博多人形若いまま
黒だつて夏帽子だという時代
せかせかと生きて趣味などニツ三ツ

大阪市 安達 はじめ

アドバイスだけでは済まぬ金もいり
思い切り笑った後で出る涙
おはようと心開けば笑みも出る
カリスマが呪文で答え荒稼ぎ

大阪市 玉置 英子

鯉幟泳ぎ疲れて休憩中
染みついた貧乏性のまま老いる
小さいから数は多目に菖蒲の湯
樹の緑濃くなり思い強くなる

大阪市 寺井 東雲

大空へ翼広げてもう一度
良い見本学ぶことある青テント
花が咲き名前の知らぬ鳥がくる
失敗は赦してくれぬ操縦桿

池田市 岡本 吉太郎

昼の電車横に座った美女眺め
馬鹿にされ我れ本塁打すつとする
子の面影亡き妻に似て哀れなり
フセインさんどこへ行つたか知りたいね

大阪市 中田 あい子

春宵の星にウインク花の精
リストラか単身赴任か道一つ
雑草という名の植物ないのだと
深刻な不況に企業しほる知恵

和泉市 西岡 洛酔

レモンティー其処から僕の朝が明け
綻びた履歴大事に世を渡る
百点の妻連れ添うた五十年
百年の樹齢桜花の潔し

大阪市 本間 満津子

同行二人 道迷わずに遍路笠
息ひそめニトロ舐めてる九回裏
若返り過ぎて子守りが要りそうな
豆ご飯新茶五月の風緑

泉佐野市 山本 蛙城

ガイジンのうまいニホンゴには負ける
ベンチャーとゴキブリに見る隙間好き
肩書がなくて座りのよい名刺
あっちにはSARSこっちに白の群

茨木市 藤井正雄

志望校野球がとても強いから
反核署名下手な字だけど丁寧に
負け犬の口にこもっている科白
入れ知恵かところどころで口ごもる

河内長野市 井上喜 醉

青空へ初夏の香りで咲くほたん
お念仏あげる自慢のしぶい喉
一球の誤算エースがうずくまり
正義とは戦で出来る人殺し

河内長野市 植村喜代

親は歳で逝き弟急ぎ過ぎ
一人より二人も辛いこともある
いつかきつと心安らぐ日进行
悲しいことの一泊リーガーロイヤル

河内長野市 水谷正子

月一の診察日です化粧する
草引きは生きてる証ラジオ聞く
慶弔の何れに行くか札の運
黒粋の写真撮り合うクラス会

岸和田市 木村正剛

白黒をうやむやにして金婚式
着飾ると等身大の虚像でき
未知数の八十路に備え靴を買う
打とうにも熱くならない古稀の歳

岸和田市 藪野けい子

ほどほどで生きる恰好繕って
ダイエットウエスト少しくびれだし
手あきの時電話の声に耳たてる
霊柩車見て当たった宝くじ

岸和田市 原 さよ子

難病と知っても望み捨てぬ母
大それた望みに神が笑つて
預金帳望み通りにふくらまず
足腰の衰え口が引き受ける

交野市 山川日出子

アメリカのゴジラ松井が大人気
日本にゴーンパワーを増やしたい
吉兆か燕巢をした未年
未年アトム人氣が急上昇

交野市 森本弘風

集印帳三途の川の渡河証
妻の愚痴今日もぶんぶん羽音たて
仏飯を盛る妻の手に愛がある
同窓会やーやーやーで認め合い

堺市 西村りつえ

爽やかな風に乗つかるいい話
花疲れ財布も疲れ冷や奴
不安気に雲行き見てる万国旗
信じつつ口伝て怖く一筆箋

堺市 河内 月子

阪神がたまには負けるのもいいか
キウイの実どんぐりほどの緑色
陽の匂いしてる布団でおもてなし
父の忌よ孫は九人元気です

吹田市 太田 昭

饒舌家きつと寂しい過去だろう
雑兵の悲しみなのか走り癖
期待する余生のページ薄くなり
たんぽぽに荒む心を和まされ

吹田市 野下 之男

大志なら閉じ込めてある古日記
単身の重味知らせる紙一枚
美しい薔薇も秘めてる意地悪さ
お土産は心ばかりの戦利品

吹田市 穴吹 尚士

飛ぶ鳥を落した人の痴呆症
客種を選ぶ余裕のない老舗
昨日から部長が禁煙した会議
お役所の用語で話す天下り

吹田市 早川 棲世

合併反対貧乏え美しき故郷
レスラーの名を書きに行く投票所
手術医に金やれと父路地に住み
墓標林立いくさ談義が聞こえそう

大東市 南原 正和

仏には縁無い義理の参列者
御堂筋泣いて走った若い日々
天井の染み数え臥す白ベッド
菫摘み薊に心寄せる罪

大東市 児玉 蛙

野の花に癒され力湧いてくる
蝶よ花よ育てた娘反抗期
薬にも毒にもなる酒飲んでいる
亡き母の歳まで暮は下ろせない

高槻市 乙倉 武史

ご祝儀の相場目をむくマスクメロン
あいまいに言葉を濁す蟠り
カタカナの花の名前が出て来ない
階段に試されている老い加減

高槻市 井上 照子

鯉のぼりマンションの窓空を見る
渡仏する孫にくれぐれ言い聞かす
心まで老いてはならぬ輪に入る
鉢植の梅の実七個嬉しくて

高槻市 生田 義一

改革と吠えてるだけの総理殿
おだやかな陽を背に孫とボール蹴り
病院の窓から友と花見する
ひよつとしてひよつとなるかもタイガース

高槻市 左右田 泰雄

バスがゆれよろけて詫びる京訛り

唐揚げにすればよかった痩せ蝶

留守電にまかせ炬燵を離れない

キヤリアには負けぬと力む叩き上げ

豊中市 岸田 知香子

森林浴 樹々の息吹きを腹底へ

シャッターの店舗明日には蘇る

連休を横目不況の小商い

独り膳作る侘しさ味気なさ

豊中市 檜谷 郁子

人違い悲しいものよ亡夫かとも

軒先のつばめの愛に吸い込まれ

年金で泳がせている鯉のほり

試着室出て来ないはず脱げないの

寝屋川市 太田 とし子

秀才も阿呆になった盆踊り

踏まれても答返さぬ影法師

あれ以来無視して負けた振りをする

戦いはこれから卒寿朱を注ぐ

寝屋川市 堀江 光子

下積の汗が掴んだ大ヒット

一本の桜のこんな花吹雪

花吹雪ちよっと花道ゆく心地

約束は花あるうちということに

豊中市 江見 見清

カタカナ語どっちが歌手か曲名か

勇み足したことにして本音言う

売れもせぬけど捨てられぬ骨董品

一桁の利子もそのたび書いてある

羽曳野市 安芸田 泰子

振り向かぬ男の背なに頼り甲斐

反論はせずあいまいに笑つとく

父の日を知らない父へ花手桶

花の色も移りにけりな妻の老い

羽曳野市 酒井 一壺

生存へ何より大事自然保護

何事も己がサイズで測る癖

正解のない人生で努力する

幸せの種をお金で買っている

守口市 井上 桂作

人生も黄昏近く負けを知り

おとぼけは知るも知らぬも年の功

今のところ今年の虎は大丈夫

報道のありかたも問うイラク戦

枚方市 鈴木 政子

アメリカに頼るしかない拉致事件

ほつといてオールドミスで居たいのよ

鶯の初鳴きキョキョーホーホキョ

一人っ子成人しても一人っ子

枚方市 森 本 節 子

みどり児の耳はパパ似で鼻はママ
スニーカーはく五月の風に誘われて
早朝の雷さまから貰う喝
真紅のばら小さな庭のプリンセス

枚方市 安 達 忠 央

とし忘れ飛ばすバイクのこちよさ
晴れた空鳥になりたいときもある
裏金がそつと渡つて天下り
あとしまつせずに次の手をのばし

枚方市 二 宮 山 久

葉桜へ今日も散歩の万歩計
孫つれてタンポポ咲いてる散歩道
母の日は達者な母へする電話
ふる里の話をしている目が光る

藤井寺市 中 島 志 洋

納涼の花火見にゆき玉の汗
金魚すくい子より父親意地になり
七夕の笹にでっかい夢を吊る
藍染めの浴衣で夏を若返る

八尾市 長谷川 春 蘭

イヤリング揺れ週末の新樹光
風見鶏風あるうちは花の風
山へ向け海へ向けして手の風車
町並の昔ながらの古都の春

八尾市 宮 西 弥 生

復興の誇りメリケン神戸港 神戸散策 4句
坂道は神戸に似合うエトランゼ
異人館異国情緒にある極み
即答がほしくて直球投げてみる

大阪府 澤 田 和 重

おかしさをこらえる顔がむつかしい
勝ったのは運だと強さ驕らない
なにも言うな今包丁を研いでいる
座布団が小さく見える妻の尻

相生市 中 塚 礎 石

二人三脚步幅が狂いだす余生
補聴器を忘れとんちんかんの会
産廃が山になるまで無頓着
無人駅犬が迎えに来てくれる

尼崎市 春 城 武庫坊

鯉のぼり泳ぎやすらか五月風
ボロボロの辞書が手助けしてくれる
椿落ちるみんな違った姿して
氏神の加護か結婚六十年

尼崎市 春 城 年 代

弟に先立たれたる老姉妹
うつとりと通り抜けする花の乱
胸やけが続いて五月不安だらけ
百均の掘り出しものを手にゆかな

尼崎市 山田耕治

粉骨碎身して今カルシウム

跡継がず他人の飯を食べたがり

冗談が通じぬ人がいた不測

毎日が日曜といえ曜日あり

尼崎市 林昭三

バスツアー同じ風鈴お隣も

大切に自由に育てた子が荒れる

縁結び一億二千の中に居た

あやめ咲き小粒の雨を待っている

伊丹市 小熊江美

手さげよりリユック流行現代化

猫もらいなせか家中活気付く

ワイパーがリズムで動く雨のバス

哀愁は沖行く船の汽笛の音

川西市 米原雪子

落葉樹生きているよと新芽吹く

おしゃべりも意気投合で喉乾く

内緒ごと知らぬ振りする年の功

忍び足出前の鉢にけつまずく

神戸市 木村貴代子

高齢化 典型見せている法事

ぶらぶらと生きなさいとの診断書

人権を盾にSARSが入国す

世の平和疑いもせぬ池の鯉

神戸市 山口美穂

派手だけど似合うときめた試着室

母の日に老母からいたわりの言葉さく

毒ガスからSARSに変わる防護服

亡父が愛した蘭が今年も咲きました

三田市 久保田千代

相愛の仲がおさまる傘の内

ここに居る証の軽い咳ひとつ

タンポポの綿毛が春の風を待つ

お位牌を持って施設の世話になる

宝塚市 嵯峨根保子

モー娘になりたい野心二年生

犬猫が死んだ嘆きはうちへ来る

野心ないあなた好きな日揺さぶる日

禄高は年金なれど城を継ぐ

西宮市 牧渕富喜子

通過点風は雷雨も連れてくる

輝きを増した若葉へメイストーム

すさまじい雷雨五月は闇も抱く

アホーアホーと聞いたぞ鳥かも知れぬ

西宮市 井上松煙

巨神戦切符の列へ朝駆けし

トラファンに鞍替をして自慢する

自画自賛口滑かに嫌われる

老木に蓄みつけて褒める朝

西宮市 坪井孝一

ジョギングでリストラの顔お早ようさん

ビバルデー春から夏の階段へ

待合わせまた花時計壊れてる

おとうさん次はベレーを送ります

西宮市 長谷川 淳

老いらくの恋でも好きと言えぬまま

回り道してもいずれば黄泉に着く

観るだけのトマトが赤いバルコニー

この辺でストップしたい人の知恵

西宮市 菊池 トミエ

学舎の別れ散りゆく荒海へ

セピア色アルバム整理はかどらぬ

急な客タコとキュウリの甘酢あえ

古里のカレイの干物届く朝

兵庫県 大谷 幸次郎

本音しか言えぬ同士でけんかする

目を剥いてちらしの数字確かめる

商いの知恵をちらしで競い合う

硝煙の匂う記念日もう要らぬ

檀原市 安土 理恵

別れ話他人の事なら面白い

梅雨もどき乾ききらない男傘

新しい畳へでんと座る老妻

プライドを無視する鏡拭きません

奈良県 渡辺富子

青テント村に変わった中之島

色めがねはずし真実見きわめる

現役を主張続けている背広

一つ覚え二つ忘れて老いふたり

和歌山市 榎原公子

美人願望まだまだ悟れそうもない

もうとまだ行ったり来たり春が往く

雨しとど姑の痴呆が加速する

現役の自負へ介護と孫守りと

和歌山市 木村初子

気取らずに平々凡と生きてます

すこやかに老いたし今朝の空の青

てきばきと進めた駒も小休止

生きている幸せお茶をゆつくりと

和歌山市 武本 碧

胸のすく台詞が効いたプロポーズ

口数は少ないけれど骨がある

3Kの仕事を買って出る勇氣

夜型で酸素不足は親ゆずり

和歌山市 宮本 三喜夫

本心でものを言えない立場です

ヤット慣れこれからの時配置替え

映像で健在示すフセインめ

アメリカが戦闘やめるホツとする

和歌山県 中 後 清 史

幸せは聞いてもらえる友が居る

サーファーは波のチャンスを見逃さず

子の手前乗らねばならぬコースター

渋滞を横目にバイク走らせる

鳥取市 福 永 ひかり

無理しても笑えと癌の予防策

何となく分かって使うカタカナ語

恐ろしさ核に匹敵するSARS

日本語だんだん下手になって行く

鳥取市 杉 本 孝 男

老母たより金釘文字の風邪ひくな

惜別の椿は昨日より白い

旬体感 蟹の刺身がたまらない

ねぶちゃんも田にしも消したブルの爪

鳥取市 山 宮 愛 恵

老人へメリハリつける時間割

不条理に水をほしがる喉仏

はるばると湧水汲んで来てくれる

五カ月で葬儀六回なんとしよう

鳥取市 山 本 益 子

ゆつくりと充電の日は本屋行く

歩くことで元気をもらう老いの坂

バレンタイン割れチョコ届き苦笑い

葬送譜人生の幕あつけない

鳥取市 宮 脇 道 子

赦すこと出来る友だけ輪に入れる

新肺炎黄砂に乗るなど祈ります

ヨロヨロと我を消しながら渡る老い

嫁姑一線を引き乗る車

倉吉市 猪 川 由美子

添加物多くて舌が悲鳴上げ

拉致被害者 政の餌食にされたまま

皺深も笑わぬわけにやいかんでな

筍が裾分けされて輪を広げ

倉吉市 松 本 よしえ

にんげんに用心しよう鬼の会

花粉症鬼もようやくおさまった

散る花の洩らす吐息に気付かない

三歳の写真おしゃまなVサイン

倉吉市 野 口 節 子

一日は二十四時間もがいても

日課には入れてなかったハプニング

病院の梯子で今日も暮れました

配置替えしたい私の目鼻立ち

倉吉市 山 本 玲 子

マネキンと目が合い試着してしまふ

気安さが知らずしらすの無遠慮に

楽しんで買う百均の野放図さ

物怖じをとときには隠れ蓑にする

倉吉市 米田 幸子

意に添えぬ私如何ようにもなされ
お手つきをしてから運に見放され
おふくろは唐天竺におわします
やつかみが何じゃかんじゃとこうるさい

米子市 本吉 宗光

物価安 年金削除するのかい

有事法北朝鮮は仮想敵

S30大型二種の免許持つ

右折車が切り込んで来るT字路よ

米子市 永井 三津子

春うらら花見だスリだ置き引きだ
わたくしを強くしたのは亡夫です
子も巢立ちやつと私の春となる
面接に茶髪はいないなんです

米子市 門脇 晶子

二世帯をつなぐ階段きしみ出す
表紙から中身の声がきこえます
表紙から作者の顔がすけて見え
人生の最後は神と手をつなぐ

鳥取県 裕 寛子

どなりたい手前で孫の瞳に出合う

生返事今日も一日曇るらし

イエスノー曖昧だから続く仲

メモのはし生さざまチラリ見たような

鳥取県 太田 幸枝

八十歳部品あちこちいたみ出す
タマちゃんを追っかけている平和の世
暗い世に愛の花粉を飛ばしたい
雨の日は野良連休で骨休め

鳥取県 小谷 はるみ

心から笑うと寿命延びそうだ
草花が救う命もあるだろう
夢と金ないところから飛び立てぬ
山彦は昔と同じ答えだす

鳥取県 小谷 孝美

人生を仕切り直している茶髪
嘘だよと言ってくれたら楽だろう
百均と思えば迷うことはない
品のある和紙に私の字がすねる

鳥取県 乾 喜与志

お祭の山車ゆらゆらと笛の音
いぬ連れて清々しさと朝の恋
ドキドキドキ九十九坂のぼつて
白寿から花は浄土へ向いて咲く

鳥取県 平井 栄翁

計らねど欵が年年重くなる
表札に春が来ました一人増え
新人が上手に尻尾振る選挙
親の傘離れて雪の重さ知る

鳥取県 下田 茂登子

人間も家もボロボロ欠けて過疎

無投票町が静かに暮れた夜

無投票それでも祝いの酒はいる

接木してみてもやっぱし折れた枝

鳥取県 國 森 武子

無理しないくらしになれて平和です

あの人に会えば心がゆらゆらと

連休に入りたんばはにぎやかに

毎日のくらし納得して生きる

鳥取県 近藤 春恵

心にもない愛想に寒くなる

農婦われ洗ひ晒しのモンペはく

花嫁を迎える門を広く開け

春うらら仏も鬼も浮かれ出す

鳥取県 田村 きみ子

草花で押し絵してます今日は雨

美しい指でパソコンパツパラパ

貝になる勇氣がなくて口はさむ

家事一切任されている頑張ろう

鳥取県 鳥羽 直市

偽物でいいよふたりで光らせる

腹割って話せばけんかせずに済む

不況風吹いても昼寝止められぬ

一杯の酒に元気を貰つて

鳥取県 鳥羽 玲子

決心をちよつと洩つて深い悔い

検査値へ夕べの酒が顔を出す

嘘言つて嘘がどんだん首しめる

いい話聞いた一日食はずむ

鳥取県 石尾 かつ乃

野仏を囲んで咲いた曼珠沙華

明日は咲く花の鼓動が手に取れる

五月晴れ三日続きの鍬仕事

定年のない私の野良仕事

鳥取県 山下 節子

秀才じゃないがええつちややさしい子

変り身の早い人です敵もある

ゆとりある暮らしも出来ぬままに老い

グロッキーゆつくり癒す仕舞い風呂

鳥取県 佐伯 やえ

ふる里にひとつ残っていた仁義

つなぐ手があつて明日も楽しみに

畑の真ん中で亡父のことばを思い出す

愛一途花の水やり欠かさない

鳥取県 西沖 彰雄

人狙うほど持ちたいな大金を

まだ先は長い年金貯めている

人生はドラマ逆転劇もある

弱気にはなると叱る別の僕

鳥取県 前坂 なお美

あなたの目みれば呼吸も乱れだす
明日こそあしたこそはと夢つなく
あちら立てこちらでも立ててグロッキー
特製の毛バリをつけて恋を釣る

鳥取県 平尾 菜美

五月晴れ思わず軽い返事する
対岸の火事に水鉄砲を撃つ
すれ違う勤務ふたりの砂時計
落ち着かぬ噂を入れる火消し壺

鳥取県 西川 和子

紫陽花を活けて明るくなった部屋
田んぼから緑の風のさわやかさ
朝日差す緑すっきり色を増し
週休七日 今日は何して過そつか

松江市 川本 畔

はたん散る鳥が尻尾を振ったから
軽い話だ春風に舞っている
湧き水よロマンを少しくださいな
突然にボーカーフェイスに降るロマン

松江市 安食 友子

親指のコントロールで食べてます
魂胆は最敬礼に潜んでた
七色の虹恋しがる汚濁の目
なよなよも一皮むけばこわおもて

松江市 佐野木 みえ

鞍馬山登る牛若忍びつつ
仁和寺の桜も共に散る風情
娘とデート哲学の道南禪寺
葉桜となって都も暮れて行く

出雲市 岡 あきら

遠い日ののどかさを見る人形展
スーパリーの野菜尻目に苗を買う
野菜苗植えると明日が弾みだす
うるさいと思う日もありふたりきり

出雲市 佐藤 治代

光る日があるかも知れぬ米を研ぐ
いつからか静かになって夫婦老い
叶わない事はやっぱり神頼み
人形展ここまでやるか人の技

出雲市 富田 蘭水

太陽を拝んで一日引きしめる
さくら餅生さる幸せかみしめる
虫一つ殺さぬ顔にある魔性
好きなものばかり食べては病んでいる

出雲市 小玉 満江

選挙戦終えて安堵の花みずき
浜名湖のみやげに買ったハーモニカ
ニトロ持ち南無日蓮の女坂
人のいい男の後をついて行く

出雲市 石倉 美佐子

雨の日は雨を恋うてる紫木蓮
背を向けた人に白々夜は明け
泡吹いたことも漫画になる貴方
転ばないでと夫に一声送り出す

出雲市 板垣 夢 醉

夫婦独楽回らぬはずよ油切れ
太陽が帽子かぶれと燃え盛る
わが家よしステコ一枚酒が飲め
夕食を待たずにビール飲む暑さ

出雲市 久谷 まこと

風評に踊らされてる影法師
騒然と暗い新聞日日続く
花に雨雑草生きいきと背伸びする
空元氣出してもどうせ歯が立たぬ

岡山市 井上 柳五郎

体調を共に氣遣う友も老い
十指にも滴たぬ竹馬の友の数
折角の就職したに五月病
新緑が誘ってくれた万歩計

岡山市 福原 悦子

試歩一步許され笑顔しています
苗植えて次代の森を信じてる
耕せば生きる指針の日課です
陽気な顔で点滴の苦を見せぬ

岡山県 富坂 志重

お守りして育てた孫がお八つくれ
うたたねに孫が毛布を掛けてくれ
やがて来るその日のために徳を積む
嘘を並べて帰る見舞に一人泣く

竹原市 三宅 不朽

火の車それでもお寺さんへ寄付
振り向けば妻だけがいた風の中
掌の甲で拭う泪に嘘はない
牡丹ぶすぶす酷い笑顔だと思ふ

竹原市 時 広 一路

渡り鳥忘れず寄ってくれた庭
医者通い介護保険は掛けるだけ
温泉へ行つて帰つて一時間
欲するり人の心に入り込む

竹原市 正畑 半 寛

愛読書一冊持たぬ男なり
人間を信じた眼から出る笑顔
いやな風にはなびかぬ竹の心
水たまり地球に小さな窓が開く

竹原市 古谷 節夫

政治家の疑惑晴れずに消えている
ラストシーン妻と並んで切るテープ
手も足も胃も青空が好きという
途中下車先祖の墓参まず済ませ

自選集

橘 高 薫 風

瞬息の間を生き抜いて生き余す
木洩れ日のこんなに美しい童話
ペンライト今日は喜劇のフィナーレ
猿が手を引きずっている俊平忌
仏恋大日の名の大らかさ

齊 藤 効

クレヨンが伸ばしてくれる子の個性
青空をぎゅっと抱きしめ生きている
一生に何個剥くのか茹で卵
夜ざくらをうっとり映す水鏡
タンポポの鼓動を刻む万歩計

田 口 虹 汀

気球万才春のオゾンを欲しいまま
春霞 下は子供の春休み
百に手が届いていても弟子は徒弟
川柳塔も唐津で会った人がいて
唐津には世界に誇る山笠がいて

通らせてSARSの熱を知る装置
靴踏んで詫びながら拭く掏摸の助手
料理されまいと素数の背番号
欄干鋳物 モチーフ浮かび光る水
頂いた名刺の誤植指摘する

竹 内 紫 鏑

この歳になって分かったことがある
古時計できない事と出来ること
辛口の批評は少しひかえ目に
病名が三つも載っているカルテ
朝昼夜 六種の葉分けて飲む

田 中 正 坊

他人ごとでないビーボーの音が止む
当分は元気でいたい腹八分
遺言を書く氣にさせた千羽鶴
原稿を書く百均のボールペン
あとはもう走らぬことにする余生

玉 置 重 人

春爛漫 婦唱夫隨の箸をとる
何不足ないが世相が荒れている
ケータイに押され大正遠くなる
おんぼらと生きてじわりとまだら呆け
氣に入らぬ話は溝へ捨ててくる

恒 松 町 紅

遠山可住

保険証忘れたで済む顔なじみ
もったいない雨が降ってる海の上
ひとりになってからを女に見る強さ
悪友という気ごろの良い仲間
その先が見えるときっと淋しから

土橋 螢

愛情のしるしに鯛の頭つき
真実を探して歩く月あかり
耕してやがてみどりになる野性
一切を忘れることのおしあわせ
昭和から平成十五年まで踏破

西田 柳宏子

入院も地獄の沙汰も金しい
夏の日笑って覗く朝の窓
経過よし三度の病院食うまし
人恋し柳友の顔去来する
阪神が強いテレビにかじりつき

西村 早苗

花の香もミックスしたよない風だ
酔い心地自由お隣泣き上戸
千手観音指一本から数え
留守ですか土間に回覧板などがあり
原因は陽気のかげんとかいうて

仁部 四郎

退屈の虫がおカネを食べたがる
退屈に見えてゴロ寝の胸のうち
退屈な男読むべき本を買う
退屈と言われて自殺したお人
退屈な日もあつてよし古稀の坂

野村 太茂津

宮詣で米寿誕生胸張って
命拾うて歓喜溢れてくる感謝
倅せは寄つてたかつて励まされ
歓びを誰彼なしに話しかけ
癌告知米寿最期を覚悟した

波多野 五楽庵

骨箱をボツンと飾る無宗教
昨日も今日もトランベットの欲しい月
百懺悔しそうな数珠を持っている
寝言言う妻よ今夜も不倅せ
墓石累々月も迷子になりそうで

藤井 明朗

長寿御礼ひ孫二人目会う感謝
昭和初期の不況再来金運に見放され
古い話をそれから孫が聞きたがり
戦前戦後のくらしが元氣な泉になってくれ
世界も不足悪病まではやり

藤村 / 女

玉砂利を歩いて神の声を聞く
スケジュールたつぷり余生とは楽し
たつぷりと手間ひま掛けた塩こんぶ
捨てるもの捨てたつもりがまだ迷い
捨て切れぬ衣服並べて土用干し

芳地狸村

売り込みにあれやこれやの漢方医
（北京五句）
軽業のアクシオンうける雑技団

いろいろの病に効くと中国茶
地下鉄のホームにゴミの顔がない
ひと駅をためし乗りする地下の駅

宮口笛生

晩酌にだけにしとけと言われても
車だから今日はのめない のみません
酒をのむお陰で風邪も引かずいる
達者です朝も一ぱいコップ酒
自慢にはならぬ空瓶溜る酒

森下愛論

禁酒して朱色の夢に追われている
輪の中の孤独よ酒を恋しがり
暗闇に置き忘れたる美酒の味
いのち燃えうず巻く修羅を乗り越える
飽食の喘ぎカラスに嗤われる

八木千代

牡丹匂う白鳥去ったあたりから
県境の海にぼっかり牡丹島
島からの電話 牡丹の香を連れて
牡丹苑つづく此の世と思われず
花は散る 島の暮らしはそれはそれで

八十田洞庵

ブランドのルージュに男めまいする
大正の女の無言土間にしみ
赤裸々にあばく評論飯の種
三猿主義波は静かで恙無い
人肌の言葉がぬくい里の道

両川洋々

亡父の地図たどると亡父の声に逢う
善人の舌がもつれている嘘だ
旧友の一人へ果し状を書く
縄文の森を死なすな開発よ
ガラガラの野望だ浄土までつづく

阿萬萬的

おだてられつゝい良心が軽くなる
垂れ眉毛嫌な男に似てる僕
あきらめも手つだい細々生きる道
自己監理つゝおろそかな日々続く
自己主張過ぎて周りにうとまれる

石川 侃流洞

優しくしよう骨を拾ってくれる嫁
元気でなだけで送った父の胸
僅か一円 魔法に動く市場籠
野良猫が妻の匂いを嗅いで来る
鑑定団に会うまで秘宝の壺だった

板尾 岳人

愛という文字を訳したことがない
雨の音好きで濡れてる男傘
寛の音母が叱ってくれた庭
申し訳ないがとつても亡母が好き
真つすぐに歩けばわかる愛の傷

奥田 みつ子

カミューの苦しみ底にロダン展
風薫り許せ許せと囁いた
下萌えよ 草もわたしも生さるべし
人の世の苦さも楽し露の臺
このままの自分でいいか月に問う

河井 庸佑

長い人生無駄にはしない回り道
点滴の落ちるしずくへ目を凝らす
どん底もプラス志向で挫けない
子の嘘を信じた振りで聞いてやる
微力だが切り札胸にある余裕

川島 諷云児

まだ欲があるから人間続けてる
幸せと苦しみ噛んできた奥歯
運不運ばかりではない人の世は
おたがいの過去には触れぬ縄のれん
川柳のコースにゴールなどはない

木村 あきら

空の碧 海の青さへ鳩が舞う
四千杆 黒潮越えて生き延びる (大戦回顧)
一日一善 極楽浄土見えてくる
朝夕にやすらぎの鐘神宮寺
舗装路を破り雑草花咲かす

工藤 吟笑

荒れ狂う海に男の詩がある
海の青二つに割って大漁船
木を伐つて地球の水も涸れてゆく
広い海知らずに肥る養殖魚
肩の荷を降ろして語る母の海

黒川 紫香

同じ葉毎日飲んで生きてます
同じ顔してデンデン虫が庭に居る
ばあちゃんが一番うまい子守唄
立話みんな聞こえる塀の裏
良薬はいつ何処で効くのか不思議

小西雄々

幸せを方程式で打算する

店じまいしたと聞いたにまたチラシ

お土産の面目たもつ松葉蟹

面目を気にしプライド顔に出る

歌にならぬ古時計なら持つている

小林由多香

家計簿は赤でも飯は食っている

給料も理想も高い方がよい

縁談が卒業式を待っていた

おすそわけくれる近所もなくなった

賞味期限真っ赤にいちごトマト熟れ

傘川柳本社句会 (水府忌)

日時—8月6日(水) 18時・18時50分締め切り
会場—三井アーバンホテル JR・地下鉄弁天町すぐ
宿題—△ホテル・上野多恵子 △驚く・竹森 雀舎
選者 △鈍行・杉森 節子 △脱ぐ・河内 天笑
△握る・磯野いさむ △ほか席題一題
各題2句 会費千円

第77回 大阪川柳の会

日時—8月5日(火) 17時開場・18時締め切り
会場—サンケイビル本館322号室
会題と選者 △顔・森田 栄一 △うつかり・森中恵美子
△出口・寺川 弘一 △炎・磯野いさむ
各題2句 席題なし 会費千円

反戦反核平和詩歌句集へご参加を

反戦反核平和を願う文学の会は、別紙の要綱で表記の詩歌句集に掲載する原稿を募集しています。川柳部門では岩佐タン吉・川端一歩・塩満敏・田中正坊・森村美花の五名が呼びかけ人となり、あかつき川柳会(日川協加盟)が協賛しています。

参加負担金は、一ページにつき千円で、七句を掲載し、句集一冊を配本することとしています。新作・旧作いずれでも結構です。七月三十日までに原稿用紙に「川柳」と明記、住所・氏名を記入の上、負担金を添えて送句先または呼びかけ人宛てにお送りください。皆さんのご参加を心からお待ち申し上げております。不明の点は、呼びかけ人にお尋ねください。

送句先

〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満敏

あかつき川柳会

第3回 すみさか未来館誌上大会

課題(各題新作2句ずつ4句1組)

「空」(読み込み可)

齋藤 大雄・大木 俊秀・吉實 井児
泉 比呂史・西来 みわ 共選

「自由吟」定本 広文・小林由多香・野村太茂津

會田規世児・石田 一郎 共選

用紙—便箋またはB5用紙 投句料—二千円

締切 7月25日 10月初旬誌上発表(発表誌呈)

投句先 〒382 須坂郵便局私書箱18号

すみさか川柳社宛

水煙砂

奥田みつ子選

河内長野市 石堂潤子

花菖蒲女さらりと美を競う

二人静ひっそり咲いて恙無し

薔薇園でお伽の国の人となる

本当は光つてみたい霞草

紙コップ握りつぶして怖くなる

雑音に取り囲まれて居る孤独

神戸市 両川無限

仏にも鬼にもなれず子を叱る

点線の先に本音が見えてくる

切り札の数では妻にかなわない

ブライドを捨てた鬼など見たくない

駄目ですか酒に本音をもらしては

笑ったら許したことになるケンカ

藤井寺市 若松雅枝

雨戸繰る母の音から夜が明ける

老骨に鞭を打たせる低金利

着飾れば話す言葉も改まる

五十年あなたが好きとまだ言えぬ

母さんの手料理好きと褒め上手

今だから笑って言える辛い過去

神戸市 山口光久

浅緑やがて大器となる予感

雑草もきれいな顔のめでたい日

義理という杭があるから迂回する

目を休め心の窓で見詰めてる

失敗をたんと重ねたよい薬

心から詫びると青い空になる

田辺市 大峠可動

砂時計 天に広がるのは虚脱

一子相伝たった一人の子が生めず

稲光りわたしの肝の試し切り

仮想空間 君には愛がありますか

余生蜿蜒やがて介護の荷を増やす

高知市 小川 てるみ

全開の窓へやさしい若葉風
寂しくて風に思いを言付ける
春嵐心の傷が深くなる
九十五歳の母へ感謝の胡蝶蘭
行水の昔を知らぬ子のシャワー

今治市 塩路 よしみ

いきいきとひこばえ燃える森は夏
ルイヴィトン持たぬが初夏へ燃えている
自分史へ朱の色足して編んでみる
鐘つけば煩惱一つ消えますか
合格へ部屋の明りをみんな点け

河内長野市 大西 文次

もういくら吹いても燃えぬ火吹竹
そう言えばそうともとれる妻の愚痴
新緑に世代交替花吹雪
山彦が何か用かと言う返事
天国は近くて遠い道標

藤井寺市 俣野 登志子

お隣と仲良し同じ花咲かせ
子が帰省三日前からスタンバイ
風さやか午後のひとときシヨパン聴く
赤い服着て行こうかな今朝の艶
恋一つ捨てた砂浜様変り

東京都 やまぐち 珠美

生きてきたとおりに夢が蛇行する
花開く秘した甘美解きながら
生きのびるヒト科の耳が目が渴く
遠花火あなたの問いへ上げぬまま
身の痛みこころが死ぬと鈍くなる

奈良市 乾 春雄

家計簿が衝動買いを叱ってる
挨拶を褒められ走るランドセル
菜の花へ遍路が作る白い道
もう良いか声が泣き出すカクレンボ
級友の夢カプセルに子ら巣立つ

羽曳野市 吉村 久仁雄

血圧を測る婦長が小百合似で
礼節がもう石橋を叩かせず
カラオケも小唄でうたう父の芸
虎キチを極めた友のニーチェ顔
名匠が孫抱くように道具置き

札幌市 三浦 強一

この冬も越えた幸せ福寿草
絵の具皿洗って春の色を溶く
追憶の母に怒った顔がない
価値観の相違とガラクタを磨く
大笑い口から鬱が抜けてゆく

青森県 富士トキ

東京都 井上つよし

地下道が初めて出来た田舎町
鳩ポッポ作り笑いは難しい
子よ孫よわたしより先許さない
値打ちなしお金も汗を見なければ
愚痴いえばこけし悲しい顔をする

秋田県 秋野 宏

悪いのはみんな私で恙なし
減反の無念を怒る田の嘆き
三兄弟どの子も婿の候補です
百態の羅漢百の修羅を見る
突破口わたしは誠意押し通す

日上市 加藤 権悟

抜擢のうわさに快いくしゃみ
異動期の椅子にくしゃみが多くなる
少子化のひょうたん島に子がいない
少年の箸コンビニの味になれ
嘘泣きの涙はなんときれい過ぎ

野田市 那賀島 雅子

路のとう春の生命を噛んでみる
わが影のゆがみに気付く水たまり
散歩道よその時計の音を聞く
用心をしながらも聞くほめ言葉
また来るとリュックをゆする旅の人

最初はグー相手の腹をさぐり合い
キャンパスは青く塗ってる曇り空
いきり立つ耳にのんびりオルゴール
花園に恋の刺客が潜んでる
ブランコの背中押されて降りられず

横浜市 近藤 道子

雑草のたくましさを知る春の庭
肩の荷を降ろして夫と旅に出る
図書館で脳の軽さをいやと知る
じつくりときつい一言かみしめる
新茶飲む生きた喜び味わって

横浜市 芦田 鈴美

体調の異変を酒が嗅ぎ付ける
母の日をお祝い出来てありがとう
買わないと当たる気がする宝くじ
日の丸を見下ろしている都知事室
本題へ助走の足がもう纏れ

横浜市 川島 良子

結論を急いでまたも蹴つまずく
正社員よりも威張っているパート
ジムよりもストレス効いたダイエット
頑固者同士でウマが合うらしい
待つてると鳴ってはくれぬ電話ベル

富山市 松 見 た え

ワンマンな親父何だか淋しそう
やむをえず嘘つき通す人助け
介護士の愛に頑固も頭下げ
今日もまた元気な朝で感謝する
不器用に生きて人には喜ばれ

京都市 清 水 英 旺

山なみに沿ってひねもす雲がゆく
五月晴れ愛妻弁当目で食べる
濃い緑さらに濃くする走り梅雨
ひんやりとシロツメクサの花むしろ
花盗人諷める筆は怒り肩

京都市 前 上 英 一

千年の銚を支える縄の自負
正論を吐いて孤島へ流れ着く
球児らの汗が眩しい雲の峰
欲一つ捨てるときつと風の海
町衆の汗とはしる辻回し

大阪市 升 成 好

箸紙に書きとめているいい話
女房に図星つかれてメガネ拭く
的を得た苦言にびくり眉動く
薬より歩けと医者のアドバイス
副作用くすりの薬要るカルテ

大阪市 尾 崎 黄 紅

後ろから押してくれるを愛という
靖国は遠い護国に会いに行く
柳歴も万年筆も五十年
満身創痍ためらい傷の痕ばかり
嘆かわしひとは見掛けの世になつて

大阪市 井 丸 昌 紀

友達もマニュアル通り作ります
チャンスやで悪魔がそつと囁いた
九回裏二死満塁に出番くる
自然体思わぬチャンス引き寄せた
芯ずれたこまを皆で回してる

泉佐野市 稲 葉 洋

縦横の掟習った昔の子
丸くなる長く人間やったから
嘘でもいい信じてあげる名演技
抑揚の読経に和む孤独感
悲しみは癒えたが淋しさがどつと

堺市 藤 井 一 二 三

甲高い声で曳山演じ上げ（長浜子供歌舞伎）
鐘をつく老いの背中にある祈り（大通寺）
雲か花か桜並木は目の限り（海津大崎）
乾いた声で笑う私は負けている
国宝の芸しつとりと笑わせる

東大阪市 田中 美弥子

温泉巡りできる幸せ亡母想う
幸せの一齣夫婦酌み交わす
力み捨て楽に息吸う余命表
振り向けば悔やまれること多すぎて
雨の日は己の雨を持て余す

枚方市 二宮 紫鳳

新緑に負けじと男児誕生す
孫二人抱いて至福の時にいる
記念樹の育ちに孫の笑顔かな
花水木 植えて誕生祝う庭
母の日に何にも優る孫誕生

枚方市 小川 良吉

機嫌とりちよつと愚痴つて手酌酒
家の中妻ご機嫌で恙なし
生き下手で負け組ながら達者です
欲へらし楽になれよとお寺さん
里山で萌黄の風に癒される

八尾市 松葉 君江

やんわりと聞けば心の窓が開く
波のりの下手な夫婦の泣き笑い
星まつり仏さまにも笹のもち
飾り気のない人柄で長続き
少しずつ心を白くする写経

八尾市 脇 俊子

古希という踏切の前立ち止まる
木漏れ日の光のダイヤ風にのり
糸電話孫と興じてつい本音
四季があり出会いがあつておもしろい
夢の中自分の居場所探してる

八尾市 鷺見 章

名曲を遠くにききて涙しぬ
シンデレラ姫に恋して夢空し
涙して悲しいドラマ病むベッド
捨て猫に傘が集まる通学路
テレビみる飽食日本有難さ

大阪府 小栢 こずえ

老いの知恵うまく生かして生き上手
窓あける山のみどりに気をもらう
仕切る人負ける人居て家平和
今日の愚痴一晚寝せてからに言う
頼るのは農機しかない老農家

神戸市 山田 婦美子

逃げてゆく夜をつかんで夢うつつ
目の前の胡散臭さに気づかない
売り言葉かえせぬままの暑い夜
不都合があれば悪者演じてる
一言で相手を変えるこつを知り

神戸市 伊勢田 毅

A型の蟻で先頭信じてる
産卵の亀の涙に嘘はない
最後まで読んでなかった契約書
素うどんが好きな年金旅仲間
初孫の服あれこれと夫婦揉め

尼崎市 河津 正治

新生活 夢盛り込んだ羅針盤
一声を掛けて漕ぎ出す渡し舟
出合いから出逢いと変わる赤い糸
決断のときだと妻に背を押され
ほんのりは女に似合う甘い色

和歌山市 内田 結実

垣間見たお浄土に酔う善光寺
神妙に手を合わせるのも私利私欲
何よりの宝は達者いままさに
鮎の季を忘れるはずがない友よ
草花に似た優しさが好きになる

和歌山市 喜田 准一

背凭れがなくて意見に芯がない
さあ何かやろうとすれば向かい風
胸騒ぎしたよいつも結果論
見栄を張り過ぎてプライド捨てている
激論を交わしたあとのいい答え

和歌山県 辻内 次根

平凡な暮らしにもある物語
幸せと感じた時に空を見る
この土地で悩む浮いたり沈んだり
順調な時は矛盾を気にしない
信用で成り立っている箱の中

鳥取市 横田 春名

堂どうと反論する子見つめてる
産毛筆嫁ぐ娘の荷にそっと入れ
不器用な息子いい嫁連れて来る
フウフウと息かけ合って五十年
生きる知恵歳を重ねて湧いてくる

鳥取県 奥田 保子

今日もまた笑顔が出れば良しとする
親と子が似ててそんなにおかしいか
美の力信じて絵筆とっている
万歩計付ければ散歩したくなり
毎日が日曜日にも飽きがきた

鳥取県 植田 照子

青春の恋の悩みもセピア色
美人ではないが笑顔の良さに惚れ
お互いの道が譲れず日が暮れる
いつでもどうぞ心の扉開けてます
スランプと開き直って胸を張る

岡山県 国米きくゑ

民謡の似合う日本が消えていく
情報はどうあれ米は研いでおく
さらさらと虹が生れる児の瞳
暗号が解けずゲームの刻止まる
野菜料理一番好きな長寿箸

府中市 馬場利子

雑草も花を咲かせて自己主張
錆びついた五感なだめる空の冴え
ペン先のけじめけじめに捨てるうつ
苦も楽も余白に残る風の彩
孤独からまだ抜けきれぬ石を積む

愛媛県 花岡順子

手をつなぐ森の空気が柔らかい
若鮎の味故郷は良いところ
良いものに触れてセンスが磨かれる
親の基準が僕の頭を越えている
優しさで油断を誘うのは詐欺師

愛媛県 安野案山子

筍の勢い欲しい小商い
一日の疲れを飛ばす生ビール
化粧する首へ老化が忍び寄る
華やかなネオンが落ちて別の顔
老犬が尻尾を振った過去を悔い

南国市 小原圭二

巢作りに迷いを見せぬツバメ二羽
ツバメ二羽規格どおりの巢を作る
田植えから急に緑が光りだす
賽銭を入れて気にする遣い道
神の名を唱えて虫を踏みつぶす

高知県 桑名孝雄

雉子郎の武蔵に託す美学とは
ひょうたん島孫に重ねる子育て期
あと十年生きる背広を愛おしむ
みちのくや嗚呼はるかなり元任地
組板で跳ねて終りとする美学

唐津市 坂本兵八郎

浦島の目で故郷の駅に立つ
故郷の言葉に融けてきて五年
故郷が胸襟開き出す五年
故郷の若気の至り傷の跡
海の色だんだん濃くなる故郷

アルゼンチン 松井美稚子

価値を告げ旨いと言わせるブドウ酒
人間もいずれ無形の雫なり
シンセサイザー弾いて祖国を引き寄せる
意に添わぬ事をも染める茜雲
時期待ちの安楽椅子は落ちつかず

羽曳野市 森 下一知

同じ轍踏んだ他人を笑えない
ライバルに塩を貰った借りがある
晩酌の栓を緩める鬼の留守
ケイタイに彷徨う夜を掴まれる

大阪府 大屋敷 婦美子

泰然と山も黙して語らない
思いやる心の深さ学びたし
孫の筆 生きる力を壁に貼り
いくたびの挫折でわたし強くなり

岐阜市 平野 あずま

日本語を磨いてほしいテレビアナ
大リーグを茶の間に連れてきたテレビ
沈黙の時間欲しくてテレビ消す
田植え終え里は一気に若返る

新潟県 高野 不二

出世せぬ子が孝行をしてくれる
俺に似た孫に嬉しくなってくる
物価が下がって年金のありがた味
病気にも新型が出る新世紀

和泉市 小坂 凡英

景氣予測ウイルスにまで裏かかれ
旅ゆけば風情はあれど今日も雨
筆順を訊かれて孫に不覚とる
鬱にこそ略字が欲しい老眼鏡

愛媛県 黒田 茂代

生まれたての朝の光へ深呼吸
細胞はいまも忘れぬ褒め言葉
幸せでないからボケていられない
天界から木漏れ日という斜の構図

和泉市 横山 捷也

ふるさとに僕を知ってる橋がある
カラオケに音痴の仲間居る安堵
ネジゆるめ老人会に仲間入り
大海に出るせせらぎで洗う足

鳥取県 福西 茶子

肩書きもとれて爽やか定退日
マニキュアを塗ってまだ会う人がある
老船の過去に触れない終航日
即答はしない野菊のプロポーズ

米子市 小塩 智加恵

家庭教師まだ打ち解けず標準語
共に老い共に労わり今同志
三連休関係無いと草を引く
声の無い友を案ずる冷える朝

今治市 渡邊 伊津志

肩の力抜けぬ悲しい性を持ち
摩るほどに段階の増す墨の色
陽炎が僕の心を解きほぐす
腰の位置ずらすと性根見えてくる

秋田県 湊 修水

税上げる一つ覚えの永田町

新風邪に特効薬の無い怖さ

脱いでみてまた袖通す春の冷え

トラ吠えるアレヨアレヨの一位説

日高市 根岸 方子

スケジュール埋めて心に灯を灯す

友の愚痴四コーナーでムチになる

鼻歌で散歩心が緋に染まる

カラオケが延長させた余命表

東京都 清原 悦子

大空に飛ばしておこう嫌なこと

有り難い事に気付かぬ日々の事

強そうに生きて心が疲れてる

幸福はアツという間に通り過ぎ

武蔵野市 亀井 円女

この顔一つで真っ直ぐ生きた悔いは無い

縄のれん上司の愚痴もいいさかな

自分史のどこを繰っても亡夫が居る

はんなりは一番好きな大阪弁

横浜市 巖田 かず枝

不況風癒してほしい人ばかり

タマちゃんに癒してほしい人だから

ちゃん付けで紹介されたお犬様

ポランティア癒すつもりが癒される

横浜市 金森 徳三

虹が出た妻呼び娘にも電話する

余命とは言わぬ俺には本命です

ど忘れをしたら大変君の名を

青信号続き得した気にさせる

横浜市 布山 嘉信

発泡酒庶民の憩い税奪う

子供の日鴨の親子のお引越し

菖蒲湯の溢れ健康もらいうけ

丹精のバラが心に花咲かせ

横浜市 平 達也

もの忘れ遠い昔は忘れない

妻のため禁煙禁酒やつて見せ

浅漬けに自然感じる老いの舌

母の日に母の母へのプレゼント

静岡市 中西 雅

卒寿の坂一步ふみ出す誕生日

登呂遺跡どなたのものか黒い米

いつ怒るマグマが遊ぶ時間帯

灯台守 映画を偲ぶ御前崎

草津市 久保 和友

国鉄時代のOBと逢う芝田町

来世は天国よりも深海魚

永遠の眠りは怖いなと思う

ひとり旅滝の音より山の音

雑草でも咲き終るまで待つて抜く
京都府 三宅満子

トラ旋風 日本列島駆けめぐる
雨らしい猫がしきりに顔洗う
気晴らしの映画が逆に気が減いり

大阪府 三浦千津子

まごころの温みに消えた蟬り
抜き打ちの試練私にギツクリ腰
春風の真ん中を行くスニーカー
謙虚さが取り柄まあるく生きている

大阪府 池上清治

悪役の素顔優しい男前
紙雛を孫と飾った桃日和
飴嬉し絵も楽しみの紙芝居
内緒事は触れずとも孫喋る

大阪府 寺井弘子

リストラで心は晴れぬ五月晴
人生はドラマのような落し穴
見舞客途絶え病の日の長さ
前置きの長い話で何かある

池田市 多田契子

流行歌ついていけずに三十年
多感です今も枯れずに泣く笑う
媚を売る私の辞書にありません
天のヒイキ笑い声まできれいな美人

和泉市 千葉武
老いらくの恋はむなしく風を突く
優しさを競い生き抜く老夫婦

価値のある男だ鈴をつけられる
封筒も中身も白で冷めた愛

泉佐野市 備後三代子

お隣も女系家族よ柏餅
ふたまり小さくなつて更衣
母の日にひまわりの束賜りて
雨の午後俵せの古い新茶汲む

柏原市 伴洋子

健康増進法さわやかな風連れてくる
断ち切れぬ思いくすぶる指輪跡
いくつもの罪を重ねて人は生き
作り笑い張り付け今日も生きのびる

交野市 田岡九好

人恋しさとて喋るのは大儀
CMのようにお酒が飲めたなら
食べ放題聞いて食欲なくなつた
ミサイルもSARSも逃げるとこがない

河内長野市 木太久正一

思い出を大事にリラの花ことば
早起きし庭の草ぬくみどりの日
大仏次郎の旅の誘いに合点する
朝日浴び生きる力が湧いてくる

岸和田市 雪 本 珠子

言訳をしたくないから貝になる

老いてなお氣の持ちようで青春だ

偏屈も調子者より味がある

粘り抜きピンチを逃れ花開く

岸和田市 亀 井 皎 月

夏バテを防ぐ鰻だ焼肉だ

足を病む女房黙し梅を干す

水茄子が進め進めとお茶漬に

平成の不況浸透街侘びし

堺市 荻 野 像 山

人間は悪い奴だと仁王の目

世話焼きを嬉しがらせる孫がいる

性格が合わぬが飯は同じ釜

ど忘れを認めぬ同士ひとつ屋根

堺市 奥 時 雄

打ち明けて安堵の酒に手を伸ばす

安すぎるブランド偽と知って買い

物真似の本物よりもうまい歌

フセインが整形すませ歩いてる

堺市 河 盛 龍 三

焼き鳥で一杯やればすべて良し

鳴く蛙 妻の寝息を包んでる

古い門苦難の歴史今に告ぐ

優しさで弱い氣持の蜚族

堺市 柿 花 和 夫

風船でストレス飛ばす甲子園

地下街のガイドも出来る停年後

わが道をDNAが歩ませる

地図にない道は恐いぞ楽しいぞ

吹田市 木 村 無 禄

フィクションは好きな淑女とランデブー

春うらら過去へ誘なう花吹雪

神様に苦勞足りぬと生かされる

亡き父母の里が讃岐でうどん好き

吹田市 二 宮 栄 子

糸電話ないしよの話あのねのね

持たされた携帯いつもオフのまま

宅配便里のうわさも連れて来る

カーネーション嫁の真心ゆうパツク

吹田市 須 磨 活 恵

チロチロと燃えて女をまだ捨てず

もつれそうな話しばらく貝になる

美しい夕陽に祈り抱きしめて

優柔不断迷い深める五月やみ

吹田市 木 下 敏 子

好奇心まだ衰えぬ旅靴

主婦の座に興味に追われるカレンダー

父さんのひと言今になって効き

結局は箆筒に仕舞う服を買い

花吹雪わたしの明日はケ・セラ・セラ
高槻市 田中初恵

てきばきといかず心の衣更え
まだ脱げぬ人妻ですという鎧
その筋のお達しですと詐欺師くる

豊中市 藤井則彦

初恋も飽きると変な味になる
虎チャンスなのに童話を読まされる
童話から学ぶ大人の生きる知恵
脱線の話血となり肉となる

富田林市 稲川恵勇

二の足を踏んで女神に見放され
いい恥をかって世間が見えてくる
亡父の歳越えたおまけに感謝する
弱腰へ仏間が活を入れてくれ

富田林市 古田千華

連係でチーム医療の実が結ぶ
好きな風やつと吹いたよ自己主張
母の日にストレス置きに帰る嫁
クルージング日数だけの夜会服

羽曳野市 永田章司

戦争は今も昔も民泣かせ
改革の期待も今は痛みだけ
親の愛子供の肩に重過ぎる
一言の多さが友の数減らす

枚方市 大昇隆広

お金では買えないものが人の価値
子のためにだけ生きて来て母のしわ
我が心の芥流せや夜の雨
父の愛初めて聞いた墓参り

藤井寺市 西村栄一

止まり木の酒が勝手な事を言う
うず潮にせまい心を笑われる
生きとれば好かん奴にも出会います
大声で笑うと元気そうに見え

箕面市 寺井柳童

反戦歌今日もどこかで銃の音
お開きは同期の桜と決めている
あと一人投手交代甘くない
若白髪目立ち気になるDNA

八尾市 平川幸枝

身内の鬼も掟が甘くなり
敵味方ともに神の名くちにする
身の芯を削れば丸く生さられる
意地を張るひとりで決める日の無力

八尾市 田中トシエ

人生訓路傍の石にきいてみる
母と子にまあるい風が吹く公園
ボランテア汗の笑顔が美しい
鯉のぼり少子社会を泳いでる

八尾市 中島春江

留守ばかり子等の声なき子供の日
衣がえ娘の会話奔放に

敬語まだ滑らかに出不ず新社員
月隴外出するも逢瀬めく

大阪府 野田栄呼

することがまだまだあつて命漕ぐ

古稀からは自分を創る正念場
多種多様痛みの記録簿と生きる

六十で七十の老い知つてたら

大阪府 桑田ゆきの

一揆墓まつわる悲話に胸詰まる

草笛の鳴る日鳴らぬ日気まぐれに

サングラス少年にある反抗期

蟻の列怠け心の引つ込みぬ

神戸市 田中章子

自分色自分で塗れば悔いもなし

笑つても泣いても一生なら笑う

DNAとんぴはとんぴ たかはたか

カーナビに夫とけんかの種取られ

尼崎市 古川正子

旬のものを筍ご飯仏前に

雪柳花の零れて風にのる

シャガ咲いて遠い思い出初夏の風

手芸道具想い出詰めて棚のうえ

三田市 石原歳子

バラソルを差すとお日さま雲がくれ
一時間時間を間違え損した気

真剣な顔で夢中の一輪車

注意され子どもが小鼻ふくらます

兵庫県 安達厚

パソコンに凝つて散歩が遠くなる

糠付けて筍もらう山の寺

お土産に方言添える道の駅

耕やせばはねるミミズに手がゆるむ

兵庫県 黒崎美紗子

運動会声よ届けと熱入る

パソコンで得た情報が役に立ち

楽しみの旅を気づかう空模様

青空に男子誕生鯉のぼり

奈良市 成橋邦造

大口で何が言いたい鯉のぼり

鯉のぼりほら吹くような口あけて

古時計よく遅れるが休まない

古希迎え迷うてばかり孔子さま

奈良県 江波正純

霧雨に煙る屋久杉人憂う

お早うを言うて昨日と別れ告げ

人情のいちばん奥にある湿度

テッセンとバラ咲き競う垣根越し

奈良県 藤村重之

旧友と夕日眺める二月堂

慌てても月は動かずじっとする

路地裏に人の温もり揺れ動く

変わりばえせぬが馴染んだ妻の味

和歌山県 土屋起世子

乾いてる心を濡らす春の雨

春野菜幸せにいる台所

春の譜が転げまわったサラダ盛る

五月病薫る若葉がお医者様

和歌山県 今一歩

萎みそう友の励まし咲く笑顔

開運曆迷ったときの羅針盤

声だけは若いといわれほろ苦く

一服の茶から会話の糸紡ぐ

和歌山県 橋爪佐一

腹割って語れる友は数いらぬ

毒舌の友の意見に動かされ

追伸に心くすぐる文字並べ

バイタリティー喜寿で充電登る坂

和歌山県 森下順子

穂の芽の味見したのは兎かな

気持だけ届けて気持楽になる

わたしのおやつ自分で作る蓬餅

うぐいすの澄んだ音色に包まれる

和歌山県 村中悦男

やれやれと無念とまじる粗大ゴミ

生かされて生きて現在粗大ゴミ

粗大ゴミ栄華の夢が今果てる

粗大ゴミこわされる音声に似る

和歌山県 大坪天涯

いつの日か愛の歯車から出る娘

出る杭で打たれ出る杭今は打つ

鬨の香りを聞いている蕾

晴れてきた夜空 お月様の庭だ

鳥取市 谷岡清子

綿雲に浮く父母の面のせて

傘寿坂ゆつくりのぼる明日は来る

強がりの言葉のわりに温い夫

核兵器民話になる日祈ります

鳥取市 岡田信恵

雨あがり友のメールで心晴れ

驚きがあすへの道を開かせた

息合わせ仲間どうしが支えあう

悲しみを伏せて耐えてる親子です

鳥取市 森美智代

常日頃精進せよと言いつけ

森に来てきのうの憂さの小さきこと

手厳しい意見聞く耳持っている

ブライドも五月の空に敵わない

倉吉市 青 砥 菊 枝

名文にたじろぎ返事書きあぐむ

明日あると信じ独りのパンを買う

思い出にでんと居座る脛の傷

毎日が休みの老いは趣味多忙

倉吉市 酒 井 芙 美 子

笛太鼓響けばじつとしておれぬ

夏祭踊る阿呆と言われても

だんご鼻どこか愛敬憎めない

遺産分け醜いエゴがもろに出る

倉吉市 大 下 智 子

五歩さがり六歩進んで生きている

大人より夢はでっかい六歳児

赤ちゃんのどんな顔にも沸くまわり

ホームラン松井のニュース皆が沸く

米子市 猪 森 スミエ

落人の知恵をつないだかずら橋

豊作と指切りげんまん鍬洗う

湖の神様田植えすみました

高波の機嫌窺う船だまり

米子市 池 尾 保 子

教科書の軽さ未来の文部省

勉強を急がない週五日制

列島を窒息させる震度七

風糸を継ぎ足し世界眺めたい

鳥取県 吉 田 弘 子

身の丈のくらし年金範囲内

女偏終着駅の足音が

三つ指と三歩後など通じない

節くれの指に隠れている涙

鳥取県 山 岡 久 枝

散歩道植田がなびき労想う

心配を娘らと分け合い楽になる

寝ていても老母の知恵をかりている

どの花も喜び開く初夏の風

鳥取県 西 垣 美 知 子

御仏の悟りを聴いて積む努力

どの道も覗いて見たい好奇心

散りぎわの美学そろそろ書きそえる

会いに行くだけでほころぶ母の顔

鳥取県 西 原 真 一

三日めに目が開き私生きていた

あこがれのナース心電図がぶれる

ひとの手と思つて太い針をさす

病院のベッドゆつたり時流れ

鳥取県 平 木 公 子

赤飯もほどよく炊けて子の門出

嫁ぐ日に母輝いて父無口

口下手も優しさあればよく通じ

時として土足で入る親の愛

鳥取県 藤山弘子

入学へ次のステップふみ出した
入学へ母の力が押し上げる
桜の下ういういしさが見えかくれ
名物の桜今年も二人づれ

鳥取県 岩崎和子

どうしたのそつと言われて涙ぐむ
いつからか笑顔になって鏡見る
美味しいと言われてじつと右手見る
ペン持てた今日は何だか歌が出る

鳥取県 竹信照彦

桜散り白いちめんの梨の花
春嵐に泣く竿踊る鯉のほり
土づくりしろと野菜が怒ってる
うどわらび筍並ぶ春の膳

鳥取県 蔵本悦子

煮こぼれて一人前になって行く
支えられやがて大きな樹に育つ
悲しみをさくら吹雪が消して行く
母さんの今度ははくがスボンサー

松江市 松浦登志子

反抗期覗いてみたい親心
雨みてる私を見るビワの花
新芽だけ狙う毛虫も用がある
散歩道いつもの花が咲く安堵

松江市 山根邦代

のどかさの中にさわやか五月晴
ふじの花山にひと色たしている
雑草が名前呼んでと花をつけ
留守番を隣がしてる田舎です

松江市 松本知恵子

連休は田植えとすらり友が言う
シャクナゲのふわりと庭を化粧する
正直に生きてルールのいろには
自然治癒力タマちゃんの針取れて

出雲市 荒木英子

一人来て森の静寂にかしこまる
減反の四季折々に見せる花
友達は持ちつ持たれつよい仲間
行きづまり扉にすこし風を入れ

安来市 原煩惱児

病み伏して千思万考するばかり
御馳走と思う試食の大根飯
たかが相撲されど哲学だと思う
故郷の春の山から癒される

鳥根県 松本聖子

手を合せ初出勤の無事祈る
虹の橋渡れば亡夫に逢えるだろう
合格を祖父に報告孫の背
此の時勢みんな良い人みな勝手

島根県 福岡 博利
便利さに負けた揚句のツケがくる

歩道橋渡る逢いたい顔がまつ
連弾のもも子さくら子孫自慢
討死もこんなにみごと落椿

島根県 武島 ちよえ

前略と書いてやっぱり受話器取り
初対面心にもする薄化粧

今年また季節の花に会う輪廻

騙されたふりして乗ってみるスリル

島根県 毛利 幸

願わくば時には音のない世界

昼酒に酔うて午睡の夢枕

一雨が木々の緑を濃くする

大木の年輪ロマンを秘めている

倉敷市 撰 喜子

川柳の径で拾った夢紡ぐ

酔えば同じ左遷栄転送別会

年金の重みも背負うランドセル

肩すかしされても友の背を信じ

宇部市 高山 清子

熱燗が最良葉の夫の風邪

騙される心の隅にある欲目

まちがえたボタンに重い後始末

耐えてきた過去を笑える今日の幸

松山市 山之内 八重美
衿足に二十歳の色香うつとりと
うっかりとこぼした言葉拾えない

世界地図戦火の国と飢餓の国
試歩の道スキップしたい夢を持つ

今治市 野村 清美

三人の真ん中に居るヤジロベエ
遍路坂 一期一会の会釈する

例えばの話わたしの事かしら

梵鐘の音が侘しい日暮れ時

高知県 百田 幸

ほどほどに趣味もゆとりもある余生

よく動く曾孫ウキウキハラハラと

何よりも手足自由に動く幸

一城のあるじと夫は威張ってる

高知県 貞岡 佐紀子

春一番私の春は旋風

杉花粉光の中で悪になる

絵ガラスの透明感が眩しすぎ

私よりニコチン様を愛してる

宜野湾市 杉谷 一栄

タイマーにびっくりしてる忘れ癖

口三味線かじった踊り忘れても

先回り神がしているいい出合い

大阪と大書して行くカレンダー

鳥取県 細田裕花

宝石より輝く笑顔素敵です
感動へ心のレンズ磨いてる
ほろ苦い春は黙って歩くのみ

川西市 井本清山

やっと古希まだまだ百は長丁場
古タンス未練いっぱい詰まってる
想い出に耽ると長くなる整理

出雲市 加藤スズコ

窓を開けやさしい風と入れ替える
さくら咲く孫ネクタイの始発駅
あせてものんびりしても陽が沈む

藤井寺市 喜島芳江

辛い時親をやめたい時もある
けんかして勝った子供も共に泣き
席譲る若者照れて場を離れ

岸和田市 坂口英雄

はつこりと土持ち上げて春の匂
居酒屋で充電したかよく喋る
晴れよりも風が好きです鯉のぼり

鳥取県 池澤大鯨

古道具父の形見で捨てられず
古いノート夢みた跡であるらしい
古傷を忘れたふりで生きている

藤井寺市 吉田喜代子

シャボン玉 五月の風と戯れる
奢られてそれから続く肩の凝り
おかえりとしばし軒貸すツバメの巢

高槻市 安田忠子

舞扇老いたる母の凜として
阪神が勝てば疲れもとんでゆく
青空に楽しくゆれるランドセル

岸和田市 土橋房枝

人生を大きく変えた言葉力
お見舞に赤いバラきて勘違い
憧れた一人暮しが淋しすぎ

八尾市 西川義明

腕枕 孫の見る夢覗きたい
拗ねた孫ピアノの音に八つ当り
どつしりと阿吽の呼吸四十年

倉吉市 前田喜美子

人生は曲がりくねった時刻表
記念日は心の中に花となる
野次馬が人のうしろで背伸びする

河内長野市 内海綾乃

新緑と残雪調和大山へ
連休は山菜とりに汗流す
参観日 親を見つけて手を上げる

横浜市 石原 三郎

岸和田市 堤 椿代

誕生日目出度くもない歳となる

期待した醍醐の桜雨の中

石庭も我には猫に小判かな

川崎市 浦野 昭志

手を振ると味方と思う選挙戦

身を削る妻に子供はついていて

巢立つ子にサラ金の罷話す母

大阪市 平井 露芳

録音で流す団地のホーホケキョ

薫る風薫らぬ風も吹く五月

大阪にでつかい名所砂時計

大阪市 中村 忠敬

美人の湯幾度通えば効き目出る

誘惑に弱い性格DNA

キャットフード断固食べない猫を飼う

泉佐野市 大工 静子

差し歯するほどでなし九十二歳

夏柑を数えて今日も暇つぶす

車椅子でホライズンまで行く元気

大阪狭山市 羽田野 洋介

正論を語る勇気が要る世相

アルバムに名前浮かばぬ顔並ぶ

ときめきをそつと見ている影法師

白装束サハラ砂漠じゃあるまいし
不況風 何風吹けば救われる
イラク見て戦後の日本思い出し

高石市 小島 百恵

反抗はしても親父と同じ鼻

カルガモが命を掛けてお引越し

白装束心も白いのでしょうか

高石市 小島 一輝

祇園祭あの日の君を眼で捜す

久しぶりするめみたいな友と飲む

三回も風呂に入った妻の留守

高槻市 執行 稲子

不整脈この世の終りかと思う

またしても毒舌の鬼喉に住む

今更に定年の是非問われても

高槻市 大崎 侑子

志果たせぬままに古稀をすぎ

無神経秘めたい傷に触れてくる

若き日の同志今では右左

寝屋川市 岡本 勲

料理番組のようにはいかぬオムライス

饅頭に邪魔されているダイエット

健康と妻に感謝の古稀祝う

寝屋川市 中川 恵香

独り身の心にしみる家明かり
お弁当子供愛より肉がいい
マイナスもプラスもないと陽が笑う

羽曳野市 濱口 フジ

関門の潮の速さでうまい魚
武家屋敷昔の姿見えてくる
萩焼の底の切目を不審がる

羽曳野市 福田 悦子

天の川渡れば亡母に会えるかも
サンダルを素足ではける夏が好き
紫外線通さぬ黒がよく流行る

東大阪市 今岡 貞人

日の丸が疎んじられて平和です
達筆の亡母が生きてる硯箱
戦中を生きた力が未だ残る

枚方市 莊司 弘之

尺八の音色たなびく薫風に
六十路にもバストまぶしい夏が来た
年寄りの自慢話は長寿薬

藤井寺市 伊藤 アヤ子

春の雨温度調節狂わせる
決断を欲と未練が鈍らせる
はつきりと見えない老いの迷い道

藤井寺市 鈴木 いさお

また出馬余程いい事あると見え
八方を丸くおさめて名幹事
ころろ込め残り少ない髪を梳く

八尾市 笹倉 ひろし

散らし寿司老母のグルメの見せ所
ミサイルの届く距離はと地図測る
名人の腕はあっても職場ない

八尾市 寺川 はじむ

素敵だとはめられ返し高くつき
光る夢抱いてルーキー出番待つ
同窓会未だ残ってた小さい輪

大阪府 藤井 郁代

目の中に蛍の乱舞保存する
山百合の気品と香り足止める
何事も素直に受ける優しさを

大阪府 高木 道子

なんだろう赤ちゃん見ると皆笑顔
大吉のおみくじ信じ乗っている
散り終えし花が教える心意気

大阪府 畑中 節子

聞き役に徹する電話昼の雨
聞き流す事をおぼえた春の顔
ささやかな暮しの中にある笑顔

大阪府 東 文 江

木々の芽が色とりどりの美を見せる
おとなりの農具の音にせかされる
拒否しても自然に年はすぎて行く

尼崎市 桑 原 東 園

軒下の煤を払って燕待つ

天気予報また騙された春時雨

ユーモアのセンスが会議リードする

篠山市 谷 田 多美子

人はみな幸せそうな藤の下

太陽の匂い今日の生命をいとおしむ

桜花爛漫去年とちがう春が逝く

三田市 辻 開 子

老いてきて趣味ありがたくかみしめる

ブランド品粗品ののしで泣き顔に

苦しいか耐えよ努めと亡母の声

姫路市 服 部 一 典

ウインドウへ姿を映す春心

ストレスを発散させる皿もある

冷蔵庫消費期限を忘れさせ

兵庫県 永 井 かほる

アスパラの元気コップで伸びてゆく

トマト苗マント着せたいこの寒さ

御殿マリ奥が深くてなやみ出す

兵庫県 岩 本 美緒子

牡丹一輪手向け華やぐひとり言

車椅子初めて乗ったわたし歴

冬は冬の夏には夏の草の生え

奈良市 田 中 賢 治

雨降りて妻の息抜き長電話

運転士座って居れぬ無人駅

枡席へ旦那座らぬ券を買い

奈良市 中 島 公 市

デイケア声揃えて花の歌

どん底を抜けた男の祝辞癖

魂で送るしかない恩師葬

生駒市 小 西 稔

偽物も時刻正しい腕時計

偽物の仮面はがれた主義主張

ぐらぐらと夢におびえる大地震

奈良県 南 海 美知夫

米パンが受けてこんどは麦のモチ

まじめさを失った児の声変り

アラブよりアジアが怖い世になった

和歌山市 根 田 美 子

母の日は娘より嫁褒めておく

夫植え妻が旗振るさあ田植え

家計簿を開いておいて威張る妻

鳥取市 近藤 秋星

憲法の前文なりと読んでおこ
桜ふぶきの中 野良犬が駆けていき
平和叫ぶだけなら私でも出来る

鳥取市 山口 千代子

老いてなお恥じらい少し残したい
ランドセル親の期待が詰まつて
踏まれても何時か芽も出す花も咲く

鳥取市 西尾 敬之介

捨てた種これみよがしと咲き誇る
山菜が食欲そそる病みあがり
新茶汲む老いた同志のつきぬ夢

鳥取市 河田 のり代

通院は本をバッグにそつと入れ
ピンポンに夫婦喧嘩も中休み
旨い酒下戸を名乗って飲みそびれ

鳥取市 岡村 孝明

陰の汗流し道沿い花並ぶ
春うらら浮かれて夫婦旅に出る
人の世は出会いが運を決めるよナ

鳥取市 竹森 富久江

母の鐘いらぬ心配ばかりなり
二馬力で曳き合いながら旅連れる
邪気払い帰りの道に咲くこころ

鳥取県 鈴木 一弘

釣り人に約束できぬ鮎毛ばり
八十年走りつづけた影法師
種子の無い果物神の意に沿わず

鳥取県 毎田 信翁

あこがれの君たりし人共に老い
共白髪約束妻に先立たれ
何べんも聞かねば耳が承知せぬ

出雲市 川島 和歌子

夕暮れの花屋明るい春の彩
菰椿ボトリと落ちて春惜しむ
髪型を変えて装い謳歌する

出雲市 梅 ミツエ

薬屋根に勢いつけた鯉のぼり
何百年苔むす石に手を合わせ
雨零ぼったり落ちてやさしそう

出雲市 多久和 敬子

うっかりと貧乏神と手をつなぎ
計算が合わぬ家計簿つけている
パーマ屋の椅子でゆとりを取り戻し

鳥取県 持田 多輝子

風化した過去を知ってる古時計
茶柱が立って検診良と出る
嫁として丸く生きてる仕舞風呂

島根県 菅田 かつ子

吊り橋を這うて行こうかハイヒール

小さいうそ何べん舌を抜かれたか

どたん場へそつと櫓を漕ぐ親心

府中市 岩 本 雅 代

栗色のオシヤレかつらで何処行こか

連休の老いの居場所を探してる

パークゴルフいい汗かいてリラックス

東かがわ市 向 山 治 延

水かけ地藏暑いと水をかけやすい

ドラ声が笑いをさそうノド自慢

赤ちゃんの瞳は母を勇気づけ

唐津市 岩 崎 實

景観の棚田苦勞の影おとし

禁煙がやつと勢いづいてきた

赤ちゃんは幸せくれてニコツとし

第十回「さんま川柳」全国誌上大会

課題 テーマ「さんま」 葉書一枚に2句(一人2枚まで)

応募先 〒988-8301 気仙沼市役所「さんま川柳大会」係

締切 7月31日(当日消印有効)

発表 9月10日「第十回大会記念号」誌

発表誌 「大会記念号・作品集」希望者は小為替千円を同封のこと
問合せ 気仙沼市 企画政策課「まちづくり推進係」

TEL 0226-2216600

第36回 和歌山県民文化祭参加 第11回 和歌山県川柳大会

と き 9月14日(日) 11時開場 13時開会
ところ 紀南文化会館 TEL 0739-25-3033
〒646-0032 田辺市新屋敷町1

参加費 1,500円(軽食・発表誌呈)

事前投句(各題2句) 「楽」 山下 修子 選
「魚」 (8月15日締切) 古久保和子 選
「姿」 北山 絹子 選
兼 題 「お陰」 田中 輝子 選
(各題2句) 「深い」 佐藤美知子 選
「笑顔」 川上 紅雀 選

事前投句(欠席投句可)は専用用紙またはB5用紙に縦書き、2句連記し住所、名前、電話、出欠を記入して下さい。当日欠席の方のみ投句料1,000円同封、切手不可。

◎大会終了後の懇親宴はありません。

賞 有り。主催 和歌山県川柳協会
投句・お問合わせ先

〒640-8482 和歌山市六十谷1184-14

川上大輪方

和歌山県川柳協会事務局

(TEL・FAX 073-462-7229)

第50回 八尾市民川柳大会

と き 8月31日(日) 正午

ところ 八尾文化会館4F 第一会議室
(プリズムホール)

近鉄八尾駅下車・西武デパート東隣

会 費 2,000円(呈 作品集、鉢植花、軽食)

宿 題 「家」 中 林 醉 虎 選
「詩」 住 田 英比古 選
「先」 久保田 半蔵門 選
「海」 河 内 天 笑 選
「粒」 小松原 爽 介 選
「眠」 泉 比呂史 選
「王」 宮 崎 シマ子 選

締 切 午後1時(各題2句)

懇親宴 3,500円(希望者のみ当日受付)

主 催 八尾市民川柳会

後 援 川柳クラブ「わたの花」

麻生路郎物語

(19)

職業川柳人宣言

東 野 大 八

川柳人麻生路郎にとつて、最も劇的なまでに悲壮な生涯の一大転機は、職業川柳人の宣言のそれであつた。いかにこのことが、彼自身にとつても畢生の決断力を要したかは、彼自らが筆を執つた二つの記録にも明らかだ。

昭和十一年六月に一挙にして、社を深淵に投げ込むような事件が起つた。私は監督の責任上、主幹辞退を同人会に申出た。どんな事件であるか、発表の限りではないが、それのために同人会を開いて、社運の挽回策を講じることになった。しかし同人の誰もが社を背負うて立とうという人はいなかつた。結局、私に善後策の質問があつたので、今後の経営に対して三案を提出した。その結果、最後の一案である路郎の個人経営に落ちついた。九分九厘まで倒壊した塔を引起す作業は容

易なわざではなかつたが、私は奮然として起つた。家庭には重病人を抱えていた際、私自身も氷囊を頸筋にのせて、七月号の編集にかつた。そしてこれを一転機として、敢然として川柳職業人を宣言した。

これは以前から考えていた

「専門家なき世界は発達せず、能はざるにあらず、為さざるなり」

という自己の所論の実践に外ならなかつた。そして同時に斯界の隆昌と交歓のため、内地は勿論海外柳人までも網羅した川柳人協会を興した。

同人制を廃して社が私の個人経営となると同時に、直接門下のみによる不朽洞会が生れたことは周知の通りである。川柳職業人宣言は、全柳界の問題となつたことは云うまでもない。

「そんなことできますか」

と笑つた人たちもあつた。川柳人外の知己からも無暴の挙ではないかとひそかに危ぶまれ私に新しい職業を斡旋しようとしたが、私はその厚意を謝して自己の信じて道へ、ひたむきに突入した。(「川柳雑誌」NO239・戦時雑誌 奉還・昭和十八年十一月)

私は今まで外部から見れば無暴に等しいことをやって来た。しかし私自身は決して無暴ではなかつた。私の実行して来たことはすべて、十年間位練りに練つて断行したものであつて、成算のない企画は一つもしていなかつたのである。

真似をすることはやさしい。しかし創作にしろ、事業にしろ、未踏の地を開拓するとなるとなまやさしいことで出来よう筈のないことをイヤというほど知つていた自分は、自分一人で練りに練ることを辞さなかつたのである。私が専門家なき世界は発達せずと号して職業川柳人宣言を発表したのもその一つである。そんなことが出来るものかと、真つ先に反対ののろしをあげたのは柳人であつた。川柳人外の友人知己も愕いて、そんな無暴なことをして食えるか、といつて衷心から引き留めてくれた。いい職業を押しつけての忠告をさえてくれた。それ等の厚意に感激したが私は私の意志を少しも翻さなかつた。

ハワイの未知の柳人から、あの宣言は実に悲壮である。甚だ失礼な云い分であるが、万一生活にお困りの時にはお知らせ下さい。応援がしたいからと云ってくれた。

この提言には私も感泣したが、そうした提言に甘えるようなら、こんな宣言はしないので御心配無用だと誌上で答えたにすぎなかった。この一柳人こそ門下となつてハワイ五島に『川柳雑誌』の根をおろしてくれた高沢一浪老である。

これは昭和十一年のことである。ビルの一室を借り、新聞記者の入社を求め、妻子を引き連れて毎日ビル通いをして、専心柳界のため東奔西走をした。(『川柳雑誌』NO362、古稀特集、昭和卅一年七月号)

路郎は川柳の社会進出と、質的向上を思うのあまり、遂に本職を捨てて金にもならない川柳一本で立つことを決心した。

一番読者の多い大衆雑誌でさえ、如何にすれば読者にアトラクティブであるかを競うが如く、多種多様の雑誌は書店の店頭で濃厚な色彩によつて購読者の眼を捕えようとしている。この競争の烈しい中で、薄っぺらな短詩型専門誌の発行と、川柳に関連ある仕事などで安心のできる所得のあろう筈はなかった。加うるに路郎には、その当時五人の子供があった。きまつた職に就いていて孜々として働いても、子沢山の渡世は決して楽ではなかつ

たのだから、路郎のこの企ては、恰もコロンのブスのアメリカ発見に類するものであった。

このアメリカ発見の舟は、みすばらしい荒ゴザを敷いた和船なので、絶えず天候に気を配らねばならなかった。乗組員は私達夫婦と子供達である。勿論、子供達は目当てがあつて乗船したのではない。父が乗つたから続いて乗つたのである。いつまでも浜で遊んでいたい子供もあつたろうし、山手の住宅で残っていた子供もあつたであらう。然し太陽を中心に回っている星は、軌道をはずす訳にはゆかなかつた。

行けども行けども島は見えず、水や空、空や水なる真只中を、船は木の葉のように揺られていった。子供達の一人は舵をとつた。他の一人は櫓をこいだ。時化を食つたらみんながかぶつた水を船から外へ掬み出した。路郎は軸に立つて動かなかった。パロメーターであり、パイロットでもあつたからである。私はおとなしく両手を膝へせて、舷にもたれていた。路郎が川柳職業人を宣言した時は、折悪しく私は心臓を機能的に弱めて半病人の状態であつた。よしんば、達者ならだであつても、私はアクティブでない事は、持つて生れた性格でもありやうが、幼少の時から培われた第二の天性とも云えないこともなかつた。(『川柳雑誌』NO362、古稀特集、嵐を怖れぬ路郎、麻生葎乃)

昭和十一年七月、私の主宰する川柳雑誌社にとつて運営上の一大転換期が来た。それは従来の同人制度を脱皮し、社は私の個人経営となり、私自身は職業川柳人を宣言し、名実共に社会的柳誌としてデビューすることとなつた。(下略、路郎の独立宣言文より)

いつかは誰かがやらねばならぬことであつたが、その頃の川柳に対する社会的認識の度合を考慮すれば、これは冒険であつた。時期尚早であつた。川柳によつて衣食の途を求めるなどは狂人沙汰である。と評する者もあつた。路郎の苦闘はこの時からじまつた。

太平洋戦争中のこと、乱耽(住田)は路郎に一軸の揮毫を求めたことがある。これに対し、路郎は二百円を要求した。当時の傭人の俸給二ヶ月分に相当する金額であつた。

乱耽は「先生、正気ですか」とたしかめた。「ずんと正気だ」と答えたので、それを支払つたとのことである。食満南北であればおそらくその十分の一で求めに応じたであらう。路郎はこのような態度で、自己の職業川柳人としての立場を誇示したのである。その晩年、自筆の肉筆句集の予約前金を募集したが、病を得て執筆不能となり、そのままに他界したが、予約金のみは別封にして各申込み者に返金するように整理されてあつた。彼は職業川柳人としての、けじめを社会に要求したのであつたが、それはなかなか一般人には理解されなかつた。

戦前、日華事変のはじまった頃の大阪川柳

人協会結成以来、戦後現在の大阪文化祭川柳大会に至るまで、大阪川柳界が一致して行動せんとする場合に、路郎、水府の二人はその首席について争いにつづけた。個人としてはなく、吟社の主幹としてそれを求めざるを得ない立場であったが、その場合、特に路郎は尖鋭に執拗に代表幹事、委員長等の地位を要求した。世間的にみれば、川柳雑誌社よりも番傘川柳社の方が歴史も古く、全国的な分野も強大であったにもかかわらず、路郎は断じて譲歩しなかった。その心の底には

——俺は職業川柳人である。君達はアマチュアではないか。団体を結成して社会的に行動せんとする場合、プロに席を譲るべきが常識ではないか——

という路郎の一貫した主張があったのであろうが、誰もそれを理解しようとはしなかった。筆者の如きは常に同席していたにもかかわらず、両者の調停斡旋に口を出すばかりでその心境までも忖度するゆとりをもたなかった。現在、自ら雑文屋渡世を名乗る身となつてから当時の路郎の心境に思いをいたし、自己の不明を泉下に謝するのみである。(ふあうす) NO503、昭和四十八年四月号、昭和前期の関西柳界、堀口境人

どだい川柳で飯を食う、なんて無茶な話である。それも現在のことでない。戦前三・

四十年も前の話である。

「川柳雑誌は同人誌とちがうで、営業雑誌やさかいなあ」

と豪語していた。何が彼をそうせしめたか。それには路郎氏の振骨精神である。

彼は関西短詩文学連盟理事長の職を固守した。これは個人の野心であるかのようにみられた。しかし、川柳が、短歌、俳句、詩と同列に社会的地位を得ることは、ある時代の川柳人の悲願ではなかったであらうか。連盟はその夢を実現し、さらにそれを拡大しようとする運動の一つであった。しかし、柳界では路郎氏の理想を理解する力が乏しかった。彼の振骨精神があまりにも、世に先んじていたからである。従って短詩文学専門の図書館建設の如きものはかばかしく進展しなかった。

川柳界にはいろいろ新しい運動が行われている。しかし、前衛俳句の後塵を拝しながら川柳の枠内をはみ出し得なかつたり、川柳の伝統を否定しながら、伝統吟社同人の地位を去り得なかつたり、いずれもコップの中の嵐に過ぎない。然るに路郎氏の眼はいつも川柳の外に向けられていた。彼の振骨精神にとつて川柳界はあまりにも狭すぎるのである。(川柳雑誌 NO460、麻生路郎追憶号、昭和四十九年九月号、堀口境人)

川柳職業人宣言の昭和十一年に、『川柳雑誌』三月号から有保証の新聞紙法による発行

となり掲載内容の拡大化を図る、と山雨楼メモにある。これは今でいう新聞、雑誌社系列の週刊誌形態のものと考えればよい。路郎は川柳の対社会的認識普及の一手段として、従来の如き柳界内部の豆本式回覧形式の柳誌形態を一洗しようとしたのである。このことは、大正六年に廃刊した『雪』当時のモチーフである『文芸的日刊新聞』の発行という夢にも、二十年の歳月をおいて一歩近づくこともあったようだ。

そのようなスケールの大きい営業柳誌川雑誌の基盤には、往時の柳界あげての柳界トップのスクラムが当然必要な要件であった。本稿初めの川柳人協会の創立の項はそれを指す。宣言と同時に同協会の発足を明らかにしたのは同年八月で同協会の名誉会員に推薦したメンバーは次の通りである。久良伎、周魚、三面子、天民子、不浪人、久流美、紫痴郎、瀧明、省一、紋太、鶏牛子、東魚、塊人、三太郎、雀郎、正光、五花村、晟修、珍竹林、伍健、可宵、南北、福造、溪花坊の二十四名。翌年夏、水府、鶏牛子、溪花坊が会員を辞退したが、同協会は戦局が苛烈化するとともにいつか自然消滅の形となった。

ともあれ路郎は、川柳のプロとして苦難のその第一歩を踏み出した。敢然と嵐に向つて起つた彼はついに死に至るまで、凄絶なまでにその意志を貫き通したのである。

愛染帖

波多野五楽庵選

愛媛県 中居 善信

静止画像の中であなたと生きている
韻の音は浄土に届く音のり
譲つても譲つても距離縮まらぬ

京都市 都倉 求芽

君と僕 北斗の星のゆりかごに
自在に泳ぐ暖流も寒流も 女

和歌山市 木本 朱夏

世迷い言さうって行つた青嵐
もろともに墮ちるあたりの白い罨粟

東京都 やまぐち珠美

花筏 朽ちる旅路と知りながら
八重七重桜ほどういて夜をこぼす

高知市 小川てるみ

同類項くれば謎が解けてくる
あれこれと思ひあぐねて眠られず

弘前市 斉藤 ゑ

さくらさくら 一人が生まれ一人逝き
魂が見えてくるまで朴磨く

津軽滴開どこかで三味の音がする
一杯が二杯 本日花曇り

弘前市 高瀬 霜石

禁じられた遊びを反芻する米寿
親に似てあつと驚く面構え

黒石市 相馬 一花

その先が知りたいマグマ抱いてから
きつと意味あるから霧が立ちこめる

西宮市 牧瀬富喜子

愛は過去 恋も過去なり花蜜柑
投函の音の軽さの未来かな

和歌山市 西山 幸

いつまでも夫の帽子かけてある
そのうちに食べたことさえ忘れそう

八尾市 高杉 千歩

骨董に貼つて下さいこれ物
隙のない笑いぞくつと身がしまる

砂川市 大橋 政良

メビウスの帯を歩いている焦り
口ポットに癒されるとは淋しいな

羽曳野市 徳山みつこ

おしやべりが過ぎて尻尾がちよん切れる
妖怪がいつもの場所で待っている

八尾市 村上ミツ子

一点はブライドどこまでも白く
レモン搾るつんと幼い頃の恋

東京都 播本 充子

富田林市 池 森子

和歌山市 吉村さち子

老いたな 父の涙は本物だ
知恵しぼり絞つて認知する卵

米子市 光井 玲子

あか抜けた言葉が青い実をゆする
今さらの如くにとくく正誤表

鳥取市 徳田ひろこ

曲りくねった路地でわたしをとり戻す
うしろから前へ変わった影法師

愛媛県 黒田 茂代

動かない的にざん訴の矢もつくる
心底は文学少女 野蒜引く

海田市 三宅 保州

やわらかな言葉をためて待つ女
透明になれば自分を跳び越せる

大阪市 前 たもつ

山だって眠たくなった春霞
ひっそりと母が隠れて雨期が来る

弘前市 福士 慕情

他人の目を気にせず生きて敵ばかり
はめられて女は蝶になりました

横浜市 芦田 鈴美

妻と子を背中に見栄が仁王立ち
妻と子を背中に見栄が仁王立ち

三田市 北野 哲男

大和 鍛原 千里

大和 鍛原 千里

大和 鍛原 千里

大和 鍛原 千里

和歌山市 草迷宮 亡母を捜して母に逢う 福井 桂香

尼崎市 矢印を思案しながら登る坂 春城武庫坊

堺市 玉手箱開けてしまったのは若さ 和田つづや

大阪市 鏡に映る私時々舌を出す 川原 章久

吹田市 青テント閣下の髭が昼寝する 太田 昭

鳥取市 あれからは風も前から吹いてくる 岸本 宏章

松江市 窮まって天井へ罪吠えつづけ 安食 友子

弘前市 通りゃんせ帰りの道は角だらけ 宮崎ヒサ子

奈良県 そして朝 妻の笑顔としじみ汁 渡辺 富子

和歌山県 あくせくと流れて花の名も知らず 中後 清史

米子市 星空と私をつなぐ午前二時 中井 ゆき

藤井寺市 プランドに手を出す淋しさの極み 太田扶美代

和歌山市 道を問うならば私は不適当 古久保和子

弘前市 長さより質にこだわる死生観 高橋 岳水

弘前市 〇番で済ませ遍路を止すなんて 櫻庭 順風

和歌山市 カッコよく生きたし意地はみな捨てて 桜井 千秀

横浜市 通帳が愚痴をこぼして困ります 近藤 道子

和歌山市 意地張ってみたとして所詮風ばかり 山口三千子

東京都 当分は敵と定めた花粉症 後藤 早智

高槻市 絵に描いた餅を眺めて慰める 乙倉 武史

出雲市 斜読みばかり多くて黄昏れる 園山多賀子

今治市 この家に根づいてからの皮下脂肪 塩路よしみ

八尾市 主役には一度もなれぬ稲の花 生嶋ますみ

鳥取県 バンザイができなくなった五十肩 谷口 次男

米子市 喜寿生きてなおも夢見る青い鳥 林 瑞枝

藤井寺市 眼裏にすーっと消えた初蛭 高田美代子

寝屋川市 透明人間になりたいなど悪たくみ 森 茜

和歌山市 下積みも無駄でなかった人間味 青枝 鉄治

松原市 走る気があり血圧が下がらない 玉置 重人

松江市 この先は見様見まねで生きのびる 川本 畔

美祿市 人生論 青臭いのは俺だった 安平次弘道

唐津市 一家団欒 春を囲んで放さない 田口 虹汀

唐津市 叱りかた習わず親になつちやつた 仁部 四郎

大和郡山市 身の程を悟る男の土踏まず 坊農 柳弘

大阪府 青臭い意見がとどめ刺しにくる 澤田 和重

日立市 号泣の男ハンカチなどいらぬ 加藤 権悟

箕面市 涙腺へ適度な嘘を溜めておく 出口セツ子

堺市 噂にもならぬ暮らしも難しい 志田 千代

松江市 ひた走るバックギアのない余生 三島 淞丘

堺市 はらわたのたぎり奥歯で噛みころす 奥 時雄

和歌山市 人生の波間を泳ぐ素手素足 武本 碧

東大阪市 片道の善意もこころ満たされる 北村 賢子

松江市 煩惱の深いところでマツチ擦る 津川 紫児

高槻市 口止めをされるとあこがむずかゆい 左右田泰雄

奈良市 少子化にプランコだけが揺れている 乾 春雄

唐津市 樋口 輝夫

ライバルに場所を取られた花見草座

アルゼンチン 松井美穂子

りんご「ふじ」ともに移住の血を分ける

熊本県 高野 宵草

はみがきのチューブも瘦せて淋しげな

大阪市 三浦千津子

孤独から逃げ出す嘘を一つ吐く

西宮市 門谷たず子

終章の石に蹟く重い靴

札幌市 三浦 強一

人生という正解のないクイズ

横浜市 安土 理恵

考えるロダンも多分五月病

鳥取市 夏目 一粋

愚痴一つこぼさなかった古い靴

羽曳野市 森下 一知

指切りが噂の風に揺れ動く

和歌山市 松原 寿子

過去形に出来ぬ面影抱きしめる

鳥取県 西原 艶子

三回忌亡夫の影も白くなる

富田林市 片岡智恵子

眼鏡拭くたびにぼんやりする世間

弘前市 一戸 ツネ

身辺整理 過去の仮面は燃えるゴミ

弘前市 蒔苗 果林

子供染みた事して惚けと逃げ通し

米子市 青戸 田鶴

親族をつなぐと長い縄になる

寝屋川市 平松かすみ

痛そうな男の顔のピアスたち

和歌山市 榎原 公二子

えんどう豆 筋を通せば疎まれる

鳥取市 武田 帆雀

慈雨来る菜っ葉も僕も生き返る

愛媛県 花岡 順子

腰上げるそろそろ潮時かもしれぬ

唐津市 井上 勝規

思い込みが強くトンネル抜け出せぬ

尼崎市 春城 年代

朝ねむく昼も眠くて五月闇

東京都 清原 悦子

傷口を癒してくれた日記帳

鳥取県 上田 俊路

古本屋というオアシスがある田舎町

東京都 岸野あやめ

真心を試されてから不整脈

枚方市 海老池 洋

光るだけ光り蛍の尊厳死

大阪市 小泉ひさ乃

抜擢に仲間の輪から外される

鳥取県 土橋 睦子

拒否をする女ころろを読んでいる

東かがわ市 木村あきら

心まで見透かすような月が照る

鳥取県 土橋 螢

なんでだろう あくせく右の手が動く

吹田市 岩屋 美明

自慢したばかりに流れ矢に当たる

羽曳野市 濱口 フジ

この頃は亡母と同じしくさする

鳥取県 竹信 照彦

釣れますか それは魚に聞いてくれ

武蔵野市 亀井 円女

天国でまだ言うてはるオーイお茶

唐津市 宗 水笑

一円を貯めて財布の固結び

鳥取県 田村きみ子

手に余る微罪でのひら洗つても

富田林市 大橋 鐘造

横に居る友が味方と限らない

鳥取県 毎田 信翁

プロ野球ファンが割れている夫婦

倉吉市 野口 節子

大根の辛さに思う亡母想う

海南市 谷口 義男

金出さず口で丸めてしまう肚

大阪市 浦田 綏子

大阪で生まれた女に情無い

倉敷市 井上 富子

いらいらの種をあたりに投げた腕

倉吉市 松本よしえ

手の内がバレてハハハと苦笑い

高槻市 田中 初恵

手相観の手相いっぺん見てみたい

和歌山県 森下 順子

しあわせを口に出したら目減りする

今治市 渡邊伊津志

肩書きが無い分腰が低くなり

京都塔の会

5月24日

吟行五十回記念

水郷めぐり・近江八幡国民休暇村

都倉求芽



水郷めぐり船着き場で

まず三月

はじめの会場設定申込み、希望の平日が会場の都合で土日しか空いていない、となつてしまいました。しかし、それを皆さんに図つてみると、その土日とれなくなり、仕方なくそのまま契約、案内状作成。ところが案じていたとおり、他の行事や家庭の事情で申込みがさっぱり。あちこち皆さんが声をかけてくださつてどうにか二十名をこえるところまでこぎつきましたが、一泊希望は半分にも足りません。結局、宿泊なしの夕食会に切り替えました。すると帰宅時間が制約されることになります。痛し痒しで当初の公約に違反する句会になりました。しかし、一番心配していたお天気が、予報によると一日ごとによくなり、果して当日本番は爽やかな五月晴れ。その水郷めぐりの情緒をどうぞ。



当日参加者の句

五十回ことほぐように五月晴れ
風そよぐ葦のみどりに気をもらう
とりどりの花をうつして屋形船
艀にゆれて眠気をさそう葦の風
ギツチラコ風さわやかに頬にしむ
手こぎ舟急いで生さることもない
よしきりの一声ごとに夏めきぬ
よしきりの冴えた声聞く手漕舟
船頭のジョークで知つたアシとヨシ
船酔いへヨシキリ嘯うように鳴く
かいつぶりまばたきの間に水の中
苦吟する耳によしきり心地よい
舟で行く田んぼを今に語り継ぐ
補助券のあと一枚に見はなされ
五月晴れ目白が宿る山法師
大道の至雲を囲む人だかり
たんぼの種が浮気な旅をする
宿り木が観光になる隠れ里
文化遺産宿る匠の心意気
水郷をめぐり詩人になり切れず
水浄化よしが一役買うそうな
句会が終わると会場から見える琵琶湖の島
影も次第にたそがれて、やがて夕闇に沈みま
す。和気あいあいの夕食会。楽しい酔いをそ
のまま帰りのバスへ。皆様が温かく盛り上げ
てくださり、終わればすてきでよし、とい
うことになっていただいて報告を終わります。

正坊
みつ子
いわゑ
奮水

春義

楓楽

楽好

満子

啓子

美穂

百合子

葉子

芳子

幸代

泰雄

メ女

求芽

輝美

満寿蔵

萬的

俳風柳多留二四篇研究 56

粕谷長生・山田昭夫
伊吹和男・大野秀二
小栗清吾・橋本秀信

清 博美・佐藤要人

432 たれどこが有迄ころりく也

粕谷 普段は踊り子として、駒下駄を鳴らしながら稼いでいるが、何かきつかけがあれば妾になる事も厭わない。

句は、すでに小便組として稼いだ事もあるのだらう。これに味を占めて、再度妾（小便組）仕事をするまでは、踊り子で稼いでいるのである。

「ころりく」は、踊り子が履く駒下駄がたてる音である。

あの顔で聞ケハ小便組たとよ
あまりつたなきしやうはい小へんくみ

案七松4

おめかけのわるい病ハね小べん
八〇33

山田 賛。但し「ころりく」は踊り子の履く駒下駄の音ではなく、ずばり転ぶ様を表現しているとした方が本句の主人公に似つかわしい。

たれ口か無ひところびの口へ行キ

安九満3

小栗 同。小便組が次のチャンスを狙っている。

清・佐藤 同。

433 はしり大黒を和尚ハくやしがり

粕谷 大黒は寺の梵妻、つまり僧侶の妻である。「走り大黒」なる成語は辞書にないようだが、恐らくは梵妻が寺を逃げ出す意であらう。あるとき寺の梵妻が出奔してしまった。僧

侶が気が付いた時にはすでに遅く、寺の金目の物まで持ち出されてしまった。元々五戒に触れているのだから公儀に訴えるわけにもいかず、ただ口惜しがるだけである。

大くをぬすまれ和尚後家ニなり 四三4

山田 寺の金目の物まで持ち出されたかどうかは分からないが、多分間男と逐電したのであらう。

ま男といはれず和尚くやしかり 拾二32

ところで大黒もしたたかになると、

囲れハ寺社へ出やうとゆるするなり

明三梅3

それで「恐れながら」と訴えたところ、

間男といったか和尚きついませ 安四宮2

やはり「くやしがる」しかないですな。

小栗 走大黒Ⅱ①大黒像の一つ。その御符を持ちかえると逃亡したものがどる効験があるという。②逃げた、僧の妻（日国）。

表面の意は礎稿+山田説のようなことだが、「走り大黒」の①の意味をタブらせて読むとその皮肉さ加減がおもしろいというのが、この句の趣向だと思ふ。

清・佐藤 同。

434 ゑちぜんハ一生おさな顔うせつ

柏谷 えちぜん「越前」は、越前福井藩主松平家の行列に立てる「皮かむりの槍」から、包茎をいう。(『国語大辞典』)。

句は、越前福井藩は「皮かむりの槍」を所持しているから、一生小児の様なものを持っている、というだけのあまり面白くない句。

越前ハ成人してもおさな顔 四三14
おさな顔 一生うせぬ越前家 二二八15

小栗 「越前」は即ち「包茎」のこと。包茎は年を経ても「幼顔」だということであつて、礎稿の解のような意味ではない。

橋本 同右。礎解では本末転倒となる。

なお類句(四三14)は、「卯の小春催辰發行」(四三篇序)とあるので、文化四年(一八〇七)十月の未学評里松の句。実は小生研究中の三代目収月の奉納万句合、寛政九年(二七九七)七月開きに、

あらせんハ成人してもおさなかは

下総千年組

という先行句を発見しました。

清・佐藤 同。

435 こわい事こたつて餅をつく氣也

柏谷 「餅を搗く」は、男女が情を交わす。性交する。(『国語大辞典』)の意。

句は、炬燵で情交するとは、なんとまあ恥知らずで恐ろしい事なのだろう、ということ。こはい事こたつて餅を喰工面 破礼11
山田 「寛政改革と柳樺の改版」の「有夫姦」の項に収録されているので、間男あるいは美人局ではないか。いずれも「こわい事」である。

さし向ひこたつておがらかして見る

亭主の手握ッてすまぬ巨燵也 末三13
傍五6

こたつわなかけてていしゆハはつすなり 安八に6

小栗 美人局、なるほど。

清・佐藤 賛。

436 背中にハめつたにすぬぬひとり者

柏谷 「すぬぬ」のは「灸」。背中へすぬぬには、手が届かないので、他人の手が必要である。だから一人所帯ですぬぬのは、物理的にも無理というもの。

清・佐藤 賛。

437 すき分ハ吟味しぬいた金を出し

柏谷 素一分の客はたつた一分しか持っていないのだから、遊女遊びも慎重にならうというもの。吟味しぬいたうえ、やつとのことで自分の意に合つた遊女を選び、その代金を支払うのである。

素き分ハた、目斗かいそかしひ 宝十三松4

すき分ハあだやおろかにあそぶ氣 明四松1

小栗 粹に遊ぶべきなのに「吟味しぬく」という行動をあざけている句。

清・佐藤 同。

438 我が内の入牢馬鹿けたよふに見へ

柏谷 座敷牢に入れられて反省する息子はまだ改悛の見込みがあるが、「馬鹿けたように見える」などとうそぶく息子は処置無しである。銚子にやられるか、さもないければ勘当されないが目が覚めない。

むごい事息子ハうちて座敷持す 三五12

くつきやうな若者座敷内へすて 萬一24

小栗 礎稿は、息子が「馬鹿けたように見える」といつてる句とされるが、賛じがたい。自分の家でする入牢するのは、いかにも馬鹿けた話だという句。

清・佐藤 賛。

荀香のむ

政岡日枝子選

ドアを開け作り笑いをふつと解く
 みんな幸せ母の膝あいている
 財布全開連休の・る・ぶしてしまっ
 満ち足りた余生だ愚痴は言うまいぞ
 うっかりとのらないように電話さる
 感動を拾いうれしさ膨らます
 寝た切りの母の周りが混んでいる
 回想の扉を開けていく読経
 疾しくてたくさん使う修飾語
 えんぴつはいない自在にものを言う
 心瘦せたか思い出がやせてくる
 雑音を蓄えてきた両の耳
 空っぽの心ゆり椅子ゆする午後
 風の無い部屋でうとうとばかりする
 平日が年中続く母の日も
 どちらにも付かぬときめた首のこり
 内緒で掘った横穴が水浸し
 浮き世の風と人形ごっこして眠る
 よく遊ぶ地獄の沙汰の入り口で

神戸市 田中 章子
 西宮市 緒方美津子
 藤井寺市 高田美代子
 米子市 林 瑞枝
 米子市 青戸 田鶴
 米子市 野坂 なみ
 藤井寺市 太田扶美代
 尼崎市 長浜 澄子
 吹田市 山本希久子
 西宮市 西口いわゑ
 羽曳野市 徳山みつこ
 和歌山市 西山 幸
 米子市 中井 ゆき
 大阪市 神夏磯典子
 和歌山市 福本 英子
 西宮市 牧渕富喜子
 和歌山市 古久保和子
 米子市 白根 ふみ
 富田林市 池 森子

人間の老いをみつめる鯨尺
 イライラへ輪ゴムで夫討つてやる
 朝夕葉水 木々の呼吸をきいてやる
 言葉の先キラリと光り人を斬る
 脳みその使い残しがたんとある
 晩学へ広く浅くの手が遊ぶ
 少しずつ老いが進んでくる鏡
 一歩ずつおくれて頼る羅針盤
 してやれる事が沢山ある財布
 無口な人からの噂は信じよう
 感性をあり余らせて落ちこぼれ
 深い皺悲喜こもこもを語りかけ
 明け暮れていつもひとつの轍踏む
 共に見たひと思い出す遠花火
 温度差の夫婦を埋めるロゼワイン
 限られた刻を一考して食べる
 ストレスが消える大きな声を出す
 果てしないロマンが眠るおもちゃ箱
 ためらわず森へ放とう青い鳥
 身に合うた物差し今日も恙無し
 愛の他にあなたにあげるものがない
 遺品まだそっくり置いてある小箱
 一面のつじ見た日の六度九分
 アマリリス華やきをどう閉じようか
 棘のないバラが出来るといふ恐さ

弘前市 一戸 ツネ
 和歌山市 上地登美代
 鳥取県 佐伯 やえ
 和歌山市 松原 寿子
 和歌山市 吉村さち子
 和歌山市 武本 碧
 弘前市 宮崎ヒサ子
 熊本市 永田 俊子
 東京都 播本 充子
 八尾市 宮崎シマ子
 寝屋川市 森 茜
 富田林市 片岡智恵子
 鳥取県 西原 艶子
 八尾市 村上ミツ子
 西宮市 門谷たず子
 鳥取市 徳田ひろこ
 藤井寺市 楠 昭子
 松江市 川本 畔
 池田市 栗田 久子
 大阪市 三浦千津子
 和歌山市 安土 理恵
 鳥取市 録沢 風花
 橿原市 居合真理子
 東京都 やまぐち珠美
 東かがわ市 川崎ひかり

桜桜 来年の分見ておいだ

へそくりを隠し大事な壺になる
こたわって好きな色から抜け出せぬ
話すことも何もなくともさし向い
返しそびれた言葉ひとつが出てこない
どんぐりの転がる方についていく
そろそろと逃げる準備をするマイク
来し方を問われて語尾が消えていく
風一陣 大風呂敷も舞い上がる
久し振りに互にくらし読んでいる
神仏の前を素通り出来ぬ癖
ふつふつと友を案ずる春の冷え
膨れたり揺れたり濡れてくる心
クレマチス私も杖に手が伸びる
こじんまり目鼻を描けば母になる
喜寿過ぎて字引ひいてる有難さ
アンケート八十以上に用はない
酔って候 本音吐けたら楽になる
魂と呼ぶものがあるきつとある
内緒事しまつ小箱を探さねば
昨日と今日うつろうつろのまだらばけ
幸せをはかる秤を覗かれる
母の日の派手目の服に感謝する
笑い過ぎくすりの数が心配だ
太極拳二ハオ謝謝氣をもらっ

米子市	木村富美子
大阪市	大川 桃花
芦屋市	黒田 能子
東大阪市	北村 賢子
鳥取県	田村きみ子
横浜市	近藤 道子
愛媛県	花岡 順子
和歌山市	榎原 公子
八尾市	田中トシエ
鳥取県	石谷美恵子
香芝市	大内 朝子
米子市	小塩智加恵
倉敷市	井上 富子
寝屋川市	坂上 高栄
出雲市	伊藤 玲子
東大阪市	笠井 欣子
尼崎市	春城 年代
今治市	塩路よしみ
岸和田市	土橋 房枝
大和高田市	鍛原 千里
和歌山市	桜井 千秀
高知市	小川てるみ
鳥取市	福田 登美
鳥取県	吉田孔美子
横浜市	保田 絹子

温泉情報日本中今平和

ストレスが取れると財布軽くなる
明日という未来はどんな絵になるか
明日葉に負けずどんな底はい上がる
繰り言を止めて迷いが深くなる
思い出してももらえたようだ便りくる
人間を素直にさせる花の旅
年上の花嫁さんがやってくる
素肌美をやたら求めて試供品
六十路でも時の薫りの髪に染め
うっかりと咳もできない白マスク
躓いた石も痛さを耐えている
勝つことに慣れて自分を見失う
立ち寄ってお元気に会い嬉しがる
かごめの輪だんだん抜けて老母ひとり
幼き日まぶたの裏にたまってる

東大阪市	田中美弥子
倉敷市	撰 喜子
大阪府	米澤 俣子
堺市	西村りつゑ
和歌山市	山口三千子
寝屋川市	籠島 恵子
奈良県	渡辺 富子
横浜市	川島 良子
倉吉市	山中 康子
アルゼンチン	松井美穂子
東京都	後藤 早智
大阪市	小泉ひさ乃
大阪市	町田 達子
熊本県	岩切 康子
大阪市	津村志華子
岡山県	富坂 志重

童子さんの句―緊張と緩和を繰り返して生きている人間、これがなくなると病気になる。外に立ち向う姿と、深くそれ等を脱ぐ解放感が気持ちいい位うまく収まっている句であると思う。美津子さんの句―素直に詠みとつてこちらまで幸せになるような句です。母の膝に集まってくる有事の時とは反対に幸せの思いの広がりリズムよく描けています。美代子さんの句―時刻表や旅行雑誌が大好きな私の目に大きく飛び込んできたる。ぶ。この軽妙な句調が文句なく面白く新しい着想でどんな句でも作れる作者で感服します。瑞枝さんの句―平々凡々とした句の中に、満ち足りた余生にするまでの葛藤がよく詠めている。句の取り合わせは新しくはないが、断定的に言い切った処に今の心理をうまく表現してあると思う。

照富霜岳倫一ツ鐘凡郁玲理康天順早寿と玄昌活
子子石水子壺ネ造碧々代代子恵子涯子智美き也鼓恵

あきらめがついてステップ次を踏む
あきらめた愛それぞれに唄がある
あきらめず曲がりなりに夫婦道
あきらめぬ男に深い読みがある
あきらめか悟りか妻が愚痴言わぬ
あきらめていないあの目が光つてる
もう行くとうつくに過ぎた待ち時間
アタック互回まだあきらめたわけでない
着順はあきらめ完走全力で
負けないぞあきらめないぞまだ古希だ
あきらめと意地が時々喧嘩する
気まぐれな風に脱皮をあきらめる
あきらめもまた大事だと言ひ聞かせ
あきらめていますけれどと言う未練
あきらめろ他人が軽く言つてくれ

佳

リユックにはあきらめ切れぬ月日詰め
あきらめの早さ男は試される
職安の椅子に溜め息置いてくる
あきらめてしまえば楽になるこの世
あきらめてプラス指向へ空も晴れ

人

亡き人をあきらめなさいと花が散る
あきらめずまだ抜け道を模索する

地

天

ひとつ許しひとつ諦め生きる老い
あきらめる事はたやすく要る勇氣

軸

初恵
棲世
英旺
庸佑
彰雄
隆盛
タモミ
タモミ
雄々
洋介
春雄
紫晃
千華
哲男
宏章
綏子
扶美代
強一
ちかし
孝男
たず子
三千子
吉村さち子

上田 俊路選

古い話をまた持ち出してくるお酒女へん、こわくて古の字付けられぬ古狸月見と洒落て酒を酌むリフォームへ亡母の古着が活きかえり月見草今年も咲いた古戦場古女房元氣凛々僕勝てぬ古希望て生きた証を自分史に新製品出ればとたんに古い型癒されるまだ動いてる古時計三分や五分は違う古時計年賀状 温故知新じゃ増えるだけ腰掛けて古い駅舎の古い椅子古くても私の誇りいぶし銀なんとなくまたもやられた古狸笑うけどこれは戦後のニューモード古さ良き時代と賛美する昔定退後旅を楽しむ古い靴古いほど棚で張張っているワイン古傷もあたため合って夫婦傘草書体古い話が好きな祖父分別のごみに手古する老世帯ときめきがこんなにもある古日記

みね 眞一 檳榔 可住 半覺 正和 宗明 たもつ 玲子 (伊) 善信 照彦 次根 雄々 孝雄 (福) 武史 章久 愛論 正雄 紫昇 和重



本當の友は古傷には触れぬ

母ひとり待つ古里に気もそぞろ

ブライドは絶対捨てぬ古時計

石段のくぼみが語る古い寺

古希にしてなお胸躍るひとり旅

古ぼけた絵に鑑定の眼が光り

城下町骨董品が物を言う

改革に調法して古い橋

リストラに古紙再生の夢がある

金婚は古傷さえも癒やし合い

古くて今なお息吹く人の道

はるか太古のロマンを秘めておうむ貝

うす目あげ顔色を讀む古狸

古代史と村の歴史と一本杉

古いデザインうまくなす母の知恵

佳

五十年使った飯茶碗

骨董だ古道具だともめている

喜怒哀楽何でも知ってる古時計

古い事書き残せよと春の雨

夫婦にも古傷だけは触れぬこと

人

古川柳なるほどぞうかの解説書

地

寮歌祭組みはしゃぐ古マント

天

骨董屋目の保養にと値を言わず

軸

土器に耳貸せば古代の風の音

まつわる

米澤 俣子選



戦争にまつわる話すはあくび

貧乏にまつわる話ならでできる

妹が出来て兄ちゃん世話がやけ

人間の欲にまつわる茶番劇

義理人情まつわりついている老舗

血縁の糸がまつわる遺産分け

古傷にまつわる話する他人

まつわるものだんだん減って老いてゆく

スカートの襞にまつわる青い風

ライバルの影がまつわる棒グラフ

揉み消した過去がまつわりついて来る

絵に画いた餅にまつわる妻の愚痴

ケチだから女まつわることはない

新婚の頃はまつわりついた妻

銀シャリにまつわる母の帯着物

美しいひとにまつわる艶話

一言がまつわり不眠の夜が続く

婆は婆はとまつわる孫に貢いでる

厄病神として俺にまといつく

美談にもまつわる暗い裏話

お局の視線まつわる新社員

弥陀の掌にまつわり生きる水子塚

(漢) 富子

宏章

高明

高丘

登美代

清史

俊子

たもつ

碧

德三

准一

哲男

正剣

兵八郎

一知

朝子

政勝

志華子

(編) 洋

玄也

あずま

鐘造

生き字引土地にまつわる話なら

空海の功德まつわる遍路道

落人の秘話へまつわるかずら橋

焦躁の指にからまるほつれ糸

隣の緒にまつわる因果DNA

思い出がまつわる部屋で帯を解く

蛇のよな目でつきまとうストーリーカー

過去帳にまつわる生ぐさい話

好色な視線まつわる美人喪主

まといつくしがらみ切つて青テント

通夜で聞く恋にまつわる裏話

父にまつわる苦勞話を母はせず

亡き父母の恋にまつわる古写真

リストラにまつわる話苦しい酒

膝にまつわる頃がよかった娘たち

佳

仕来たりがまつわりついた床柱

無視してもまといつくのは女偏

影法師めつきり影が薄くなる

逃げてでも逃げてでもまつわりつく噂

美しい嘘にまつわる美辞麗句

人

因習の絆が切れぬ鬼瓦

悪女の噂払つても払つても

地

まつわらぬように生きたし歩きたし

天

生活にまつわる主婦の知恵がある

軸

(花) 順子

勝視

茂代

岳水

ツネ

みね

(備) 輝夫

美代子

セツ子

章司

恭昌

半覚

英旺

正雄

シマ子

千里

理恵

霜石

扶美代

さち子

重人

充子

徳山みつこ

初歩教室

題一公園

三宅保州

前月号に続いて、麻生路郎祖師の名著『川柳とは何か』（昭和三十年版）から、推この重要性について祖師が力説されておられる一部を引用させていただきます。

「常に多読多作をしている作家は句の構成が想即表現に近い状態でまとまるものであるが、そうでない人達、殊に初心者にとっては、想と表現との間に思いもよらぬ隔たりが出来るものである。従って出来上がった句をよく検討して最後の仕上げをしなければならぬ。この仕上げを推敲と呼んでいる。俳聖芭蕉は推敲のことを「言葉を正す」と云っている。川柳家でも、日車などは鎌骨彫心（るこつちようしん）と云う推敲をしていた。彼の句が実に軽妙であり、幽默であり、何の苦もなく生まれ出たように感じられるのも、彼の天稟の資質以外に推敲のたまものだと思ふ。彼は句帖を携えて毎日のように私を訪れ、その推敲ぶりについて私の意見を徴したもので

ある。彼にしてそれほどの推敲をしたのであるが、近ごろの作家は作りつぱなしの句が多く、所謂推敲をしていないようである。名句を得られない原因に数えることが出来る。」

この路郎祖師の教えを心して、推こうを重ねることを実践したいものである。

注、日車（につしゃ）は川上日車、浪花の商人で大阪商人の態様を詠んだ句が多い。例えば「金にする嘘を扇でばちと締め」など。路郎師と同世代

【同想句】

「公園デビユー」の同想句

母子とも公園デビユー胸騒ぐ

母と子が公園デビユーしおらしく

公園へデビユーの母子を待つ試練

公園デビユー小さな笑顔取り囲む

公園へ孫といっしょの初舞台

「公園デビユー」を詠んで佳句にいただいた三句との違いを比べてください。

「青テント」の同想句

公園の月夜に眠る青テント

公園は青テント等の社交場

公園の青いテントも風物詩

公園に夢なき人の青テント

英 旺

弘 之

勝 久

起世子

公園に指定席持つホームレス 初恵

「青テント」を詠む場合は、作者の訴えや問題提起をぜひ詠み込んでほしいものです。

【添削句】

原 ママ心配砂場に混じる猫の糞 章 司

原 公園の仲間りストラ不登校 喜 子

原 公園を散歩が日課老いふたり 昌 鼓

常套句（ありふれた句）を作るなという戒めがあります。それを守るのは大変ですが、何も難しい表現を使ったりするのはなく、

「川柳眼縦横斜裏表」という句があるように最初に浮かんだ句想をいろんな角度から観察し考えてみることで。また、あれもこれも詰め込みすぎて消化不良になっています。そこから推こうをして下さい。さらに作者としての突っ込みが加われば佳句が生まれてくるものです。

原 公園のハトにママやる可愛い手 文 江

添 公園の鳩がこの子を待っている

原 腰掛けて焼き芋屋待つ老一人 と き

添 公園にお得意が待つ焼き芋屋

原 公園の砂で遊んだ子も六十 円 女

添 公園の砂で遊んだ子にも孫

原 公園の一人歩きは危険です 侑 子

立派な標語になっています。川柳眼的に、

添 公園の男ひとりとは怪しまれ

原 プロポーズあの公園で振られたよ 邦造
 添 公園のベンチ振られたときのまま
 原 家よりも公園掃除念入りに 満子
 添 公園の掃除家より念入りに
 原 公園へ惜しまぬ市税健やかに 賢治
 添 公園に税を惜しまず注いでほし
 原 遊具なし公園の椅子淋しそう 綾乃
 添 公園の遊具壊れたまま幾日
 原 公園で花を眺めて蝶を待つ 稔
 添 公園の開花知らせてくれる蝶
 原 公園の春夏秋冬見て散歩
 添 公園の四季折々を知る散歩
 原 公園で心青年ボール追う 千華
 原 公園に大きな夕陽明日予感 千華
 添 公園の少年包む夕茜
 【少し工夫すれば佳くなる句】
 原 平日の公園どこもお年寄り 時雄
 添 公園のお得意様はお年寄り
 原 公園のお花見鳩も仲間入り つよし
 原 公園になったお墓の明るさよ 洋介
 原 昼食の趣向を変えて公園で フジ
 原 公園に雀が遊ぶ朝まだき 嘉彦
 俳句調すぎ。それをどう思うか詠みたい。
 原 公園に陽さし風吹き子ども来る 公市
 原 公園はママのストレス捨て所 ゆきの
 原 公園で子育て術を貰うママ 益子

原 公園で出会った人も万歩計 昇
 添 公園で見せ合っている万歩計
 原 公園の話し相手に花吹雪 栄呼
 原 公園のブランコに乗り子に返る 美恵子
 原 公園のブランコ親子三代目 信翁
 原 公園でいつも会う人見なくなる 重之
 原 公園に決った人の指定席 芳江
 添 公園に私の指定席がある
 原 豆秋もいた公園はアベノです 和友
 原 豆秋は川柳家須崎豆秋、一般に通じない難。
 原 やろうども公園へ行き決闘だ しんいち
 面白いが不穩、せめて「亦敵」ぐらいに。
 原 公園で恋のはじめの口喧嘩 好
 原 公園にひとつふたつと恋があり 大鯨
 原 公園の桜見たさに回り道 忠子
 原 公園に喜色春夏の花暦 照彦
 添 公園に絶えることなし花暦
 原 公園の花盗人は哀れなり 道子
 添 公園の花盗人と語りたい
 原 公園のベンチ見ていた聞いていた 秋星
 原 公園の自販機コーヒーマーミ喫茶 智加恵
 添 公園の自販機前はミミ喫茶
 原 公園へ花のつばやき聞かに行く 永子
 【佳句】
 公園の枝垂れ桜を傘に撮る 節子
 公園の花壇を咲かすポランティア 美弥子

葉桜になって公園ホッとする 惠勇
 古里の公園にきく国訛り 清
 公園で暫し人生放棄する 九好
 公園は歩いててもよく寝てもよし 昇
 公園で気楽に話すひとが出来 利子
 公園で花のとりもつ友ができ こそえ
 公園へ犬があいさつする散歩 はじむ
 公園へ犬のお供の顔で行く 敏子
 晴れやかにボチも公園デビューする 登志子
 お仲間公園デビューするベツト 弘子
 招り足で公園デビューしてるママ 准一
 公園は僕を鍛えた逆上がり 幸
 公園は僕を素顔にくれる 起世子
 【今月の推せん句】
 公園の遊具のあくび見てしまふ 二宮栄子
 「あくび」が言い得て妙。「少子化で遊具が欠伸する公園 いさお」という句もほとんど同じですが、下六音字でリズムが悪いのが惜しい。やはり推しうが大切ですね。
 公園でみんな降ります縄電車 兼本政子
 発想、表現、リズムともに優れています。
 公園が暴れたような休み明け 萩野像山
 「公園がゴミで溢れる休み明け」的に詠めば平凡。「暴れたような」の比喩が秀逸です。
 雨の日のバスは公園前通過

秀句鑑賞

同人吟津守柳伸

— 6月号から

喝采のないキッチンで磨く鍋

市丸 晴翠

明るい台所で心ゆくまで鍋を光らせる。素晴らしい時間をお持ちで羨ましい限りです。素

磨を繰り返しておられるのでしょうか。喝采の無いと自虐しておられますが、まだまだやる気満々と思わせる希望が感じられます。

改札が迷う切符を引つたくる

大川 桃花

外出のついでに、一寸寄り道したくなる女心の迷いを振り切るように引つたくる改札に、決断を迫られた時の顔が目に浮ぶようです。

今年こそ仇をとるぞ四月馬鹿

堀江 光子

エイプリルフル、けつたいな風習が流行つたものです。どんな落し穴にはまられたか判りませんが、句が明るいのです。思った事をストレートにぶつける、お若い方なのでしょうか。賢ければ馬鹿になつて下さい。まだまだ人生は長いのです。

作つたらいかケータイ専用車

山本 宏至

とてもくすぐったい穿ちの効いた思いつきです。女性専用車が男性に響きを買っているようです。女性はその車両にも乗れるので男性は両手を上にあげているとか。お気の毒です。そして猫も杓子も車内で携帯。話かメル遊び。ケータイ専用車大賛成です。

どこへどう行く矢印のない旅路

長谷川 春蘭

ご年配にもかかわらず余裕綽綽の春蘭さんならではの句です。誰の世話にもならず杖も眼鏡もなしで、元気に句会めぐりをしておられますのに、矢印のない旅路に魅かれました。退職したら私も同じ心境になるでしょう。

火葬場になんで桜を植えとくねん

北野 哲男

バツと咲いてサツと散る桜。美しく潔い代名詞にされる桜。火葬場の哀しい訣れをした胸に突き刺さる満開の桜。植えとくねんでやり場のない気持が痛いほど判ります。

寝たきりへ絵も添え便り続けよう

岩 切康子

優しさの溢れ出た句に心が洗われます。お絵書きも字を書く事も、病人を慰めるだけでなく、ご自身の成長にも繋がるのです。

さわやかな五月も意外に雨降りが続き、うんざりさせられますが晴天の花満開は、何ものにも変えられぬ美しさです。四月本社句会では恥じらいもなく、30分の柳話をさせて頂きました。理容業も女店主として40年差無く、喜怒哀楽を友として、川柳の五七五を捌け口にし、憤懣を晴らしながら現在に至っております。川柳とは作者がこころの扉を開き、第三者にその思いが伝わったとき、文芸としての価値が現われるのです。鑑賞の十人が十人なるほどと理解して頂けた時に、一人歩きが出来ると確信致しております。

最近はやりのカタカナやローマ字入りの句には、些かうんざりしている一人です。五七五の「定型」と「リズム感」にこだわる私の石頭が、皆様方の力作と向き合ってどんな答えが出来ますやら、お楽しみ下さいませ。

見返りを期待するから愚痴になる

伊勢 八重子

頭をガツンとやられました。凡人の習性を見事に掴んでおられます。愚痴は禁物です。

どん兵衛がうまいぞバリの屋根の下

早川 棲世

シャンソンの聞こえて来るテラスではなく、屋根の下のどん兵衛に限りない親しみを覚えたい。こんなあつからかんとした日本人の観光客ばかりなら、ガイドしがあるでしょう。どん兵衛が効きましたね。

バイトした経験ピラは皆もらう

木村 貴代子

素晴らしい心掛けですね。バイト中にいろんな事に揉まれて素敵に成長する人と横道にそれる人と。貴女のバイト先は好い先輩と同僚に恵まれて、好い経験をされましたね。

心配はいらぬ保険に入っとる

春木 圭一郎

典型的な家族思いのワンマン亭主の感じが致します。安心の保険もイザの時、年齢によって半額や一割の還付になる事があるそうです。老婆心ながら一度問い合わせて本当に心配のないと、太鼓判を見せてあげて下さい。

人生を逃げるゝ鬼が追ってくる

正畑 半覚

混沌とした世相、自殺志願者を集めるメル等、常識を疑いたくなる行動をする若者の中に、鬼に追われないため、まっ直ぐ生きねばと自覚された半覚さん。とても立派です。

バージンロード父の威厳が消えていた

小島 蘭幸

大勢の方に祝福された人生最高の挙式。この日を迎えるまでの紆余曲折、バージンロードを歩む父親の感慨はいかばかりかと身につきまされます。若い二人を社会に送り出すために威厳を捨てて、ひたすら頭を下げる父に、健康な両親へ感謝の心一杯でしょう。

欠点も時々お見せしておこう

植田 一京

とても大らかで楽しい作者だと思えます。酸いも甘いも噛み分けて連れ添う、否友人であつても「なくて七癖」、誰方にも長所短所はあるのです。本当に心を許せるお方なら、目をつぶっていて下さい。麻婆家族に万歳。

目が覚めて妻の寝息をじっと聞く

西谷 大吾

身につまされる一句です。夜中に目覚めて正常な寝息を聞くなるといふぬ安堵感。いたわりのまなざしが手に取るように伝わります。普段なら口うるさい頑固な妻でも寝息は愛らしくいとおしいものです。皺の一本一本にも、お二人だけの至福の刻が刻まれているのです。桂三枝さんの川柳に「抱いた肩いまでは何時ももんでいる」とあります。お互いにいたわり合つて下さいね。

腹をくくれば喧騒さえもリズムミカル

政岡 日枝子

心頭滅却火もまた涼し、のたとえ通り喧騒をリズムミカルにとらえられる処世術には頭が下がります。例え方は悪いですが、パチンコに没頭されるお方は、騒音と紫煙の中に憩いを求め、安心して献金をしているようです。何ごとも腹をくくって、凶事も慶事に変え、デーンと自信ある生活をしたいものです。

響き合うためには欠かせないお酒

西出 楓楽

下戸の一人としてとても羨ましい一句です。女主人とはいっても、対外的には男性と同じお付き合いをしなくてはならない事が多くあり、飲めなくても機嫌よく参加して、皆さんと響き合う努力をしております。胸襟を開き合えるのも、遠来の友と旧交をあためるのも、本当にお酒の効用は偉大です。

路郎先生の句

酒とろり とろり大空の心かも

大好きな句です

ちっぽけな事はみんな忘れて、先生のお膝元で作句を続けられる幸福を噛みしめねば、と思っております。久し振りに皆様の佳句とじっくり対面させて頂き鑑賞しましたが、失礼の段はご寛容下さい。

—水煙抄

秀句鑑賞

—6月号から

山口高明

わんぱくに人の痛みを叩きこむ

松葉君江

平成元禄自我ばかり強く自分さえ良ければの世の中、テレビ・新聞を見ても義憤を感じる事件事故、他人の子にも悪いことは悪いと叱る気概を持った大人でありたいものです。活花の若宗匠のきれいな手

坂本 兵八郎

若い宗匠の着物姿、侘び寂びを伝授される立居振舞いの優雅さにまで目をやるお弟子等の熱い眼差し、活ける花にも季節が香ります。

ああ言えばこう言い夫婦やってます

花岡 順子

「ああ言えば上祐」と言う言葉が何年か前に流行致しました。我家も妻の干渉の下での毎日です。貴女の夫婦間の楽しい会話聞達なやりとりが彷彿と浮びます。そんな元気が家庭円満の秘訣かとユーモアのある佳吟と思います。

しあわせな時間止まってくれないか

奥田 保子

そうですね。誰しも不幸は望みませんが言われて見れば平凡な倅せ、あくせくと毎日があわただしく気が付きませんでした。

茶でとおす戸の二次会三次会

福西 茶子

お付き合いの良い人なんです。僕ももう言う方を存じております。そんな方との酒席では乱れることなくお開きになります。

今になり亡父に聞きたいことばかり

田中 章子

幼い子供等を残し早世した父親の無念の思いが身に染みます。今なら聞ける父の言葉です。

腹黒で無くて良かった内視鏡

木村 無緑

内視鏡で覗いて分る他人様の腹の内なら覗いて見たいもの、覗いてびっくり僕のライバルだったとして、なんちゃって。

怖いのは人間ですか神ですか

川島 良子

神様の罰も怖いですが、もちろん人間ですよ。怖い教祖さまもいらして、人間の心の闇は自身にも解せぬ部分もあるのです。極限状態の飢餓の時どんな恐ろしい事をする小説を読んだ気がします。そうならぬよう祈るのみ。

まだ望みあるからげんこ飛んでくる

三浦 強一

憎いからの拳固ではありません。可愛いからこそ、匠であれば一人前に上達して貰いたい一心の気持ちのあらわれか。

調子良く見えているけど犬と猿

植田 照子

同僚とはいえ、お互いに嫌っていると案外と分るもの。会社のお仕事だけは張り合って下さいませ。

ほほえみを返す老女に女の香

横山 捷也

女とは美しく老いたいのもの、毎朝御散歩の途中目礼で、すれ違う女性の上品な色香……大店の大奥さまなのだろうか。

親の代から引き継いだ好奇心

大西 文次

血は濃ゆいと言うことです。

人数の足りぬ時だけ呼びにくる

増井 ヨシ枝

そうなんです、麻雀等勝負ことの好きな女性を僕も知っておりますが、お友達も貴女のこと補欠用員とでも思っ居られるのですかね。貴女も勝負ごとが好きで、毎回呼んで貰いたい心境なのですね。呼んでもらえない時は、御自分の方から押しかけるといふ手もあります。

■句集紹介

『葉ずれ柳』

森下 愛 論 著

片 岡 湖 風

著者森下愛論さんは、大正六年生まれとい
うから今年八十六歳を迎えられた現役の川柳
作家である。

昭和十九年六月、二度目の応召で南方の前
線へ送られる途中、米潜水艦による魚雷攻撃
を受けて輸送船が沈没、十日余りの漂流の後
九死に一生を得て帰還された。

愛論さんの川柳歴は実に昭和十八年に始ま
る。戦後は昭和二十二年に川柳雑誌社不朽洞
会員となり、今にして数少い麻生路郎門下生
の一人である。一昨年病魔に倒れるも見事に
復活された。退屈のきと言いながらも、自
らワープロを叩き編集、製本をこなした文字
通りの手作り句集である。

第一章 こころ

チギリ絵の港で眠る冬はたる

火の橋を渡る女の背が丸い
しがらみの背中に重い涙つば
鮮烈な夕日私を呼び止める

愛論作品は多彩である。特に第一章に収録
されている作品群は、そのほとんどが心象句
で占められている。しかも、何もむずかしい
ことを言っている訳ではない。こころからこ
ころへ伝わる。川柳の原点はここに繋がると
言つてよいだろう。

第二章 酒

百万の味方と思う日々の酒
てのひらの酒の雫のいとおしく
地酒酌む旅の出会いが始まるよ
まだ燃える残り火がある酒がある
あれほどこよなく酒を愛した愛論さんだつ
たが、病から生還した後はぶつとりと酒、煙
草と縁を切った。お陰で一日一日を長く感じ
ているそう。これは取りも直さず生きている
という実感であり、これからはゆつたりと
した気分、時間の流れを楽しんでほしい。

第三章 祈り

京の旅千手観音祈りの美
魂を掴みそこねている孤独
多情仏心風に逆らう向きを変え
懺悔する気高き弥陀の手のひらに
人が人として生きてゆく上で、他人に對す

る傲慢さは不用かと思う。お互いに相手を認
め合い、謙虚な気持ちで忘れさえないければ
この世から戦争も、喧み合いすらも無くなる
だろう。この第三章は祈りを通して人間の優
しさを、戒めを教えてくれる。川柳はまた人
としての生きる道をも、説いてくれる文芸で
もあることを認識させてくれる。

第四章 翔ぶ

紅灯に別な私の顔がある
浮世から一寸逃れて湯に浸かり
捨てられた事を知つても紅は引き
世話やける人だと女嬉しがり
女性を詠ませると拔群という作家に、今は
亡き菊澤小松園さんが居た。愛論さんも負け
ず劣らずで、最近頃に艶が増して来たように
思う。時にはこちらをドキリとさせて悦に入
ることもあり、参った参ったである。

第五章 雪花

福寿草花の心よ春の息
浮雲とまた一年を歩こうと
煩惱の軽さに秋が駆け落ち
十三夜そつと挽歌を口ずさむ
叙情句は日本の景色そのものであり、美と
やすらぎを与えてくれる。川柳歴六十年の面
目躍如たる句集『葉ずれ柳』は生涯の友であ
る。益々の活躍をお祈り申し上げる。

■句集紹介

遺句集『古里』

小林 周 信 著

村 上 玄 也

昨年五月十九日帰らぬ人となった小林周信さんの遺句集が、一周忌を前に奥様の秀乃様の手によって纏められ発行されました。周信さんの川柳の良き理解者であり、時には批評家でもあったであろう奥様の手で、一四〇〇句を越える故人の遺された句を、新聞・雑誌・句報などから一句、一句丹念に拾い出して選句、これを年次順に整理されたものがあります。友人として選句のお手伝いをさせて頂いたことから、私がこの遺句集の紹介をさせて頂くこととなりました。

周信さんと私は会社の同期入社で、仕事の仲間でしたが、彼は持ち前の洞察力の鋭さと的確な判断力、そして懐の深さを感じさせる人物の大きさと、要職を勤め上げられました。言わば趣味は仕事、と言う典型的な企業戦士であっただけに、退職後は時間を持て余すのではないかと、奥様がNHKの橋高薫風先生

の川柳教室を申し込まれたそうです。最初はそれほど乗り気でなかったそうですが、教室に通い出して、のめり込むように川柳と向き合うこととなったとの事でした。

一足先に退職されていた周信さんから、一句認められた年賀状が届いたのは、平成十年の正月でした。

お屠蘇酌む盃は古里備前焼

この句が周信さんの句に接した最初の句であり、彼と私を今度は仕事ではなく、川柳で結び付けるきっかけになりました。

この句集には七百余りの句が掲載されていますが、タイトルにもなっている古里を詠んだ句や、人情の機微に触れる句が多く見られます。古里の句は前出の句の他

古里は星の数など数えない

母が逝き里にくつろぐ場所がない

赤とんぼ里に流れる童歌

など古里への思いが伝わる句です、また、

お隣でなくそのお隣と仲が良い

アドリブが受けて辻褄狂いだす

アドバイスされた分だけまた迷う

などは彼特有の人の心理や、行動を鋭く観察した句だと思えます。

一方、周信さんは大麥酒を愛した人でもありました。全国各地を回ってそれぞれの地の

酒を味わい、その地の人情に触れて人情と酒が任地を好きにさせをはじめとして

盃洗が無用になった盛り上がり

お隣につられ熱鬧もう一本

この世にも極楽がある昼の酒

など酒の句は、酒好きの共感を呼びます。

外で奥様の事は余り話される方ではありませんでしたが、奥様を思う優しさや夫婦仲の睦まじさを窺わせる句があります。

キッチンに妻がいる日の安堵感

油虫出たと女房呼びにゆく

風邪に臥す妻へせめての七分粥

自由とは空しきものよ妻の留守

さすがに罹病されてからは病気の句が目を見えますが、そこにも周りの人への気遣いが感じられます。

病名を妻に内緒でひく辞典

癌告知主治医も心をくだいてる

そして句集の最後の二句

九死に一生神に生かされている

古時計 規則正しく遅れたす

病床での死の直前の句で締めくくられています、今際に至るまで句作りをされ、心から川柳を愛した周信さんの、心優しく穏やかな人柄が全編に滲み出ている句集であります。

冷蔵庫の中を

覗く

小川 注湖

川柳「冷蔵庫六割という輸入品」。私の最近の句である。日本の食料自給率は先進国の中で最低の40%だ。百貨店やスーパーの食料品売り場で、国内産の野菜や青果物に並んで、外国産のラベルを多く見かける。色や形、名前も見慣れない青果物をつい手に持つて眺める。売り場をそのまま家庭に持ち帰ると、冷蔵庫の中にある食料品は、六割が輸入品ということになる。

この家庭にもある冷蔵庫を覗かせてもらうと、豆腐、納豆、パン、牛乳、バター、肉、卵、パブリカ、カボチャ、バナナなどなど。これら原材料の国産自給率は、二〇〇一年で大豆5%、小麦11%で少ない。牛乳、肉、卵生産の飼料穀物、乾草、藁も輸入に頼る。バナナはもちろん、パブリカ、カボチャも輸入が多い。こうして日本の伝統的な食物である味噌、醤油、豆腐、納豆に使う大豆が95%、

またパンの小麦も89%が輸入である。

一方、日本人の食事の取り方にはロスが多い。総合文芸誌『山陰文芸』（第十六号）で、随筆家、石丸正氏の飽食のエッセーに心を打たれた。「…料理が十品目と豪華版である。…素晴らしいご馳走、ゆつくり心底楽しんでいただいた。といつても、皿数も量も多く、もったいなくも多くを残してしまった。同席のほとんどの方の皿にも多くが残されていた。思えば、戦中、そして戦後、頭の中は食うことばかりだった。…その後、高度経済成長が、私たちに多くのものを与えてくれた。食べ物もそうだ。だが、飽食という言葉に見られるように、逆に、さまざまな反省が必要ではないか」とつづられている。

私は〇一年春、農林水産省が発表した「食料ロス統計調査」の中で、結婚披露宴のテーブルを飾る、豪華なご馳走の四分の一（23.9%）が食べ残され、捨てられているという報告と重ね合わせて考えた。また、街の料理、飲食店などの外食メニューの豊かさ、百貨店、スーパー、コンビニ等にも調理個食品が増加し、品々に並んだ中から好きな物を好きなほど選んで、腹いっぱい食べている。これら贅沢な食事が、豊富な輸入農産物によって賄われ、それがますます増加していることである。

川柳「輸入品食卓の上世界地図」「三食も輸入食材料理決め」となる。

農水省の試算によれば、日本人が食べている輸入農産物の生産に利用されている海外の農地面積は、一千二百万haにもなり、日本の農地面積四百七十九万ha（〇一年）の2.5倍に相当する、驚くべき広い面積だ。日本の食料自給率は昭和三十五年七十九%であったが、以後毎年一貫して低下を続け、四十三年経過した今日、半分の四十%に。この実情に歯止めをかけ、向上へ反転させることは、日本人の慣れしてしまった食事行動から大変困難な課題であり、道程であることを物語る。

毎年、年末になると新聞折り込みに、カラルな「おせち料理」のチラシが入り、一万円前後から二万円、三万円という宣伝が載っている。正月家族全員の集まる祝いに、つい高めの「おせち」を求めてしまう。その「おせち」の色鮮やかな料理の芽え、盛り合わせの見事さをまず楽しむが、魚や肉の切り身、数の子、海老、貝柱、昆布、黒豆、椎茸等々、どこ産の物かと、私は頭の中で考える。おいしいご馳走をいただきますながら、食料の国内生産の増加に向けた努力と、輸入量の減少につながる無駄食いの浪費を少なくする両面から、日本の食料自給率の行く末を考える。

本社 六月句会

六月六日(金) 午後五時半
ア ウ イ ー ナ 大 阪

六月の雲と太陽は蒸し暑さをもたらすが、あじさいの彩のさわやかさはほっとする季節でもある。

六日、大輪のあじさいが、飾られた会場には、112名が集まり定刻に六月句会は開催された。

お話は河内月子さん。平成九年六月亡くなつたが川柳塔のお母さんと慕われた小出智子さんの思い出を語り、句を紹介しながら、その人柄をしのぶ30分であった。

一日を大切にする水を撒き

あじさい寺の冬を想像せぬことだ

身の上話程よく電車空いている

バークマンのような帽子も被ずじまい

息子には話しておこう川の幅

家族を、川柳を愛し、謙虚でやさしいお人

柄のよくあらわれた代表句である。

月間賞は池森子さん(富田林市)に輝く。

(司会)玄也(記名)月子・朋月

(受付)泰子・恵子(清記)義

席題「傘」

仁部 四郎選

予報士のカバンにいつも折りたたみ
持つ持たぬ傘一本で大喧嘩
傘マーク明日は映画にしろと言う
ラストシーン ハイカラな傘彼を待つ
ファッション傘も一役買っている
着流しでなければならぬ破れ傘
赤い傘赤い長靴待つ園児
医者通いブランドの傘杖にして
百円の傘にたくさんありがとう
借りた傘開けば派手なロゴマーク
雨宿り美人の傘を待っている
待合せパープル色のカサとして
女傘干して話題になりました
納得のいかない傘がうちにある
夫には内緒の方と傘の中
傘さし上げ友も一度グッドバイ
ふたありでひとりと傘に笑われる
日傘くるくるの妊娠四ヶ月
核の傘レンタル料が高くてつき
赤い傘恋を捜しに行つたきり
傘なしで水掛け地藏抱する
父よりも少し大きい母の傘
バラソルが夏の女を弾ませる
晴雨兼用おんな心を試される
槽糠の妻と相合傘の日が続く
老妻が待っていました雨の駅

千代 東雲 直樹 雅文 舞夢 保州 舞夢 ますみ ダン吉 玄也 鐘造 篤子 ひさ乃 かすみ 朱夏 かすみ たもつ 重人 真理子 尚士 セツ子 一歩 楓楽 倫子 千里 光久 耕治

長いこと相合傘はしてません
はしやきながら追いついていくベアの傘
ジャンプ傘みたいにな一度開きたい
傘のしずくひと振り今日のドラマ閉じ
傘捨てて追うきつときと追いつける
佳
くたびれた傘一本のもつ歴史
傘下にはならず美味しい酒を飲む
十七歳高校男子傘持たず
地球という傘は一本切りなのに
母さんの傘を抜いたら少年期
人
男傘として所によりの雨
また来いと駅まで送る父の傘
天
頼つていいのでしようね核の傘
軸
風防ぐ傘ですみんな入れてやろ
兼題「好き」 川端 一歩選
方言が好きことばの奥に持つ温み
好きになる愛だ恋だといわぬ男
追伸に書くあなたとの合言葉
ささやかな幸福好きと居る
笑われない僕がやつぱり好きになる
好きなんだけれど大根抜いてくれ
完璧でないから好きさうちのひと
襟足に好きと呪文をかけておく

天笑 ますみ 弘一 一風 真理子 いわゑ 哲夫 耕治 保州 保子 たもつ 修 満津子 蜷子 セツ子 ダン吉 可住 柳伸

菌がゆるみ金魚の好きな鮎を煮てる
 幸せは好きな仕事につけること
 ビール注ぐ手が好き好きとふるえてる
 好奇心絶やさず若さ保ってる
 人生を陽気にさわぐ祭り好き
 ハートには君を命と彫つてある
 ずばり政治を刺す四コマの漫画好き
 横好きの趣味で余生がおもしろい
 女医さんが好きで菌痛が治らない
 気位が高くて薔薇の花が好き
 戦争が好きで人などいないのに
 けつたいな人です好きな夫です
 大切な命を削る酒が好き
 無難作に生きてても好きな夢がある
 人生が好きでいつでも真つ正面
 好きですよ足の裏まで見せ合つて
 男のロマン好きな人へは距離をおく
 オペ好きの噂通院やめました
 目立つこと好きなモグラで叩かれる
 古本の匂いが好きな雨男
 好きだよと叫び餅を待っている
 好きと言う詞畳んだ桜桃忌
 雨の日は心静かに好きな事
 別々に好きな事して仲が良い
 住
 人様のうわさが好きな壁の耳
 逆立ちがお前も好きか金魚鉢
 好きなこと出来るいのちの真つ盛り
 好きになる予感土踏まずが熱い

つづや 深雪 理恵 玄也 光久 修 一風 朱夏 典子 美代子 保州 潤子 光久 千里 扶美代 森子 希久子 かすみ 恭昌 朱夏 鐘造 アキ 加津子 希久子 ますみ 朝子 洋 アキ

一喝で後を残さぬ父が好き
 人
 好きな道何度こけても立ち上る
 地
 打たせ湯が好きでついのお念仏
 天
 弱者吐く人間らしさ好きになり
 軸
 死ぬほどの傷を負つても人が好き
 兼題「譲る」 神夏機典子選
 譲られて運命変わる時もある
 胸算用こは譲つた方が勝ち
 譲れないものを抱いて独り住む
 恐れから車を先に行かせます
 譲つたりゆづられたりの路地の風
 天国へ行く順番を譲り合う
 譲られた糠床混ぜるのがつとめ
 少年の譲つてくれた温い席
 主義主張一步譲つた処世術
 譲るもの心積りの仕分けする
 さりげなく一步譲つて嫁姑
 譲り合う余裕が生んだ良い笑顔
 遺産だけ欲しいが介護譲り合い
 遺言をしてまで譲るものはない
 御希望とあれば妻の座譲ります
 譲られた形見捨ててに捨てられず
 譲り合うところ笑顔にしてくれる
 譲られた椅子責任も付いてくる

メ女 欣子 哲男 かりん 妙 満津子 泰子 千枝子 千里 朱夏 伽羅 春蘭 伽羅 比乃 比志 房子 泰子 淑子 賢子 アキ

すまんなあ赤字で譲る社長の座
 譲らない夫婦でいつも揉めている
 譲る椅子苦労が山と待っている
 ジャンケンで決着ついた譲り合い
 亡母に似てはるさりげなく席譲る
 譲られた席へ気兼ねのしサイズ
 席譲る孫に育つてありがとう
 譲られた理由は知らない方がいい
 譲業に見習うことがありそうだ
 譲るもの譲つてからは日が永い
 席を譲られて潮時かと思つ
 子に相談出来ぬ遺言書に悩み
 譲つたらあかんと天の声がする
 白菊の白は譲れぬ自負を持つ
 住
 譲ろうと決めた途端に惜しくなる
 譲り合う気持ち一つで風通る
 譲るもの譲つたあとの茶がうまい
 譲るものないとき書いとく遺言状
 極楽の余り風ならわたくしに
 人
 割れそうな風船だから譲つとく
 子に譲るうしろ姿に嘘はない
 地
 人愛す心を子に譲ります
 天
 甘い水譲つてくれたのは他人
 軸

則彦 美花 章久 潤子 可住 美代子 かすみ 澄子 朱夏 義 保州 文 楓 義 楓 深雪 アキ 重人 比志 さらり シマ子 楓 楽 深雪

兼題「いとん」

安藤寿美子選

それからはとことん君が好きになる
とことん聞けば旨い話に落し穴
とことんは追求しないのが情け
あの電話とことん妻に責められる
あの女にとことん惚れて未だ一人
言い出せばとことん突く張るのも血筋
楽しんだとことん楽しんで生きる
夫と子のためとことん耐えた母だった
甘い汁とことん吸って天下り
半端ではあかんとことんやんなはれ
水だけで漂流いのち絞り切る
愛縁くとことん惚れて喜寿傘寿
道路這う鑑識班の粘り勝ち
来世までとことん付いてくると妻
不運な男にとことん付いてゆく
とことんのカードあるからあわてない
母ちゃんにしばらくはとことん疲れ
朝帰り今日はとことんしばらくたつた
とことんまで鬼になれない母である
真相をとことん聞いた数の中
とことんが好きでペンキの付いた服
人生の日暮れとことん楽しもう
拉致疑惑とことん追求して欲しい
二度も転んでとことん今日についてない
虐めには負けるなとことん生きてやれ
方便の嘘がとことん追ってくる
健康でとことん生きてやるつもり

螢 満津子 玄也 則彦 弘風 寿美 セツ子 淑子 恭昌 正坊 森子 章久 睦子 一風 ひさ乃 千枝子 月子 理恵 理恵 朱夏 かすみ 楓楽 舞夢 希久子 哲夫 富美子 房子

生き抜いて年金とことん飲んでやる
男にはとことん尽すことはない
とことんの手前でいつも夜が明ける
追求をとことんすると首がとぶ
もう駄目だめとことん調べついでます
佳
何なんでとことん聞いてくる二歳
棺桶もブランドあればと言うてはる
とことんにすこし手抜きを教えている
とことんまでやらしておけば目が覚める
とことんのはずの恨みも香に燻べ
人
母介護とことん尽しまだひとり
地
許し合い空はとことん青く澄む
天
喜怒哀楽をとことん知ったデスマスク
軸
馬耳東風とことん喧嘩売ったのに
兼題「戻る」 西出 楓楽選

直樹 義 真理子 鹿太 いわゑ つづや (笑)五月 恵子 たもつ 四郎 昭三 みつ子 弘一

行きつ戻りつ決心がまだつかぬ
語尾ひとつ元へ戻せぬ勇み足
吊橋の半ばあと戻りは出来ぬ
気の緩み元に戻ったダイエット
振り返るとキナ臭くなる昭和初期
食前酒わたしを少し取り戻す
現実に戻る 夫の顔がある
消したかな掛けたかなでまた戻る
花びらがひらひら元へ戻れない
何時の日か笑顔が戻るイラクの子
あれこれと比べて元の発泡酒
ハミングと戻る月夜の影法師
形状記憶けしき過去がすぐ戻る
富士山が見えはつとするバスボート
戻りゃんせ飾る錦にこだわらず
戻る道知らぬ諭吉の鉄砲玉
さあとれと釣銭もどる券売機
童心に戻った母は介護度五
再会が昔の風を呼び戻す
振り出しに戻り人生観変わる
戻らない昨日追ってる日記帳
体力が戻りコーヒー香しい
もう一度戻って見たい始発駅
佳
旅終えて夫婦は元の絵に戻る
見えなかったものが見え出す戻り道
ネジ一本はずれ記憶が戻らない
結果論にされた勇氣のあと戻り
里山に行けば素顔を取り戻す
人

寿美 文 ひさ乃 公誠 比呂志 朱夏 伽羅 愛論 いわゑ 正坊 孝一 保子 潤子 つづや (奥)五月 度 保子 ひさ乃 雅文 みつ子 ふりこ 千里 度 かりん 希久子 求芽 妙

後戻りしながらコツを身につける 則彦

地

古里へ戻る錦がまだ織れぬ 潤子

天

読み出せばもう戻れない周五郎 章久

軸

自己主張して戻り道閉ざされる

兼題「痒い」 河内 天笑選

いい嫁だ痒いところを知っている 照子

だんだんと痒いところに手がとどく 螢

孫の手を孫が土産に買つて来る 森子

菌痒さを感じさせつづ子は育ち 昭

隔靴搔痒あと一息のラブレター シマ子

まこの手を座右に妻から自立する 保子

足裏の痒み敷居にこすりつけ 玄也

水虫が目覚めたらしい湿度100 泰子

永遠の愛の指輪が痒くなる 瑠美子

そんなとこ痒い痒いと掻きなはん 三郎

かゆいかゆいとスキシップを求めて 志千代

孫の手を渡して妻は去りにけり 志千代

テネシーワルツ僕のハートがむず痒い 扶美代

パソコンに触るとじんましんが出る 楓楽

天ぶらを揚げてる背中掻いてやる 五月

掻きながらあら奥様と電話口 民

うしろ指さされているな背が痒い 俣子

ジレンマのギブスの中の痒い脚 賢子

水虫を靴踏んづけて掻いている 修

水虫の痒み氣にして撮るポーズ 哲夫

帯解いてやつと届いた痒いとこ 伽羅

大袈裟なお世辞に背中むず痒い 伽羅

当然を誉められ背ながこそばゆい ひさ乃

遠まわしな忠告耳がむず痒い 澄子

披露宴心まで痒い美辞麗句 遠野

口止めをされて唇むず痒い 朱夏

若い母の嫉妬痒い老婆心 俣子

痒いとこ届き過ぎてもうとまれる 睦子

菌痒いが長い目で見る後継者 洋

孫の手のように氣配り出来る嫁 寿美

錆びてきた脳が時々痒くなる 美代子

菌痒いが息子が嫁に惚れている 朝子

蚤しらみ湧いた時代を忘るまじ 深雪

五十肩痒い背中が逃げまわる 睦子

アトピーに指十本はまだ不足 篤子

住

ワンマンは椅子で背中を掻いている 鹿太

菌痒いが孫の襟に口出せず 玄也

妻よりも痒いところに気付く女 弘風

ブッシュさんの背中ばかりを掻いてはる 丹吉

美女笑んで痒いところを突いてくる 楓楽

善人で居ると仮面が痒くなる セツ子

人

母として菌痒い背なをグイと押す 扶美代

地

痒いところへ手の届かない謝罪 池森子

天

妻に叱られると背中痒くなる 軸

平成十五年 大阪造幣局通り抜け川柳

本年は4月11日から17日まで開催され、磯野いさむ・西田柳宏子・本田智彦・住田英比古氏の選で1075句の中から佳句25句・秀逸5句・天・地・人各1句が選ばれた。入選句は来年の通り抜けに短冊にして枝に吊される。

本社関係入選者は次のとおり。

〈佳句〉田口稜一・村上直樹・穴吹尚士
〈秀逸〉写メールに活躍させる通り抜け

西出 楓楽

柳友の短冊うれし通り抜け

徳山みつこ

特別常任理事会 6月6日(金) 於アウ

イナ大阪207号室 参与以上27名出席

①同人・総務部から同人総会からの懸案事項の、各地句会アンケート集計報告

②会計中間報告(14年8月・15年4月)

③昨年の値上げの効果と頁数を規定にはめることにより順調

④地方選者決定状況報告と欠員検討

⑤ホームページ開設について8月号から掲載

⑥その他「大会開催、合同句集刊行、大阪文化祭について活発に意見が交わされた」

⑦同人推薦4名

次回常任理事会 7月7日(月) アウ

イナ大阪206号室 13時から

おどろおどろ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

それぞれのスタイルで待つ里の駅
帰省待つよもぎを洗う流し台
渡月橋人の流れを見て帰る
胸さわぎさせて旅の子無事帰る
流されて四国遍路の列にいる
飛行雲大空の青まつぶたつ
女房にネジを巻かれている余生
お流れをと胸に一もつあるお猪口
運命の流れに添うて生きている
一本のカーネーションが添えてある
思ひ出す運動場の映画祭
世話になり米搗バツタ五六回
おとそいに胸はずませて紅をひく
携帯を持っていきますと姦ざかり
聞き流す噂話に棘がある
青春が小さい胸を痛めてる
居座つて札を言わずに去った猫
カーネーション花束を抱く母の胸
焼香の煙のなかにある流れ

ミサ子
その
幸子
江美
全彦
義芳
鹿太
美代子
玉枝
カズ子
よし子
秋子
信子
耕治
まさ
昭三
亀与子
孝一
満寿蔵

その昔優美を魅せた流し雛
目を閉じて聞く水の音風の声
顔は似て癖は似てないのを安堵
引越した先から届くふたりの名

打吹川柳会

大森

孝惠報

山つつじ桜と競い咲き始め
花見より公園ダンゴ気にかかる
諭吉君家出させない策を練る
夫婦旅プラン練るのもまた楽し
わさび練りババを泣かそうこの時だ
咲く時も散る時も人目ひく桜
あの色とこの色合わせ春景色
新品の靴はふわふわ出たがり屋
ふわふわと浮いた心が赤信号
ふわふわで花も実もない私です
ふわふわと天国地獄下見する
ふわふわと遊べるうちが花である
ふわふわと風来坊で職がない
ふわふわと先を急ぐな老いの恋
ふわふわと心が変わる人だなあ
合格で心ふわふわ雲の上
薄情で清々しくて良い男
リハビリは薄情なれど手を貸さぬ
薄情な人にもチョコをあげました
薄情なようだが子には金出さぬ
エンストの車を見ても去っていく
ふわふわと浮いた人生シャボン玉
裏切りを重ね重ねて策を練る

正治
澄子
求芽
紫香
善江
貴恵
重忠
博史
紀美恵
美美子
和子
玲子
禎元
清
三津子
順子
久芽代
克枝
かつみ
幸子
しろう
龍枝
美知江
京子
友楽
勝見
季芳

べっぴん薄情十人並みでええ
薄情な男のヒゲはよく伸びる
作戦を練ってカラスと知恵くらべ
脳味噌の上にふわふわ綿埃
おひとりですかと不倫な八重桜
薄情は当然だろ君の子だ
薄情に育てた蘭の花見事

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

路のとう名のみの春の匂い立つ
名人が削る丸太に願ひごと
断ち切れぬ思いが心忍び出す
関白も洗脳されて猫になる
病氣にも馴れて薬を増やされる
ボケるのはうちの筋よと予約され
君だけに話す昔のいい女
シャープ使用削り機隅で出番待つ
雨の日に赤とピンクのバラを買う
スムーズに妻には言えぬありがとう
血に馴れてやつと看護師らしくなり
家計簿の赤鉛筆をまた削る
風邪声を詫びて合格弾む声
喜寿になり知恵の袋もはこるびて
三月は出会い別れの交差点
やめとこう負けるが勝ちて口チャック
一歩引き丸く治めて生きる知恵
短めのカットで気持ち切りかえる
着ぶくれて大きく見せるエビフライ
山削る心を削る造成地

石花菜
芳光
たけ代
完司
螢
節子
孝恵
幸枝
晴美
俊子
恭一
奈良司
正純
一道
（本）たえこ
（赤）妙子
ますみ
まさこ
いつふみ
義明
春江
順生
知佐子
美代子
民
明
八寿子

金ヅルは秘書が悪いとあぐらかく

今昔のマスコットにも時代流

今ひとつ気分乗らないフルムーン

夢気分こわすうさぎ選挙カー

へそくりの置き場所忘れ大さわぎ

おろそかにされる日本語泣いている

春うらなネコも隣で船をこぐ

合掌へ脳裏かすめる神の声

名譽職削られてから好々爺

春おそし黒いスーツに重い靴

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

ちよつとだけ騙されてみる恋の嘘

子のピアノおたまじゃくしが千鳥足

船足は遅いが父を継ぐ漁船

妻の留守始末をちゃんとしておこう

シンデレラに一寸だけなる試着室

地に足のついた暮らしのありがたさ

大根もラインダンスで跳ねている

髭切って恐れ入ってる振りばかり

足下に火がつきやうと有事法

ちよつとすつあんの呼吸が合う夫婦

鈴振ってあれもこれもと願ひ事

海外を足止めされて潮干狩

愛想いい店主に足を止められる

死んだ振り黙って通る熊の愛

無い袖を振ってまあるく生きている

振り上げたこぶし下ろしてひと思案

夢一つまた急ぎ足逃げてゆく

（彌）道 肇

宏 至

ミツ子

キク子

君 江

（馬）宏

一 風

きらり

欣 子

黒 兎

正 三郎

蛭 柳

見 清

セツ子

久 子

祥 風

緑 骨

柳 童

よろう

敵 子

長 一

雪 子

信 男

昭 子

禮 子

契 子

姿見に始末の悪い爺がいる

かわはら川柳会

上 田

俊路報

勝

鉄を手自然を友と汗キラリ

お見合で思えどできぬ自然体

朝めざめ鳥のさえずり幸せだ

胸に手を自然に合わす菩薩さま

喜怒哀楽越えて自然に出る笑顔

見栄はらずさりと流す自然体

けがを見てとつさに浮かぶ老いの処置

七ころび心のけがも花で癒え

事故でけが聞いて明日の身を守る

けがをして老いの行く道灯が見えず

残留の孤児に証のけがの跡

怪我の数だけ人生の知恵を積み

京都塔の会

都 倉

求芽報

踏まれても踏まれてもはこべ白い花

歯に衣を着せぬ娘が親を見る

短冊を読みよみ花の通りぬけ

ダイヤルを回すああ弟はもう居ない

豆御飯 昔話が湧いてくる

扶養家族にならない犬と住んでいる

失敗をしたハンカチをよく晒す

ハンカチにくやし涙の跡がある

ハンカチが涙の乾き待っている

開かれた皇室写真大写真

浴室に心休まる花がある

教室に僕の青春刻んどく

余吏子

好 道

道 子

雅 子

泰 子

静 子

聰

悦 子

かず恵

登 生

俊 子

俊 路

春 蘭

あやめ

達 子

年 代

武庫坊

美 穂

啓 子

克 治

郁 郎

高 栄

庸 佑

柳 宏子

モナリザの目から逃げられない部屋だ

本ものを望みいつばい子をしくく

望郷の念が挫折をくい止める

この上は何を望むか旅の宿

身の丈に合わぬ望みは切り捨てる

健やかに美しくと離れる

子に託す望みだんだん先細り

いい方に望みを持って明日を待つ

安心な老後 気流があたたかい

旧交を温め合つたい気流

ほのぬくい気流に乗って来た黄砂

気流読むことが巧みな父の風

気流にのりSARSこそまできていそう

穏やかな気流にのってフルムーン

家中に朝から妻の乱気流

佳句地十選

（6月号から）

安芸云田

泰 子

光 久

秀 夫

かおり

寂 子

静 風

芳 郎

俊 路

昭 子

ア キ

茜

磔

欣 之

典 子

英 子

福 旺

メ 女

満 子

益 子

ルイ子

求 芽

萬 的

正 坊

宏 子

葉 子

幸 代

乱氣流抜けた決め手は母の鈴

川柳塔なら

坊農

柳弘報

家中が揃い手桶と花持つて
粒揃い新人社員期待かけ
お揃いの稚児の行列春はそこ
思い出は背中押された塾の道
準備万端揃う会場まばら
身構えてスーツ手にする試着室
家族みな無事で音符の歩が揃う
純白のスーツが似合う美人秘書
子育ての汗をスーツは忘れない
塾に行く時間を大も知っている
合併の是非に揺れ出す町のエゴ
ノーベル賞末はとる気の塾通い
紐付きの定期で通う夜の塾
塾帰る路傍の石を蹴って行く
花びらをつけて帰った塾カバン
冥土への願いは是非とも妻はあと
姉妹の膝を揃えて離あられ
紺スーツ支持政党は口にせず
長生きの是非を問われる痴呆症
ほろ酔いの父はつたり塾帰り
飲み込んだ言葉の是非へ呷る酒
少子化に愛を教える塾生やう
子の瞳から優しく消えた塾カバン
指切りのきつとへ句う沈丁花
塾よりも大地を駆ける子の未来
イラク戦争是非が世界を二分する

百合子

欣子

更紗

敏子

カズ子

積子

とし子

孝子

秋泉

蘭香

義

登美子

茂雄

章久

春雄

理恵

絹子

春蘭

真理子

太一

和夫

職安へあしたの夢を買うスーツ
遺伝子を研いでくれる塾を選ぶ
優勝かける千秋楽の揃い踏み
くたびれたスーツに染みているドラマ

西宮北口川柳会

黒田

能子報

風薫る街にみどりが深くなる
草に寝てみどりに染まる山頭火
風はみどりでもないな刺は抜いておく
新緑の明日香路炎えて古史ねむる
新茶摘むみどりの風も香りくる
しし威し緑の庭にしみ透り
過疎へ旅不意の手洗い列つくる
姑が不意に訪ねて来て慌て
風向きが不意に変わって進めない
直球を不意に投げられ返せない
花束が不意にとどいた母の日よ
好きだよと不意に言われた不整脈
いつも見える辻看板が今日は無い
辻曲り家に灯のある安堵
道しるべさりげなくある里の辻
だぶらせた一瞬亡母に詫びている
思い出がだぶって読経上の空
指もつれダブルクリック右左
ダブルミス許容範囲と励まされ
ダブルスコア浮世は悲し運不運
春や春も一度見たい夢がある
枕木を歩きD51懐かしむ
げらげらと笑いつづける春のバラ

弥生

惠美子

笛生

秋雄

房子

鹿太

たす子

春蘭

トミエ

嘉彦

奮水

庸佑

能子

章子

江美

石舟

キク子

美代子

哲子

富喜子

良恵

いたる

松煙

無緑

不幸にもめげぬ母子に春が来る
坪庭に妻と二人のバーベキュー
ますますの一日だった夕茜
こんな眼が他人の目です凸レンズ
初給料孫のやさしい贈り物
花園を舞うてみたいと蝸牛
母の日に泣かしてしまおう贈り物
むらくも川柳会
毛利
年輪へいつか別れの日と思う
床板の年輪見事樺板
人生の年輪重ね奥深く
情勢が変わりきつぱり留保する
年輪という老木が動き出す
きつぱりといやと言えない夜の蝶
年輪を重ね大きな花咲かす
献立てはいつも気ままな二人連れ
満開の桜笑って月も笑み
春の海さざ波夢をさらたつてく
仏間から孫も感謝の鉦を打つ
満開の今年の桜長く咲き
畑打てば蛙寒いと寝てござる
満開を待てずひろげる花見の宴
普段着で一つ拾ったよい噂
川柳ささやま
遠山
可住報

七度を探して止まぬ我が人生
大きい葛籠もらつてからは悔いばかり
生き方を変えて女の目もえる

五月

光久

澄子

比ろ志

文

絹

孝一

幸報

清吉

定子

安男

明朗

早苗

彰

昭子

ふさえ

寿

美恵子

美喜子

信夫

八重子

惠美子

惠美

純子

多美子

ご無沙汰に梅一輪を添える文
老眼鏡まだその上に虫眼鏡
年金を刻んだ父の手紙見る
妻の目がほつと安らぐ朝帰り
子の帰省メニユーが弾む母のうで
目の高さ下げて暮せば楽になり
幸せは女であつた文を書く
母さんが財布と相談するメニユー
旅の宿メニユーいろいろ舌つつみ
友からの絵手紙便り春を告げ
眼が合つたなりゆきで飼うペット大
珍しくないが温い荷が届く
戦争を避けられぬまま目が曇る
遺産分け珍しいも皆な寄り
市場への道とは知らぬ子牛の目
珍客にされて黒豆攻めにあう

三幸川柳教室

古久保和子報

幸せの合図手足がよく動く
右向けの合図よい子になつておく
赤いスカーフ巻いてときめく初対面
レッツゴーの意気で乗り切る正念場
合図よりバックミラーを信じてる
一ランク落とせば答えすぐに出る
急所つかれ答えが揺らぐ一夜漬け
自問自答悟れぬままに川に添う
伏線を張つた答を出してくる
難しい答は明日にして眠る
素晴らしい答だ孫を抱き上げる

美智子 富子 八重子 靖子 とみ子 かほる つや子 君代 朝子 康子 美紗子 富美 寿男 哲男 芳郎 可住 起世子 靖子 幸 碧 武 伊セ 嘉平 三千子 准一 次根 清史

受け答えピンポン玉のいい夫婦
若い日の答に老いが揺れている
好きだから答を少しカラフルに
羽ばたきへ囁んで含める答出す
孫自慢の花が咲いてるクラス会
咲くことでボケ防止する派手な服
髪染めてまだまだおんな咲かせます
向こう岸ばかりに咲いた赤い薔薇
咲く時はきつと微笑む花になる
木瓜の花咲いて喜劇が動き出す
咲き方のヒントを溜めている薔
咲く前に言いたいことのある桜
石仏に手向けの位置で野菊咲く
髪切つて春爛漫を手のひらに
坂の多い街だ夕陽が美しい
生きたとは丸い地球に坂がある
胸突き八丁あと一息を試される
ひさ小僧がケラケラ笑う下り坂
恋はウフフ坂を転がるレモンたち

川柳塔わかやま吟社

牛尾

あいまいを許さぬ針が錆びている
あいまいという物差しがあり夫婦
あいまいな微笑男の勘ちがい
イエスともノーとも卑怯だわあなた
言い訳は苦し紛れであいまいに
遠い日の面影たたむ蛇の目傘
面影を追えばすいすい飛ぶ螢
御尊父にそっくりですと言う和尚

昇 正一 登美代 千秀 義男 一步 当代 かず子 栄之進 章子 桂香 鉄治 公夏 朱保 町子 和子 緑良報 あき子 輝子 裕美 克子 哲郎 稚代 保州

胸深く棲む面影と生き続け
鏡の中に母の面影見せしめよう
面影が似ていて胸が熱くなり
面影が故里に似る駅で降り
田植する棚田の母はミレーの絵
乳房の児母の面影焼きつくる
茶の花に生きてる祖母の面影が
夕暮れに面影たたむ亡母偲び
はぐくめば答えてくれる植木鉢
杉植えた豊かになれるはずだった
バラの木を植えて毎日話しかけ
南天を植えて新居の庭にする
オーブンのボタンを押して翔んでみる
オーブンドア少年しかと握るもの
心けゴマ勇気を出して言うてみる
心の底までオーブン男もえている
オーブンにし過ぎそろそろ終わる恋
オーブンにすれば何でもない秘密
ときめきを貰って聞く新聞紙
勿体をつけて秘仏のご開帳
パチンコ屋軍歌と共にオーブンス
オーブンス直ぐ消えますあの店が

サークル檸檬

西出 楓葉報

まだ野心あるから飯をたんと食う
よく笑う人になげた花の種
僧衣からポロリと転げ出た野心
夫婦茶碗ジョークが少し足りません
お愛想の笑顔の中にある野心

鉄治 美羽 順子 三男 英子 美子 和 佐一 富美子 豊太 和代 優子 結実 大輪 寿子 よしこ 正博 怜 利治 智三 三喜夫 光久 楓楽 房子 希久子 哲夫

生きている野心ないとはいきれぬ
ゴミ袋下げて野心も遠くなる
砕かれた心の破片戻らない
七十年生きても若いなところ
正札の顔をつぶしていくデフレ
もう野心ないけど花は美しい
風みどりみどりに野心などはなし
あしたつく嘘をとるところ煮ています

川柳塔鹿野みか月

土橋

螢報

朔日の氏神参りして憩う
新緑の清々しさをデート中
履歴書は賞罰なしで清々し
草笛は清々しいよ初夏をゆく
新緑の山の空気を腹一杯
辛苦しんく花が咲いてる卒寿坂
面接へ内弁慶がゆれてる
冷汗にのどが乾いてしゃべれない
乾き易い愛を抱いてる幼な妻
初恋も乾いてセピア彩に褪せ
朝晩に水をかけても枯れそう
見つめられ言葉はみぞおちで乾く
生活をうんとせばめて生きるかな
居酒屋でその日暮らして油差す
身の丈といつしよにくらしまで縮む
寝る間にシャツが洗えて飯が炊け
片耳をふさいで暮らす理想像
Uターン吸い込む空気清々しい
夢いっぱい自作自演のくらしする

いわゑ 保子
あずき たもつ
遠野 正坊
みつ子 義子
英夫 かおる
菊乃 八重
茶子 喜与志
くに子 久枝
弘子 彩子
実満 孔美子
武子 和子
幸枝 きみ子
公子 富久江

無垢清浄のひとみ持つおさな兄よ
庭先にトンボすいすい五月晴れ
愛無限清々しさを身につける
人間を止めたなら清々しくなった
母の日の清々しさを子と遊ぶ
朝一番玉露一杯清々しい
清々しい木の芽萌えてる山が好き
清々しい朝たこわりみな解けて
清々しい五臓六腑にしてあげる
筈が孟宗竹になる頃だ
正しいと信じて青い空を見る

竹原川柳会

時広

一路報

桜が咲いて桜が散つて家族の和
おだやかな日々桜が咲いている
初孫の記念桜も六歳に
みどり風桜吹雪にパワーマらう
安らぎのヒントをくれる夕桜
父も欠け母も欠けても桜咲く
桜モチ日本の春をいただこう
人に愛捧けて果てる桜花
草木染め樹皮にひそんだ桜色
滝のごとだけ桜の風を見す
かか地蔵抱けば嬉し春になる
朝日山父の高さでとんび舞う
花の宴一期一会の昭蓮寺
リュック背に老人パワアの西方寺
あなたにはナイショ手作りお弁当
おめでとう夢をリュックに門出の日

立亥 かつ乃
陸子 盛桜
汲香 はお
房子 美恵子
諷人 石花菜
螢 蘭幸
千枝 汎美
孝枝 菁居
笑宏 力
正宏 民恵
不朽 不朽
慶半 節生
規代 史子
敬子

保険証忘れず入れて旅支度
子育てを終えて向き合うフルムーン
武蔵愚んで武蔵の里に春の旅
旅疲れ瀬戸の入り日に癒される
赤い靴は晩学の旅弾む
何処へでも何時でも一緒二人旅
旅人になると素直になる私
独り旅が似合う山頭火の草鞋
人生も紙幣の旅も増える数

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

手も触れず泣いて青さが折る幸
あきらめてこまできたがもう一度
不愉快だあの代議士は佐賀んもん
国産の力士土俵の金が待つ
男の子ばかりと遊ぶ孫むすめ
知らんぶりの老婆ちゃんと見抜いてる
歳ですに反論できぬ物忘れ
一家団欒春を囲んで放さない
拾われた秘書の名刺が主を刺し
人間の盾に讃辞は贈らない
川柳大坂 高木
信醉報
少しづつ別れを近くするあくび
運転手が欠伸一台後に乗る
五つ星それより母のにぎりめし
金欲と無縁心が澄んでいる
生欠伸戦争論をぶつ総理
花一輪よく咲いたネと声かける

房子 万年
夏喜 栄恵
幸子 淑子
節夫 静風
一路 兵八郎
輝夫 晴翠
高明 勝視
水笑 虹汀
四郎 正剣
弥生 利昭
いつふ 朝子
ダン吉 ひろゑ

重荷でも流石に親は捨てられぬ

遠い恋桃の節句に呼びもどす

お世継ぎは国傾けど居るらしい

おばあさんパス忘れたんまたかいな

権力を餓死と脅して拉致をする

失言で疲れが見える小泉さん

田も畑も捨てぬと決めた国訛り

ロボットが欠伸してます仕事切れ

窓の雪話は師のこと友のこと

核持った核を捨てるとよく言うよ

捨てた夢また芽をふいた春の朝

拉致事件戦時になれば遅い春

相棒のおかげで心まるい風

捨て切れぬ未練を一つ抱いて生き

国連が欠伸する世が来る希望

桃色のワイシャツ若さアビールし

ぼろぼろの歳時記今も捨てられず

かみころす欠伸お経が長すぎる

肩書きは多いが立飲み入りびたり

移り気な色香が咲いた桃の鉢

ボケットに明日の話題話めて寝る

桃の花男道の道を照らしてる

緩やかに登って行く我が余生

真つ直ぐの背中が好きで桃の花

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

日焼けした顔が笑ってる幸せよ

ひたすらに文化の違いの群

ふるりの文化伝える孫がいて

宏風

一隆

隆司

巖

きよし

兵庫

楽子

章久

春蘭

かよこ

美花

功

柳昌

鉄心

照月

青道

重人

司

洛醉

柳弘

信醉

金太

一歩

聖子

恵美子

好栄

来し方を娘と語る沈丁花

移りゆく文化にしがみついている

顔たてて聞いて居りますレモンティー

パソコンに指図をされている顔だ

大神楽文化の顔でやってくる

胃カメラに片道切符預けるとき

もの言わぬ父の怖さに頼りきる

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

肥満体苦勞人とは思われず

浮き沈みしながら越えた四十年

水ぬるむ女のハート弾みだす

こだわりを水に流して丸く棲む

片思いほんのり温い夢を抱く

いい汗をかいた日の夜は煩わす

根に持たずさらり流して青い空

明日の事判らないから生きられる

どの子にも親の愛には変りない

蟬の声かき消してゆく救急車

水入りの力士へとへと湧く観衆

娘夫婦と暮らす夢が叶った老いの春

久し振りにローカル線で聞く訛り

花一輪手向けてありし通路墓

カアさんに定年はない水の音

東大阪市川柳同好会

森下

従っているけど拍手などしない

一生を従うばかりで平で終え

五十年従って来てまだ文句

民子

ちよえ

はるみ

かつ子

博利

清泉

白汀

吟笑

ひかり

かおり

いさむ

輝夫

勝

八重子

賢

治延

あきら

放任

よしみ

寿々女

貞月

文仙

愛論報

ダン吉

信治

猪太郎

一年の別れが近いユリカモメ

近すぎて呼吸合わない時もある

近道を知らない父のちびた靴

春近い風に脱皮する女

あの時からあなは近い人になり

文豪のペンと語らうかくれ宿

貫いた愛と誠を綴るペン

ベン先に春の香りを載せて書く

シャイなのねうつむいて咲くすみれ

バラ一輪芯の強さで凛と咲く

地の温も息吹に答えますすみれ咲く

貴方の息かけると咲いたバラ一つ

知恵と金やがて花咲く法善寺

砂浜で二人仲良く足濡らす

泣き砂の愚痴を素足が聞いている

岸和田川柳会

長谷川呂万報

ほめられて耳のあたりが温くなる

傷心も水温も頃和らいで

戦場に温いスリーブを届けたい

友情の温みで動く車椅子

母ちゃんの温いお膝で耳掃除

子沢山破れ障子に温い風

温かい人柄偲ぶ通夜の席

添書に温もりがある筆の跡

ミサイルボタン押すのは温い手だろうか

おにぎりに母の温もり満ちてくる

値切り無視老舗を守る三代目

まけてんか言って大阪の客値切る

三重子

美弥子

とみを

弥生

たもつ

湖風

雅文

秀夫

良子

朝子

愛論

シマ子

章久

東雲

和子

俣子

岩夫

ゆい

守

基

仁緑

甚一

さよ子

ダン吉

狸村

路子

けい子

値切つたらあつさり負けて拍子ぬけ
見栄捨てて値切つてみたい百貨店
お望みの色に染まつて生きてます
八百よろず望まぬ神もおわします
宴の余興二人羽織はうけにうけ
陣羽織も鎧もいらぬ世を願う
のど自慢羽織袴で鐘一つ
ハイポーズ羽織袴の七五三
寸劇の二人羽織の夫婦仲
真打ちはすぐ脱ぐ羽織着て高座
冗談が羽織袴に通じない
さりげなく高座で見せる羽織裏
これからが見せ場羽織を脱ぐ高座
調子の二人羽織に沸く拍手

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

入学式母のよるこぶ涙見た
学び舎のスタート地点夢を抱く
入学の夢も無残にイラクの子
入学へ次のステップ踏み出した
入学は無理でも努力認めた
入学へ周りの期待背おわされ
将来をかけて羽搏く大学へ
入学へ社会参加の一步踏み
入学の朝赤飯に目を覚ます
入学へ十字架ときに重くなる

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

リストラや華麗な過去や今いずこ

里江 積一 呂万 珠子 一脩 鍊太 英雄 盛之 寿海 笑司 東吉 みつ江 蛙城 柳宏子 雄々報

日向ぼっこうつとり眠い昼下り
うつとりと夢の世界の宝塚
うつとりと眺めて飽きぬ幼児の寝顔
ふわり月下美人うつとりとひとり
道具やをあててさせてる通り雨
怒鳴ってる顔の道具は怖くない
魔園で象さんどこへ行くのやら
釣り道具うつとりはねる魚の夢
今帰る電話があつて三時間
今はもう無色にした過去の日々
みどりの日ぶつと昭和が顔を出す
口ほどに物を言わせる目を握える
狭い庭なお狭くして咲く桜
むこう向きでいびつな風をやり過す
弟を悔やんでくれる女と逢う
蝶を追う子供の膝に傷がある
初蝶に出会うホームレスの青テント
菜種梅雨動く歩道にテロリスト

城北川柳会

川久保睦子報

外出のたびに降られる雨女
姑さんに奉られて貝になる
肩車安心をして見渡せる
遣いすぎるなど金貸しする注意
春の風邪つまらぬことに声あけ
春休み山盛りプラン風が押す
梅の花不況知らずに咲き誇る
実戦をキャスター付きで見るテレビ
脳みそがだんだん減った物忘れ

千歩 政子 柳一 春蘭 あい子 東雲 高栄 達子 幸子 純 和子 満寿蔵 東園 吉太郎 寛之 昭三 久子 勝巳 嘉矩 しづ子 定男 年代 武庫坊 光穂 薫

暗いこと忘れて今を頑張ろう
京のおぶ漬けほんとに食べた野暮な人
銀行が利子を払わず手間を取り
アドバイスだけでは済まぬ子の相談
分け合った痛み片方は引きずって
アラビアの修羅の巷と同じ月
単身で行くと話が丸くなる
シャボン玉割る気まぐれな春の風
詰まつたら親の懐あけに来る
バッグから人なき如きコンパクト
家の中丸く納める母の芸
筋書きは銭の要らない余命表
外食がとっても好きなイヤリング
立ち寄つたばかりに駐車違反料
さあやろう昼からやるか明日やるか
妻渡米テロに遭わないよう祈る
旅疲れ主のブーツも横になり
背信へ精光の月まぶし過ぎ
ふところで口説き文句を温める
胸せまる口説き文句が欲しかった
ひとり身の不安をいつも抱いている

岩美川柳会

石谷美恵子報

虹を見た女ころは虹になる
バーゲンが女ころを鬼にする
巢立つ子を案じり母のアドバイス
案じた子今は社長で親を見る
丹精の肥やしが過ぎたか枯れさせた
なんてたつて越中富山の熱冷まし

はるお 重忠 一京 蟹郎 修 久留美 あやめ 正 求芽 綏子 史風 倫子 順三 典子 柳弘 重人 とし子 あき子 公一 照子 千里 ひさ乃 昭子 志華子

ときめきのある日ない日の発泡酒
どこも不況空手で戻るブーメラン
古希過ぎた息子案じている卒寿
靴を捨て熱砂の中へ足晒す
ブス等と言えば死ぬまで呪われる
熱がでる頃には恋が冷めちゃった
ときめいた昨日の花はよその花
漁火に女ころが揺れている
寡黙ほど女ころは騒ぐもの
人間を磨き過ぎたらミスばかり
ときめいていれば十歳若くなる
ときめいた頃には触れず家裁出る
朴念仁女ころを酒で攻め
腹案はあるが出さない狸たち
失敗を振り返るから明日がある
若鮎はときめきながらジャンプする
熱冷めぬ内だとことん鍛え込む
親は子を親愛し平和な日
ときめいて夢中である青春賦
人生の案内状は持っている
案の定妥協で描いた夫婦の絵

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

昨日の雨が花を散らして春の罪
昨日から続く冷戦妻無口
一石を投げて器量を試される
クロイン人間の領域ですそこは
ダイエツト決心つけた試着室
ボケツトにときどき妻のリトマス紙

大漁 一玉 孝男 完司 蛭 静生 主一郎 一粋 忠良 雅女 公乃 睦子 芳光 節子 裕子 希久代 照子 菖子 美恵子

留守電に任せて夫婦春帽子
留守電に花の便りと友の計と
うとうととほる儲けする夢だつた
この人とならうとうとと出来さうだ
無呼吸症ついうとうとの春日和
うとうとにビシリと一つ座禪僧
うとうとと浦島太郎になった夢
ブラームスの曲にうとうと春の風
うとうとのボーズで耳を立てている
公園の風は無口でうとうとと
香らせて女は自己を主張する
墨の香に心静めて筆をとる
肩抱けはほかにシヤネル匂う女
いつまでも見守り叱る亡父遺影
酔い醒めの水に甘露の字をあげる
そむかれた女に早い四季めぐる
一日いちにちのちいとい花だより
空気ではなかった妻の留守五日
妬くほどは思っていない紅椿
腕組んでいるカッパは妻じゃない
好奇心ばかり重荷の老いの坂
人前は夫唱婦隨になつてい
診察の医師の笑顔が春を呼ぶ
叩かれるたびに大きくなる野望

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

地獄極楽掟を破る銭の花
掟など無用私の色を持つ
ホルモンの匂いが掟破る駅

活恵 諷云児 半蔵門 萬の 泰雄 光穂 稲子 初恵 和子 茂 尚士 きよえ 柳宏子 孝一 メ女 秀夫 石舟 澄子 憲夫 満寿蔵 治三郎 無禄 惠美子

掟にはすぐそつばむく風見鶏
画布の私語掟を破る彩使い
掟とは人がつくつたためけないで
人間の腰が握つている基本
徳儀くつと堪えたい重い腰
ダイエツトできない食費削つても
ひと言を削つたために角が立ち
未練断つ戸籍削除の朱い印
気分いい今日の幸せてんこ盛り
茶柱が心くすぐるいい気分
おだやかな気分になつて写経する
津軽三味弾き手の気分まで貰う
明日からのノルマ忘れるコンサート
ゴキブリを叩く上司の顔浮かぶ
そしてまた信じて同じ繰り返し
ケールカーに乗つて子供にかえる父
老いらくのお洒落つまずくもどき寒
主婦業に定年もなし米を研ぐ
夢くれる人と枯れるまで女
満ち足りた老いのくらしよ翁面

川柳塔おとり

原みさを報

多すぎるチラシそんなに買えません
蟹食いに来いとチラシが入れてある
ジョーカーを掴んでみたいから来る
うんざりするほどちらし入れてくる
流行に遅れぬようにチラシみえる
週末はちらしの山が押し寄せる
思い出があくびしている日記帳

一風 東雲 和夫 欣之 庸佑 ミツ子 宏至 柳伸 民 ますみ 幸生 とみを 弘直 ひさ乃 きよみ 春蘭 欣子 弥生 シマ子

思ひ出をたどるといふも母が居る
引越す度母の手伝ふ背が老いた
思ひ出も好きと嫌いに分けてみる
思ひ出がアメ色になるツゲの櫛
ドングリが思ひ出させる童唄
バンドラの箱に思ひ出詰めてある
おもひ出を柱の傷は忘れない
アルバムに思ひ出たる一人旅
思ひ出がいつばい夫婦喜寿迎え
思ひ出が心のぬくみ知つて居る
口げんか出来る幸せだつてある
けんかならへソの高さで勝負する
神々が石油をめぐり喧嘩する
けんかして口をきかぬも二三日
泣き笑い夫婦けんかも腹がへる
口げんか勝つて虚しさだけ残り
今にして思えばあれもけんかだろ
毎日が喧嘩のような会話です
車椅子に乗つて気付いた人の愛
自転車が足となつて居る老いの坂
嫁姑一線を引き乗る車

川柳塔まつ吟社

津川

紫見報

居眠りの背中にそつと肌ぶとん
うとうとを郵便受けに起こされる
いい酒でいい盃でいい眠り
居眠りをしながら何かほやいてる
居眠りで大事な話聞きのがす
居眠りに膝の赤んぼ落ち着かぬ

由多香 登美 艶子 舍人 黙光 彩昭 邦弘 一小 仁子 彰雄 義弘 雅通 大鯨 清子 宏章 幸次郎 和子 風花 富貴子 道子

浜丘 静恵 茂美 義良 主詩朗 政子

誘われて揺れてレールを踏みはずし
レールから降りて気ままに右へ行く
カレンダー趣味のレールが書ききれず
初夏ですなレールの外で会いましょう
枕木はレールの唄で生きたられる
玩具のレール時々謀反おこす汽車
花薰る五感すべてが癒やされる
やつと古希薰る心を捨ててない
野菊一輪薫るわたしの誕生日
人は去るころに薫るものくれて
薫風に紛れて吐いた嘘一つ
明日という日のために今薫る
久し振りに化粧してます夫の留守
白寿まで女は紅を離さない
化粧して女はひとつ嘘をつく
雪化粧皆平等に白くする
失礼にならないほどに化粧する
母さんの化粧にいつも待たされる
手ぶらだがみやげ話は山とある
手ぶらでは感謝の気持ち伝わらぬ
どうしよう手ぶらで来てと友が言う
手ぶらでは帰れぬ意地を持って来る
手ぶらの客が大手をあつてやつて来る
手ぶらでも寄れる気安さ母が居る

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

柵越えた羊が柵を恋しがる
正面で向き合う自信なく逃げる
逃げきつたつもり尻尾が見えている

蘭 俊一 ちえこ 日出子 玲子 秀子 邦代 たけし 房子 きみえ 多賀子 畔 しみ子 治代 知恵子 ちかし 螢 叮紅 芳山 注湖 幸子 昭二 桂子 紫晃

慶子 慶子 能子

奈落から逃げる足腰鍛えてる
ややこしい話が薔薇を追いかける
嫌な人と一本道で逢う破目に
逃げるなど故郷の山が動かかない
割り勘の端数を口にせぬ友よ
母さんの散髪長いのがのこり
残り火をかき集めたら詩が生まれ

倉吉川柳会

竹信

なかなか我が身の悟り開けない
花嫁のように傘さす牡丹咲く
美しい鶴に目移りして困る
うつむけば片栗の花に似て美人
魚心ある女ヒタリ当てる癖
目シ玉の光り具合で魚買う
勝ち進む駒はやつぱり美しい
兜煮をして食べようか子供の日
欲深い手を泣かせてる槐の刺
さんしよの芽いわしはどこへいったやら
化粧せぬころと素顔美しい
入り口を開いて今日の川柳会
母の手は万能薬を作り出す
ステーキより鰯の好きなお婆さん
サバ・イワシ・さんまで今日も元気で
手を出したおかげで今の彼がいる
あかざればあるが成功線はない
口達者魚さばけぬ女達
開発も自然保護にも同じ鉄
魚の目が扁平足を刺激する

加津子 アキ シマ子 弘直 欣史子 香住 喜美子 照彦報 和照 京子 玲坊 勝譽 和枝 季芳 重忠 石花菜 ゆり子 賀恵 睦子 荻江 泰輔 芳光 悠子 秋草

満開を父に見せたく車椅子

胸襟を開き主治医と差し向かい

ほととぎす真似てみたけど雀の子

美しい手裏めて触つてたたかれた

若芽ふく打吹の山美しい

不器用なこの手をそのまま譲り

手を握り返して男火の粉浴び

可も不可もなかった今日の手を洗う

四本の手で建てた家一人住む

胸ちよつと開けて胃袋とると医者

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

片言の英語身振りで押し通す

案内図英語ハングル日本文字

外人に通用しない英会話

日本語のしゃべれぬ孫にまず英語

簡単な英語で世界食べ歩く

カタカナで日本語英語ややこしい

最高の笑顔で言おうグッドバイ

ラジオ体操終つて寝ます夏休み

体操はわたしを春にしてくれる

頭にもたまに体操させてます

体操をせねばふしおし錆が付く

体操と訓示なければ良い社長

チューリップと体操してる幼稚園

新体操男の眼泳がせる

呆け防止に効くビタミンの名を忘れ

ビタミンで枯木に花を咲かせたい

ビタミンなど知らぬ古老の顔の艶

日出子

康子

よしえ

十三男

芙蓉

節子

雄々

忠良

紀美子

照彦

一知

たけし

志洋

悦子

元紀

昭子

扶美代

章司

さとみ

六点

みつこ

ダン吉

泰子

満寿蔵

久仁雄

敦子

かつみ

悪政に効くビタミンがありません

ビタミンの注射が欲しいこの景気

ビタミンの力を溜めている昼寝

遊ぶことそれが私のビタミン剤

ビタミンのかわりにお酒飲んでる

ビタミン剤より献立へ妻の知恵

ビタミンのどれが効いたか立ち直り

愛と言うビタミン欲しくなる絆

責任を持てと鏡に諭される

揺れている心見抜いた水鏡

この鏡ちよつと映りが悪過ぎる

あべのまで刺激を買いに僕の足

和の中に米寿の母がデンと居る

川柳塔みちのく 小寺

一汁一菜これも人生童頭

あつさりとした性格を愛される

修羅の日の鏡きれいに拭いておく

あつさりとグラランドゴルフへ衣替え

台風でプラン狂つた日のカルテ

天下りあつさり俺の上にくる

一番茶あつさり味に本音でる

あつさりと妻がお先に逝きました

バックミラー後の美女が目に入り

淡淡と独りの誕生日が昏れる

騙されてあげますさくら花の闇

どの鏡見ても一癖ありそうだ

さくらだつてあつさり散つた訳でない

屑龍に直通をする嘆願書

敏

耕策

吐フ

フジ

専平

庸佑

美代子

重人

一壺

りつえ

いさお

忠宏

柳宏子

花峯報

あすなろ

しげる

きよし

隼人

順風

慕情

花匠

愁女

井蛙

黙人

千加子

一花

五楽庵

岬川柳会

八十洞洞庵報

口紅できりつと今日を引き締める

設計図引き直しての仲違い

ガーデニングいつか花咲か婆となる

お土産の値踏みがばれた仲違い

赤いルージュを少し気にして古希の街

ドンクリがひとつ秀でて仲違い

うす化粧ルージュに女匂い立つ

肩の凝る話にうどんのびている

貧富の差ありて人々仲違い

春も過ぎルージュも褪せて焦り出す

遠雷をゆとりできた雨あがり

どたん場に手をさしのべて真の友

花吹雪吹き溜つたか桜草

おしゃべりは心の凝りを柔らげる

川柳塔きやらほく 福代

収穫の夢ふくらませ打つ春田

念仏橋の桜は深い哀を知る

さくら咲くサクラの頃に老母在す

新緑が微笑むように皆をよぶ

輪廻転生たんぽぽはまたたんぽぽに

森へと続き全身染まる深みどり

三寒四温うす着厚着めまぐるし

緑水湖栄華の影を映してる

殺し合い始まり桜花もはしやげぬ

静謐に桜の今は無心なり

スススススヘイタイススス旧一年生

みやこ

令子

和美

蛙城

勇

和香

洞庵

桜琴

とみ

里子

茂平

昌夫

富美子

すみえ

日枝子

正子

晶子

やえ

てい子

弘子

恵子

ゆき

田鶴

寿子

天雀報

騒音をさけて山の気深く吸う

花筏浮かべて集う趣味の会

近く春を惜しみ明日も花巡り

戦争は囃んでも碎いても呑めぬ

溪谷の花にも付ける修飾語

世はおん危機感さほど感じない

桜満開ノートも少しうわの空

桜花爛漫この町とても好きになる

満開の桜出迎え吟行会

桜から桜この世の橋越えて

花のトンネル私も桜花になつて

空が青いからバラにしっかりと水をやる

春霞桜の下でハイチーズ

狂うほど踊りたくなる花の下

来年のこと桜の下で指切った

川柳ふうもん吟社

杉本

孝男報

落ち武者もまつ毛に夢をまだ宿す

魂が行方不明だ春うらら

リストラの波間を泳ぐ人地獄

連休も財布と父はグロッキー

まだ妻の小言をびびれながら聞く

なにくそと毛生え葉を飲んじやった

春うらら景気どうあれ花に酒

ボケットの拳びれて出たがらぬ

グロッキーゆつくり癒す仕舞風呂

美人湯にまつ毛片方浮いている

春うららプラス思考になつてくる

毛が五本抜けたぐらいで黙り込む

八重子

時子

春枝

千絵

瑞枝

清人

玲子

千春

天雀

千代

なみ

杏

蘭

富美子

亜弥

孝男報

洋々

一瑤

益子

一弘

公弘

はるお

志緒

一粹

山節

無限

鬼桜

忠良

和紙の花生命あふれて咲き乱れ

髪の毛があるうち写真とつておく

信じてよ育毛剤の使用後だ

堂々と反論されてびびれだす

春うらら妻が翔ぶ風待つて

隙だらけ男が鼻毛抜いている

匠技人形温い目で語る

古の骨にも戦愚かさよ

びびれでも浮気の味は忘れない

戦争は人を殺して誉められる

駆ける子の頬も光つて春うらら

春うらら人も財布も隙だらけ

グロッキーになつてポロリと本音吐き

一本の毛から秘密がこぼれだす

サラ金の取り立て逃れグロッキー

船酔いに足腰立たず目も回る

びびれつつ浮気を何故か止められぬ

毛むくじやらの蓄が抱いている期待

南大阪川柳会

吉川

寿美報

鬼と仏同居している肋骨

耐えてきた月日がかもすい同居

同居後は母にも趣味のスケジュール

同居して大きくなった笑い声

同居以後ガマンガマンと打つ時計

知識の大河点字の上へ流れ

神経を指に集めて読む点字

気配りが届く点字の説明書

自転車に点字ブロック泣いている

はつ江

茂登子

修

春名

裕子

美雪

三津子

圭一郎

季芳

秀四

悦子

長波

裕花

保子

雅女

蟹郎

毅

孝男

寿美報

たもつ

萬久

重人

楓楽

珠美

庸佑

三男

直子

奇跡から点字覚えて世の中に

アイラブユー点字で書かれてわからない

手話点字愛が生まれて指輪する

点字打つ子の明るさに救われる

我が家で十坪足らずに蝶が舞い

地下倉に母祖母曾祖母の壺並ぶ

骨つばの半分妻にあけておく

正論を吐く一匹のインクつば

つば割ってすつきり脳を入れかえる

塩つばの底に哲学持つ母で

やんちゃな子意外な知恵を持つている

言い負けて後から知恵が湧く不覚

知り合いの刑事と歩き護送めく

神様も人の死ぬ日は知らせない

知名度のうらに涙のあとがある

退陣の式乾杯は裏腹に

お人柄ポスト讀って御退陣

リコールで退陣ぬけぬけ再出馬

部下からは退陣決める心意氣

退陣の兆しを知った診断書

雄学の知恵が詰まった古時計

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

バーゲンを選ぶ戦争を知らぬ人

産まれ来る赤ちゃん親を選べたか

貧乏くじ選んでしまった運命線

遺伝子か親娘が選ぶ同じ歌

これからも二人は洪い草木染

新緑の染める山道母を連れ

弘泰

東雲

日出子

志華子

真江

柳宏子

度

朝子

柳伸

寿美

なぎさ

シマ子

雅文

宏

千里

タカ子

叔子

柳弘

ひさ乃

遠野

洞庵

重人

タミ

求芽

郁子

都代子

実

オリジナル母の日までに草木染

春

染めましょと言わない美容院へ行く
選択の自由あつさりした二人

博子

バレットナイフ無名の頃を懐かしむ
鉛筆を削るナイフを孫に買い

石舟

今も翔ぶあの切出しの竹とんぼ
エンピツの芯とがらせた嬉しい日

英子

ハイキング果物ナイフそつと出し
幸せなナイフが聞くバースデー

慶子

鉛筆を削つて心研ぎすす
ああうんで済ます夫婦の差し向い

啓生

まあ聞いて腹の立つ事何もかも
女つ気あるのか息子趣味かわる

和子

すぐ枯らす苗を選んで買うて来る
お天気に振り回されて衣替え

満寿蔵

言いたそう孫の自慢にさそい水
童話よりゲームの好きな子が育ち

緑骨

母の日は妻を見るふり見ないふり
病得て弱者となつて人になる

知香子

言い過ぎを少し悔いてるコップ酒
気持だけ包んだ母の慰斗袋

久太郎

見清

玲子

満寿巴

玲子

満寿巴

玲子

満寿巴

玲子

満寿巴

玲子

満寿巴

玲子

堺川柳会

河内

月子報

こんがりと焼く焼餅には技がいる
夫婦です苦労は人に言いません

春蘭

人よりも嫉の出来た犬がいる
買われゆく先でベットの運不運

潤子

観光の目に焼き付いた摩文仁の碑
ふたり酒苦しいときもいい時も

好子

楓文

番大が僕の人相見ています

冬虹

世話焼きが過ぎて煙が立ち始め
するめから豆腐に変わる酒のあて

梓

思い出の動物園がまた消えた
象さんもライオンさんもリストラに

つづや

動物に習う子離れ親離れ
魂胆がありそう世話を焼きすぎる

伽羅

夫婦して暮らすに丁度いい広さ
何万のマウス犠牲にするヒト科

千代

焼きたてのパンほかほかと朝の幸
やけどまだ癒えそうもない世界地図

泰子

戦争は嫌だと叫ぶ羊達
振り向いてくれた彼氏と今は居る

恵子

人間が檻に入っているサファリ
裸婦の絵を焼いているのはお婆ちゃん

篤子

笹食べるバスが醸し出す和み
閉園であわれ動物四散する

りつえ

普段着で暮らせば何も要りません
ふたりして空気のように生きてます

かりん

草餅を焼いてはんわか母の味
公園デビュー順調らしい日焼け顔

みつこ

踏み入れても焼いても芽吹く草の意地
田圃が消えどじょうが消えて朱鷺が消え

かみこ

母ちゃんの前では猫になつてはる
ふくべむら川柳

扶美代

年とって趣味数々に溺れそう
孫達がテレビゲームに溺れてる

朋月

溺れそう泥の舟でもしがみつく

さくら

村上

信子報

花見だよ土足でいいよ輪に入る
友も老い腰をかがめて会いに来る

和甫

平和のためと土足で他国ふみあらず
土足厳禁バージンロード掃き清め

静子

富柳会 池
冬の罪をがらりと開けて帰った子
百均を冷やかしている万歩計
正論を吐いて付む向かい風
イラクの花よ人よ散ることなけれ
沈丁花匂うて鬼を誘い出す
とした目に人の心がほの見える
引き算を知らぬ世代はゴミの山
花の下社長が平に酌をする
シナリオの通りに来ない春のバス
酸欠の知識に吟醸酒をぼとり
絵を抜けた童話の風と手をつなぐ
噂話ちよつとうれしい時もある
咳きこんでたまった唾を全部吐く
福の神相談の輪に居てくれる
肩書きは知勇兼備という名刺
爪染める愛する人がいるように
春うららどこで打とうか句読点
紙一重の平和に甘んじる恐怖
教会の椅子でひとつの罪を千す
菌車の音を上げている留守五日
バンドラの箱の希望へ辿り着く
サクラノ夢みて花は散り急ぐ
家中の足音子猫知っている

昭恵 信子 寛子 はじめ
欣之 勇 亮 幹 深 雪 キミエ 宏 至 夕 子 昭 水 鐘 造 和 子 鬼 焼 洋 介 信 博 東 雲 帆 雀 扶 美 代 萩 乃 かなこ 紅 紫 朗 ひろこ 哲 史 ア キ 花 梢

ためらいを熟慮と言つて笑ろてはる
春風の尾行をゆるす日暮れ坂
知恵のある鬼は決して慌てない
知らなかつた卵を一つ割つてみる
恋歌を綴っています梅さくら
かばい合う二人のベンチ花盛り
大きさをあらためて知る一周忌

くらぼ三川柳会

前坂なお美報

散歩道ベツトをつれて花見酒
籠の鳥人影見れば餌ねだる
鬼が人か人が鬼かと思案する
NO言える鬼を持たねば流される
ひと節で生きる命の火吹き竹
能弁家怪しい節も丸め込む
孫の風山より高く揚げてやり
山あいの古里が好き人が好き
気力ならまだ飛べるのに水溜まり
日溜まりを信じて草が伸びている
雑草と毎日勝負して負ける
笑う事忘れていたね雨あがり
心臓が笑ういよいよさようなら
チワワの目平和を願う子等がいる
わたしより飼ひ犬顔が売れている
言うべきは心を鬼にして言おう
鬼だつて母に負われたことがある
季節はずれの花に触れると情が湧く
マンダラの絵を懐に山男
山が集まつて水の話をしているな

巳代一 春蘭 初太郎 奈保美 森子 冬虹 たかし
キヨノ ふみ子 みち子 伝平 美智子 帆雀 賢一 なお美 幸子 菜美 和代 一眸 遊子 つや子 あらた 富子 久江 常子 小鹿 はるお

亡父さんの笑顔を思い出している
赤子にも神がくださる笑い顔
あす知れぬ命ベツトと語り合う
川柳藤井寺(前月分) 高田美代子報

約束は百まで生きることでした
約束を果たして庭の隅に咲く
約束の土産忘れた千鳥足
約束を果たし今夜は眠れそう
親も子も約束あつて家が留守
つくらくらと指切りをしてしま
約束も賞味期限がきれている
梅が香る春の息吹きを盛り上げる
何も無いけれど愛だけてんこ盛り
しとやかな美人が毒を盛るドラマ
盛りそばにお国自慢が顔を出す
御馳走を盛られることのない絵皿
花びらを盛つたあの日のおまごト
崩さないように思い出そうと盛る
錯覚の元気を盛っている熟女
かりそめの愛か造花が盛つてある
真っ白い皿には夢を盛つておく
山盛りの愛で枯らした花の数
はしゃいでギヤルも兄貴も祭好き
ハマコウははしゃぐ姿にロマンあり
補聴器へ雑音だけがはしゃいでる
はしゃぐ元気が昔はあつたクラス会
輪にとけてハシヤグ子を見る親の笑み
猫だつてはしゃいでみたい雪の朝

一揆 涼子 公弘 悦子 扶美代 志洋 みよ子 敦子 一筒 アヤ子 美智子 六点 史郎 喜代子 かつみ 絹歌 みつこ アキ 重人 花梢 婦美枝 井竿 ロマン 栄一 元紀 昌子 ヨシ枝

左遷とは知らではしゃいでいた辞令
はしゃいだ後の涙が気にかかる
時ときははしゃいでみたい般若面
四温の日蝶もはしゃいで舞い上がる
生真面目な男がはしゃぐコロレト
ソプラノで唄うと春が目をさます

長柳会

西山 幸雄報

机束に負けてしまった転落詩
懐に人それぞれが持つ宇宙
万札の厚みポナス較べ合い
ぶつかつて脱皮して行く反抗期
体当たりすると意外に脆い壁
ぶつかつてぶつかり合つて真珠婚
ぶつかつてやつとほどいたもつれ糸
やわらかな懐に棲む不発弾
万緑の山ふところに主ぬむる
ぶつかつて見ろと教える父の背
ぶつかりながら結んでいく絆
爺ちゃんがお札でくれたお年玉
ドル紙幣どれが贖やらほんまやら
お札には貴方には無い魅力あり
ぶつかつて来いとお札の広い胸
底冷えの母の懐暖かい
ぶつかつた壁に生き方教えられ
ぶつかつて初めて知つた人の愛
苦も楽も知つたお札の顔の皺
日銀を家業としての夢を見た
懐のマグマだんだん小さなり

春蘭 鐘造 大八 雅枝 桂子 美代子 武男 一慧 正一 富美子 正美 史 けい子 和子 ルミ子 三和子 和代 ひろし もこ 英美 潤子 マサ子 靖子 輝治 芳野 敬二 良男

セールズに懷具合のぞかれる
ドラマなら本音ぶつけるところだが
寿司折りてころり懷柔妻の乱
老夫婦ぶつかり方のうまいこと
慶弔の何れに行くか札の運
イージスの門出九条こじ開けて

たけし
由一
直樹
正司
辛雄

川柳藤井寺

十人以上と親の欲目かも
井竿

泣きながら値踏みしている形見分け
喜代子
煩惱の最後に消えるのは欲か
かつみ

どの欲を切りおとそうか花鋏
生きるため少しの欲は残しとく

みつこ
鐘造

三欲の一つが不意に目を覚ます
温泉で磨いた欲は美しい
扶美代 一筒

欲ないが無料と聞けば列にいる
握つてゐる物はなしたら手は抜ける
絹歌
六點

古都の町だらりの帯のはんなりと
はんなりと咲いた桜に酔うお酒

美智子
耕策

昭子
いざこざをはんなり丸くなごませる
はんなんの末を育む京の風

真一 庸佑
戦争で痛手をくらう世界中
痛いミス自分ひとりを責めすぎる

眞一
登志子
転んでも涙こらえてランドセル

重人 史郎

痛い目に遭つて世間が少し見え
痛々しこの子の傷の何時癒える

惠 勇
春 蘭

痛いと言えぬ主治医はハンサムで悦子

川柳ねやがわ

レ 博

余生とは心に咲かす花の彩

ひまわりをいつも笑顔にかく園児

花に水ほくにお湯割りあればよい

まだ男枯れ木に花を咲かせよう

花に舞ふ蝶になりたい八十路踊す

触れないで欲しい私もおじぎ草

離如など出来ぬ手に聊お任せん

婚姻は実印シヤチハタで別れ

持々はわたしの毎こなる肌

不吉な予感机が整理されている

雜魚寝して夢を語つた友も老い

幸せをたぐり寄せてるいい寝顔

翠洋會 穴吹 尚士報

恭昌

会美

又度晴雨兼用傘を入れ

ブルブル雨傘愛の花咲いて 孝一

蕉子

東雲 買ったまだまだお金持っている

富子 王

用はまだ出来ぬタイガース 尚士

まだ一袋の袋をもち歩く
志華子

まだと言ってもらえるまでになり 真理子

どつしりと上座を占める実力者
 こうなれば肝も座って構えてる
 目が座る人の隣は避けて飲む
 座つたら何か食べたくなってくる
 今日でも無事まず合掌で朝が明け
 打ち解ける心の隙間空けておく
 飯どきにいつも顔出す無二の友
 愛情の輪の中心に孫がいる
 平穩に捻子巻き直す木の芽どき
 水運は底の濁りを語らない
 勝ち取った椅子が自慢をして困る

川柳さんだ

北野

哲男報

思い切りボール蹴つてる子のパワ
 目に青葉パワアッパで熊野古道
 要領でパワ不足をカバーする
 波風を立てない母は負け上手

久峰 照子
 石舟 義
 絹子 昭
 桃花 穀
 澄子 理
 恵子 蛙
 雅子 歳
 章子 房
 江子 江

第3回木曾川川柳大会

事前投句—△坂・河内天笑選△祠・酒井路也選

△麓・大木俊秀選△舟・本田智彦選

締切7月15日 専用紙あり 応募料一千元

投句先 〒889大山郵便局留

木曾川流域川柳同盟事務局

大会 9月21日(日)10時開場・11時締切

大山国際観光センター(0568-6111000)

課題△素朴・小林映汎選△景観・河井正之選

△伝来・浜口剛史選

(事前投句・大会課題共2句詠)

生きている証しよ波を被るのも
 波引いた後へ採み手を出す笑顔
 それぞれにさざ波抱いたクラス会
 海峡の渦も恐れた人の波
 何げない昔話に波が立ち
 忠告もやんわり言えぬ口下手で
 止めとけと言われた株を持っている
 忠告がどこかおかしい裏の顔
 巣立つ子に母の忠告うるさがり
 サイレンが響くと腹が減ってくる
 傷口へ水琴窟はやさしさ
 巡礼の鈴の音色のさわやかさ
 三歳の躰がひびく青年期
 夕映えに老いてなお恋乾かずに
 涙する事を忘れて母は老い
 お互いに来世の相手考える
 気に入らん天気予報の正確さ

直美 俊昭 哲男 正行 千恵子 久恵 朋月 一之 千代子 正和 たもつ 一弘 ちあき 修 くら 忠 藤朗

第九回五呂八川柳祭全国誌上大会

題と選者(締切 7月31日)

「指」 遠藤 泰江・普川 素床 他

「雑詠」 石部 明・村井見也子 他

投句料 一〇〇〇円(発表誌至)

投句 各題2句・規定用紙または便箋に

住所・氏名雅号を電話書きを明記

投句先 〒0402

小樽市入船2-23-3 斎藤はる香

TEL・FAX 0134-2515468

第7回川柳展望全国大会(予告)

とき 8月24日(日) 10時30分から

題 △皿 △遊 △中 △婦 △自由吟

選者7名に違う句を出す。各題2句

席題あり 詳細は次号で

TEL 072-64915226 夢草

第21回 夜市川柳大会

とき 8月2日(土) 10時開場

ところ 堺総合福祉会館5F大研修室

おはなしとセレモニー 河内 天笑

「気合」 河内長野 加島 由一選

「しつかり」 堺 志田 千代選

「ブランク」 鳥取 倉益 一瑞選

「嫌い」 和歌山 古久保和子選

「腰」 鳥取 新家 完司選

「睨む」 堺 河内 月子選

「怪我」 鳥取 岸本 宏章選

「勝手」 吹田 山本希久子選

「ピンチ」 海南 三宅 保州選

「恋」 寝屋川 前田 咲二選

席題なし・各題2句・出句メ切12時

賞品多数・会費2000円・欠席投句拝辞

入選句発表2時〜4時半

ベストテンご招待の宴

開宴5時・終宴7時

第27回 全日本川柳二〇〇三年香川大会

表記川柳大会は、6月15日香川町マツノイ・パレス（クリスタルホール）で開催され、事前投句2438名、当日投句858名の中から同人の吉田孔美子さんが、大会賞を獲得。なお、宿題「平野」の秀句に同人の藤田泰子さん（富田林市）が選ばれた。

〈一般の部〉

文部科学大臣奨励賞

動脈のような大河を抱く平野

参議院議長賞

フランスパン一本抱いてOFFにする

川柳大賞

満願の旅はうどんでしめくくる

大会賞

妥協癖ついて瞳が濁りだす

公園のベンチ告げ口などしない

母の橋何度も揺れてまた許す

一本の橋に人間変えられる

ふと怯むいつか子供でない瞳

愛媛 日浅 静

ばくアトム本当はもう休みたい

父の公園からSLが走る

一本の藁を宝に再起する

国宝といわれる芸の鬼がいる

手打ちうどん春のリズムで老母が打つ

羊水の海でシヨパンを聞く宝

〈ジュニアの部〉

今頃は進路に橋を架けている

瞳みて信じられてる事を知り

高松市教育長賞

わりばしが逃げるうどんをたい捕する

愛媛 小野小六 亀田大地

暑中お見舞申し上げます

長柳会

河内長野市 千代田公民館

毎月第2・4金曜日

午後1時から

板尾	木太	水谷	柏本	澤田	松谷	佐中	綱木	梶武	木虎	山原	浜野	西山	中谷	加島	前原
岳人	正一	正子	靖子	和子	マサ	もこ	けい子	武男	良男	輝治	三和子	幸雄	ひろし	由一	正美
岸本	西浦	大垣	山岡	針生	小川	石堂	村上	落葉	佐藤	鈴木	井上	坂上	谷口	森田	
たけし	一慧	輝子	富美子	和代	芳野	潤子	直樹	史樹	英美	敬二	ルミ子	淳司	明子	美代子	

暑中お見舞申し上げます

会 柳 川 北 城

一 公 田 吐 長 会

小池	喜多	岸野	川端	川久保	神夏磯	叶岡	鍛原	太田	大橋	大内	浦田	石塚	安達
しげお	佐津乃	あやめ	一歩	睦子	典子	史風	千里	とし子	柳一	朝子	綏子	順三	はじめ

野村	中田	都倉	出口	寺井	津村	高橋	高杉	鈴木	鈴木	坂上	近藤	小糸	小泉
美代子	あい子	求芽	セツ子	東雲	志華子	一枝	千歩	政子	トヨ子	高栄	正子	昭子	ひさ乃

吐田	吉岡	森杉	宮井	丸岡	松本	松岡	町田	本間	坊農	板東	長谷川	橋村	野村
公一		秀夫	あき子	静枝	ただし	久留美	達子	満津子	柳弘	倫子	春蘭	容子	八重

暑中お見舞申し上げます

竹原川柳会

十五年 盛 夏

〒725-0022 広島県竹原市本町1丁目14-3

小 島 蘭 幸 方

会 監 会

計 査 長

山正福沖三古藤古石岡森岩時小
内畑島浜宅田解谷原本井本広島
房半万正不太静節淑清菁笑一蘭
子覚年宏朽虚風夫子水居子路幸

ほか
会員
一同

暑中お見舞申し上げます

会 柳 川 堺

河内谷川本太田大荻奥梶柿河神源
天喜恵日の舞扶篤鐘像時哲紀月龍八
子代勇出夢美子造山雄平女三子文千
笑

小島西小齋志高津寺寺德中中中中中
一輝惠雪小くら千紀世な東甚みつア
百雪小さ代子さ雲一こキ楓雪羅吾
敬

西内朋月西村彰長谷川長谷川樋藤藤升宮村矢矢山米和
りつえ春虹一二三泰かりん好子成本上倉野本澤田
朋月

暑中お見舞申し上げます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南3分) プレラにしのみや4F

事務局および投句先

〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西 口 いわゑ

川島	河井	亀岡	門谷	小倉	小熊	奥村	奥田	岩倉	井上	浅野	秋元	阿萬	黒川
諷云	庸佑	哲子	たず子	藍	江美	五月	みつ子	キク子	松煙	房子	てる	萬的	紫香
見													
都倉	坪井	竹内	田辺	田中	住谷	坂上	小池	黒田	久保田	木村	菊池	神原	北野
求芽	孝一	満寿蔵	鹿太	正坊	石舟	高栄	しげお	能子	千代	貴代子	トミエ	文	哲男
山本	山崎	松下	松下	牧渕	古川	藤村	春城	春城	長谷川	西田	西口	長浜	富山
義子	君子	比ろ志	比ろ志	富喜子	奮水	メ女	武庫坊	年代	春蘭	柳宏子	いわゑ	澄子	ルイ子

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

塩谷	澤田	坂部	坂口	小山	乗原	柿花	柏原	小倉	内田	野村	顧問	川上	副主幹	牛尾	主幹
佐代子	和重	紀久子	公子	太一	道夫	紀美女	優子	アサ	結実	太茂津		大輪		緑良	

橋爪	中嶋	中島	中後	中井	堂上	富上	天満	寺田	垂井	玉井	谷口	谷村	田中	杉山	芝
佐一	怜	正博	清史	栄美子	泰女	光代	三千代	裕美	千寿子	豊太	信和	あき子	輝子	精子	あつむ

		和田	横垣	山西	森下	宮本	宮園	宮口	松原	松尾	堀端	堀	細川	福田	福田
会員一同		良一	忠翁	佳子	順子	三喜夫	射月芳	克子	寿子	和香	三男	富美子	稚代	英子	和子

例会 毎月第2日曜日 近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先

〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良 方

TEL 073-446-2855

暑中お見舞申し上げます

NHK川柳教室

橘高薫風	野下之男	野島庄三郎
北畑金治	井上松煙	安達忠央
藤井正雄	緒方美津子	岩屋美明
黒田能子	井上信子	福田満州
指宿千枝子	北野哲男	南原正和
海老池洋	三木愛子	山田耕治
三品征子	谷鈴子	莊司弘之
鴨谷瑠美子	古今堂蕉子	池上清治
前たもつ	矢倉五月	久保田千代
田中節子	江見見清	
志田千代	大崎侑子	

暑中お見舞申しあげます

川柳ふうもん吟社

会長 両川洋々

会員 一同

事務局 〒680-0033 鳥取市二階町3-102

植田一京方

月例会 毎月第4日曜日 13:00～

JR鳥取駅構内（シャミネ会議室）

暑中お見舞い申し上げます

会 洋 翠

橘高	安土	穴吹	居谷	井上	梅田	榎本	榎本	大川	太田	岡本	奥田	古今	児玉	清水	住谷	高杉
薫風	理恵	尚士	真理子	照子	宣司	日の出	舞夢	桃花	昭	久峰	みつ子	蕉子	蛙	絹子	石舟	千歩
田中	谷口	津村	坪井	寺井	天正	中澤	長浜	中村	西出	長谷川	藤井	安永	山本	米田	渡部	渡辺
正坊	義	志華子	孝一	東雲	千梢	伽羅	澄子	叡子	楓楽	会美	正雄	春	希久子	恭昌	さと美	富子

暑中お見舞申し上げます

エイス壻

講師 河内天笑

泉谷	稲川	榎本	榎本	大久保	大谷	奥	荻野	河越	河盛	源田	小島	小島	小寺
喜代子	惠勇	日の出	舞夢	伸子	篤子	時雄	象山	みよ子	龍三	八千代	一輝	百恵	竜之介
齋藤	高木	津守	富山	中澤	中野	中村	西内	樋口	升成	宮本	村上	矢野	和田
さくら	世紀子	なぎさ	ルイ子	伽羅	健吾	忠敬	朋月	冬虹	好	かりん	玄也	梓	つづや

暑中お見舞申し上げます

いずも川柳会

会長 尼 れいじ

会 員 一 同

事務局 〒693-0052 出雲市松寄下町 2 8 4

吉 岡 きみえ 方

TEL 0853-22-1068



暑中お見舞申し上げます

エイシス東大阪

講師 河 内 天 笑

佐々木紀典	坂本夏代	坂上高栄	古手川光	熊代菜月	國見蘭香	吉川寿美	神原まさと	川久保睦子	笠井欣子	岡本訓也	伊藤博仁	井尻民	生嶋ますみ
米田志津子	山本宏至	山口美津子	安永春	松井敏子	松井秀夫	堀富重	星野きらり	西川更紗	中村トミノ	中岡妙	飛永ふりこ	玉島ちひろ	鈴木トヨ子

酷暑御伺い致します

○三年 盛夏

香川県東かがわ市白鳥

川柳塔おっぱこ吟社

会長 木村あきら

会員 角尾いさむ

副会長 成重 放任

辻上よしみ

会計 川崎ひかり

甚古 正雪

同人 工藤 吟笑

堤くに子

池内かおり

向山 治延

神保坊太郎

山崎 初恵

滝井 勝

松村 輝夫

原 賢

赤沢 貞月

伊勢八重子

中塚寿々女

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔きゃらぼく

事務局 〒683-0845 米子市旗ヶ崎3-12-13

政 岡 日 枝 子

TEL 0859-34-1729

暑中お見舞

申し上げます

熊本川柳会

高野宵草

永田俊子

岩切康子

夏 寺井藤柳川 盛

高田美代子	中島志洋	鴨谷瑠美子	川端六點	太田扶美代	榎本耕策	楠昭子	大橋鐘造	中井アキ	長谷川春蘭	福田悦子	西村栄一	若松雅枝	吉田喜代子	増井ヨシ枝	俣野登志子	伊藤アヤ子	他一同
-------	------	-------	------	-------	------	-----	------	------	-------	------	------	------	-------	-------	-------	-------	-----

大阪川柳人クラブ

会長 礒野いさむ

副会長 橘高薫風

幹事長 坂本晴美

総務 長浜澄子

会計 川原清宏

事務局 大堀正明

新家完司川柳集（四）

平成十五年

A 5 判126頁・税込 1000円・送料 160円

〒689-2303 鳥取県東伯郡東伯町徳万597 新家完司

TEL 0858-52-2414 FAX 0858-52-2449

Eメール shinke@mx2.tcbnet.ne.jp

「平成十年」もあります。2冊の場合、送料 210円。

暑中お見舞申し上げます

川 柳 大 阪

会 員 一 同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

暑中お見舞い申し上げます

もくせい川柳会

山安宮三藤野中辻玉田進児源黒岸河唐檜粕岡江岩阿安橘
門永田宅井島内川置中藤玉田川田井住谷屋本見崎萬藤高
タ 禄 つ 則 満 久 慶 英 正 千 啓 紫 知 庸 郁 都 吉 見 玲 萬 寿 薫
ミ 春 骨 子 彦 巳 郎 子 子 坊 子 蛙 生 香 子 佑 実 子 子 郎 清 子 的 子 風

毎月第3月曜日に定例会を開いております

大 阪 川 柳 の 会

句 会 毎偶数月上旬・サンケイビル本館3階 322号室
 事務局 〒532-0025 大阪市新北野1-3-4-706 本田智彦 方
 TEL (06) 6303-7297

大 阪 川 柳 人 クラブ	吉 安 森 本 濱 内 坂 岡 足	世 話 人	磯 野	代 表
堀 本	村 井 口 田 田 藤 本	立	野	
正 晴	雅 英 美 智 良 光 和 良 淑		い さ む	
明 美	文 華 羽 彦 知 枝 樹 三 子			

暑中お見舞申し上げます

川 柳 若 葉 の 会

久 中 宮 吉 山 宮 宮 古 長 辻 黒 橘
保 井 崎 田 内 崎 本 川 谷 川 田 高
田 ア 弘 あずき 香 シ 欣 喜 会 慶 能 薫
千 キ 直 住 子 史 美 美 子 子 風
代

暑中お見舞い申し上げます

八 尾 市 民 川 柳 会

会 員 一 同

季刊

A5判
一五二頁

川柳展望

年間誌代 ㉶四、九六〇（㉶共）

☆見本誌贈呈いたします

〒567
-0009

茨木市山手台四―六―三―一〇―一
TEL 〇七二―六四九―五三二六
FAX 〇七二―六四九―三三三四

川柳展望社

納涼 デカレショ祭り

8月15・16日

川柳 ささやま

暑中御見舞

河内長野

長柳会

加島 由一

水谷 正子

村上 直樹

山岡 富美子

暑中お見舞い申し上げます

鳥取県川柳作家連盟

会長 鈴木 公弘

会 員 一 同

事務局 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364
安田方 春 木 圭 一 郎
TEL 0857-24-2834

暑中お見舞い

申し上げます

はびきの市民川柳会

吉森三福濱西永仲徳塩酒榎 安芸田
他村下好田口村田谷山満井本
一久一専悦フリ章真み 一吐泰
仁 っ っ
同雄知平子ジえ司一こ敏壺来子

暑中お見舞申し上げます

西宮ローズ川柳会

山山春春西長那坪久木菊亀小奥岩飯秋橘
本崎城城口浜賀島井保村池岡倉田倉西元高
義君年武庫い澄雅孝まさ貴ト哲 み キ ミ て 薫
子子代坊ゑ子子一お代子エ子藍子子サる風

宮崎コスモス会

(連絡先) 谷川泰通

〒880-0841 宮崎市吉村町平田2910

TEL 0985-22-2022

境	今	村	早	濱	西	長	中	筑	谷	谷	齊	是	隈	串	大	入	播
田	村	松	迫	砂	尾	友	村	紫	川	川	藤	沢	元	間	野	江	本
睦	み	晴	き	泰	日向		順	幸	ア	泰	睦	紀	房	安	百	浩	充
子	や	之	よ	子	夏	文	一	治	子	通	子	子	子	子	合	三	子

坂	與	砂	井	篠	乾	八	山	中	神	村	吉	生	松	平	川		
本	田	田	尻	原		倉	本	島	原	上	村	嶋	葉	川	崎		
奈		八		い	美	知	宏	春	ま	ミ	一	ま	君	幸	友		
良	司	寿	子	つ	代	佐	至	江	さ	子	風	す	江	枝	甫		
笠	星	細	山	寺	渡	西	赤	本	脇	杉	馬	増	江	太	藤		
井	野	川	内	川	辺	川	木	田		本	場	田	波	田	本		
欣	き		キ		順	義	妙	た	俊	晴		道	正	恭	一		
子	ら	り	タ	子	肇	生	明	子	子	美	宏	子	純	一	道		

暑中お見舞申し上げます

川柳クラブ

わたの花

暑中お見舞申し上げます

南大阪川柳会

会 員 一 同

暑中お見舞申し上げます

川柳塔みちのく

主幹	副主幹	相談役	顧問	理事	監事	会計
齊藤 晶	小寺 花峯	工藤 甲吉	森中恵美子	波多野五楽庵	岩渕 黙人	櫻庭 順風
			福士 慕情	佐治千加子	浅田 隆樹	肥後和香子
			田中 叶	相馬 銀波	小枝ふさゑ	相馬 一花
						ほか同人一同

暑中御見舞

川柳塔まつえ吟社

同人一同

〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅方

電話 0852-24-5450

暑中お見舞い申し上げます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-0112 和歌山市西庄239-23

桜井千秀

暑中お見舞申し上げます

尼崎川柳協会加盟

尼崎
いくしま川柳会

例会 毎月第一金曜日午後一時

サンシビック尼崎三階
(阪神尼崎駅西南三分)

尼崎
尾浜川柳会

例会 毎月第二火曜日午後一時半

尼崎市尾浜二丁目五十八
尾浜公民館

(阪急武庫之荘北側③乗り場
市バス④尾浜二丁目下車)

両会共各地句会案内に

掲載しています

暑中お見舞申し上げます

高槻川柳サークル卯の花一同

例会 毎月第三木曜日 正午 高槻現代劇場306号室

暑中お見舞申し上げます

川柳塔おおとり

会長 小林 由多香
他会員一同

〒680-0805 鳥取市相生町1-110
TEL. 0857-23-1170

暑中お見舞申し上げます

おたまじやくし川柳会

山	土	雪	森	林	中	堤	助	赤
本	橋	本	元		岡		川	塚
蛙	房	珠	ふみよ	力	香	檜	和	楽
城	枝	子		子	代	代	美	天

〒596
0076

岸和田市野田町一六―二

土橋方

TEL (〇七二四) 三八―三三〇八

暑中お見舞申し上げます

川 柳 塔 な ら

飛	安	渡	居	清	宮	吉	大	坊	米	中	宮
永	土	辺	谷	水	西	川	内	農	田	原	口
ふりこ	理	富	真理子	絹	弥	寿	朝	柳	恭	比呂志	笛
	恵	子	子	子	生	美	子	弘	昌	生	生

会員一同

暑中お見舞い申し上げます

東大阪市川柳同好会

会 長	片 岡 湖 風
副会長	澤 村 猪太郎
会 計	森 下 愛 論
	会 員 一 同

暑中お見舞い申し上げます

岩 美 川 柳 会

会 員 一 同

〒689-0003 鳥取県岩美郡岩美町浦富1504

TEL 0857-72-1388

暑中お見舞い申し上げます

ほたる川柳同好会

前字北多小藤寺唐江米出栗池松田藤嵯古前岡富湯宮高水田井橘
ほか田山川田牧沢井住見原口田田本中原根川田本永浅田嶋野辺上高
いさ禮ヤ契信長柳 見雪セ久善た螢桂保喜昭吉敵馬禄 黒正直薫
同む子エ子男一童実清子子子守し柳子子子子郎子洗骨勝兎郎次風

定例会・毎月第2火曜日午後・豊中市螢池公民館

暑中お見舞申し上げます

京 都 塔 の 会

会 員 一 同

暑中お見舞申し上げます

打 吹 川 柳 会

会 長 牧 野 芳 光 ・ 会 員 一 同

事務局 〒682-0924 倉吉市河原町1879

高 多 博 丈 方

電話 0858-22-6128

暑中お見舞い

申し上げます

岸和田川柳会

岩佐ダン吉

田口 穰一

島崎富志子

寺田 甚一

小島 笑司

村垣鹿太郎

井伊 東吉

仲谷 弘子

不破 仁緑

善野 盛之

長谷川呂万

加藤 基

堂免 路子

宮野みつ江

原 苑子

藪野けい子

中島 寿海

坂口 英雄

宮地 一脩

池田 岩夫

原 さよ子

芳地 狸村

暑中お見舞申し上げます

サークル 檸檬

橋 高 薫 風

浅 野 房 子

奥 田 み つ 子

片 岡 智 恵 子

久 保 田 千 代

嵯 峨 根 保 子

田 中 正 坊

鶴 田 遠 野

長 浜 澄 子

西 口 い わ ゑ

西 出 楓 楽

西 村 哲 夫

前 た も つ

山 本 希 久 子

山 口 光 久

山 本 義 子

吉 田 あ ず き

舞 見 御 中 暑

社 塔 柳 川

名譽主幹

主 幹

理 事 長

副 主 幹

副 理 事 長

常 任 理 事

橘 高 薫 風

河 内 天 笑

板 尾 岳 人

奥 田 みつ子

波 多 野 五 楽 庵

小 島 蘭 幸

前 たもつ

大 内 朝 子

河 内 月 子

高 田 美 代 子

長 浜 澄 子

坊 農 柳 弘

山 本 希 久 子

米 田 恭 昌

仁 部 四 郎

西 出 楓 楽

籠 島 恵 子

木 本 朱 夏

鶴 田 遠 野

藤 田 泰 子

松 原 寿 子

山 本 義 子

川柳塔社常任理事会

柳界展望

○2002年度NHK学園

川柳友の会作品コンクール
受賞者は次のとおり。

〈特選〉

だんだんと拝む姿勢にな
る介護 上田 俊路

○第12回朝日中部川柳大会
事前投句の部で、中岡妙さ
んが特選を獲得した。

フリーター気楽に見えて
いるだけだ

○2003年ふあうすと川
柳大会は、4月12日兵庫県
民会館で226名の参加を得
て開催された。当日の本社
関係受賞者は次のとおり。

〈半ドンの会賞〉

寒い日をつないでくれた
にぎりめし 池 森子

〈神戸新聞社賞〉

縄を縛う愛と憎との炎た
ち 池 森子

○年間を通じて弘前市が募
集している「文学箱」の入
選句が、弘前桜まつりで発
表された。

川柳の部

〈特選〉さくら松お城津軽
は贅沢だ 高瀬 霜石

〈入選〉河内月子 河内天笑
短歌の部

〈特選〉塵ひとつなき東門
につづく道うしろに与力

番所前に天守閣

河内 天笑

○第74回京浜川柳大会は、
4月29日かながわ県民セン
ターで201名の参加で開催
〈天位〉

一流の中で溺れている天
狗 播本 充子

○第4回井笠川柳会笠岡大
会は5月24日開催された。

〈市長賞〉

傘を出るこの世の雨が降
っている 岸 桂子

なお、この句は後日笠岡
句碑公園で句碑にされる。

☆5月23日付読売新聞「編
集手帳」で、路郎師の「お
前がいたらと思うと煙草ば
かり喫う」他一句が紹介さ
れた。

▼計 報▲

●森 静枝さん（同人・鳥
根県 森茂美氏夫人）5月
17日逝去。享年73歳。

●山本すすきさん（常任理
事・吹田市 山本希久子さ
ん夫君の母室）5月21日老
衰のため逝去。享年98歳。

▽訂正とお詫び△

5月号ⅡP76上段17行寺井
はじむ→寺川はじむ

6月号ⅡP3下段6行目、
何者→何物 P3下段12行

目、ロマンチズム→ロマン

新同人紹介

国 米 きくゑ
―薫風・天笑・メ女推薦

奥 田 保 子
―天笑・洋々・公弘・完司推薦

蔵 本 悦 子
―天笑・洋々・公弘・完司推薦

清 原 悦 子
―みつ子・菊野推薦

チンズム P3下段23行目、
物語り・物語 P22下段8
行目、酌をした・酌をしに
出により削除
5月号ⅡP68上段15行目、
○常任理事会はP101に掲載

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(木)正午から 飲む・地下街・からから 蟬・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
城北 川柳会	19日(土)午後1時から 占める・タフ・岬・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
岸和田 川柳会	19日(土)午後1時半から 濡れる・値段・呑む・計る	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川柳会 梨花	19日(土)まで 開城・青・清・大観・雑詠	投句先 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 坂田和歌子
川柳 ねやがわ	20日(日)午後1時半から 固まる・スピード・大げさ 自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	20日(日)午後1時半から ネオン・骨・憶測・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	21日(月)午後1時から 料理・ポイント・ついで 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南大阪 川柳会	23日(水)午後6時から 巻添え・末・無位・名刀	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	25日(金)午前10時から 家・詩・先・海・粒・眠・王	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	26日(土)午後6時から 飲む・ボート・兼ねる・裸	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	27日(日)午後1時から 曲・テスト・ほとんど 「ころころ」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 社	27日(日)午後1時から 短・サバイバル・他人めく	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都 塔の会	28日(月)午後1時から 牙・足る・直線	ハートピア京都 地下鉄九条駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔 みぞくち	28日(月)午後8時から 泳ぐ・ご飯・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

7 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	3 日(木)午後 1 時から 拾う・縄・退屈	船橋フロムワン(近鉄奈良駅西・JR奈良駅北歩10分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼 崎 いくしま	4 日(金)午後 1 時から 真ん中・欲・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	5 日(土)午後 1 時から 備・火傷・雑詠	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	5 日(土)午後 1 時から セミナー・空・吸う	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 唐津支部	7 日(月)午後 1 時半から 鱗・耳・このごろ	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
ほ たる 川 柳 同 好 会	8 日(火)午後 1 時から 落書・耳・つまづく	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池駅前ビル 6 F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	8 日(火)午後 1 時半から 家族・揺れる・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑧番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	12日(土)午後 1 時から ううれい(共選)・まつり な・ご・や(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
打 吹 川 柳 会	12日(土)午後 1 時から 火花・てくてく・危ない	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博文
川 柳 塔 ま つ え	12日(土)午後 1 時半から 浴衣・賑わう・映える	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島松丘
川 柳 塔 みちのく	12日(土)午後 4 時から 懐かしい・選ぶ・力瘤	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
八尾市民 川 柳 会	13日(日)午後 1 時から 床・飛ぶ・出張・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	13日(日)午後 1 時から 念入り・ソース・まだまだ 「そうだ(助動詞)」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	14日(月)午後 1 時から 豊か・自由・ツアー・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ

編集後記

☆路郎賞・川柳塔賞の応募締切り日は、昨年同様8月10日と決定。選考方法が変ってから5回目になり、毎年規定の不備を検討、今年から応募句数が従来の8句から5句になった。つまり、自分で厳選してもらうことになるので、早目に準備をお願いし、次号(8月号)到着次第、刷込みの用紙で資格ある同人・誌友の皆さん全員応募して下さい。

☆6月14、15日の「日川協香川大会、葉・薫風句碑巡り」バスツアーは41名の参加をいただき、賑やかな旅行となった。その様子は8月号に掲載の予定。

☆先月号編集後記に書いた表紙の絵を、玉青画伯から長年取継いで下さった元同人の岸本豊平次氏が、5月

1日に他界された。責任感の強い氏は体調がきつくなされた中、丁寧なお手紙で絵をいただく指示を下された。聞けばその三、四日後に、寝ついてしまわれたとの事。心からお礼申し上げご冥福をお祈りします。享年78歳。

☆暦の上で7月7日は小暑24日は大暑。一年中で一番暑い時期に入る。気象庁の発表によると、'00年までの30年間の気温を平均した平年値より、昨年は世界では0・58度高く、日本では0・57度高かったそうである。高温傾向は'90年頃から目立っており、原因はもちろんだ酸化炭素などの増加という。

☆年々暑さが身に沁みるのは、加齢のせいとばかり言えないことが判明。心頭滅却して作句に励むのが、一番の消暑法かな。(ふ)

ひとこと

川柳と僕

川柳との出会いは'98年秋、三国丘高校の同窓会で中野健吾君(一番傘同人)と飲み、川柳の話が聞かされ、学生時代の遊び友達であった天笑主幹の川柳教室に誘われてからです。取り敢えず一年位やってみて、駄目なら止めるつもりでした。そのうち堺川柳会から始まり、あちこちの句会に誘われ全没

もしよっちゅうでしたが、楽しみは帰りに飲みに行く事でした。さて、才能もないし下手な川柳を続けているのが不思議なので、月に十日位は川柳にかかわっています。続けて良かったことは、親しい友達が何人も出来たことです。幸か不幸かひとり暮しの気楽な身分なので、ぼちぼちと続けていこうと思っています。

西内 朋月

○介護認定4となった独り暮らしの母94歳を訪ねる時はなるべく笑顔で行く。立ち居も不自由となった母は、どんなに淋しく、心細く日を送っていることが。自分の近い将来の老いの姿と重ね合わせると切ないものがある。

○昨年末、二人切りの兄妹であった私の兄が亡くなり、母は逆縁をみてしまった。それでも施設への入居も、私の家へ来ることも拒む。

この先どうなっていくか、はらはらのし通しである。○最近こんな夢を見た。壁に囲まれた細い通路を歩いている。前方にドア、開けるとまた同じ通路、行けど行けどドアと通路ばかり。よほど抜け道のない閉塞感にとらわれていたらしい。○こういう時、私は川柳を続けていて本当によかったと思っている。短時間でも川柳の世界に没頭できることで随分と救われる。たく

(希)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（9月号）

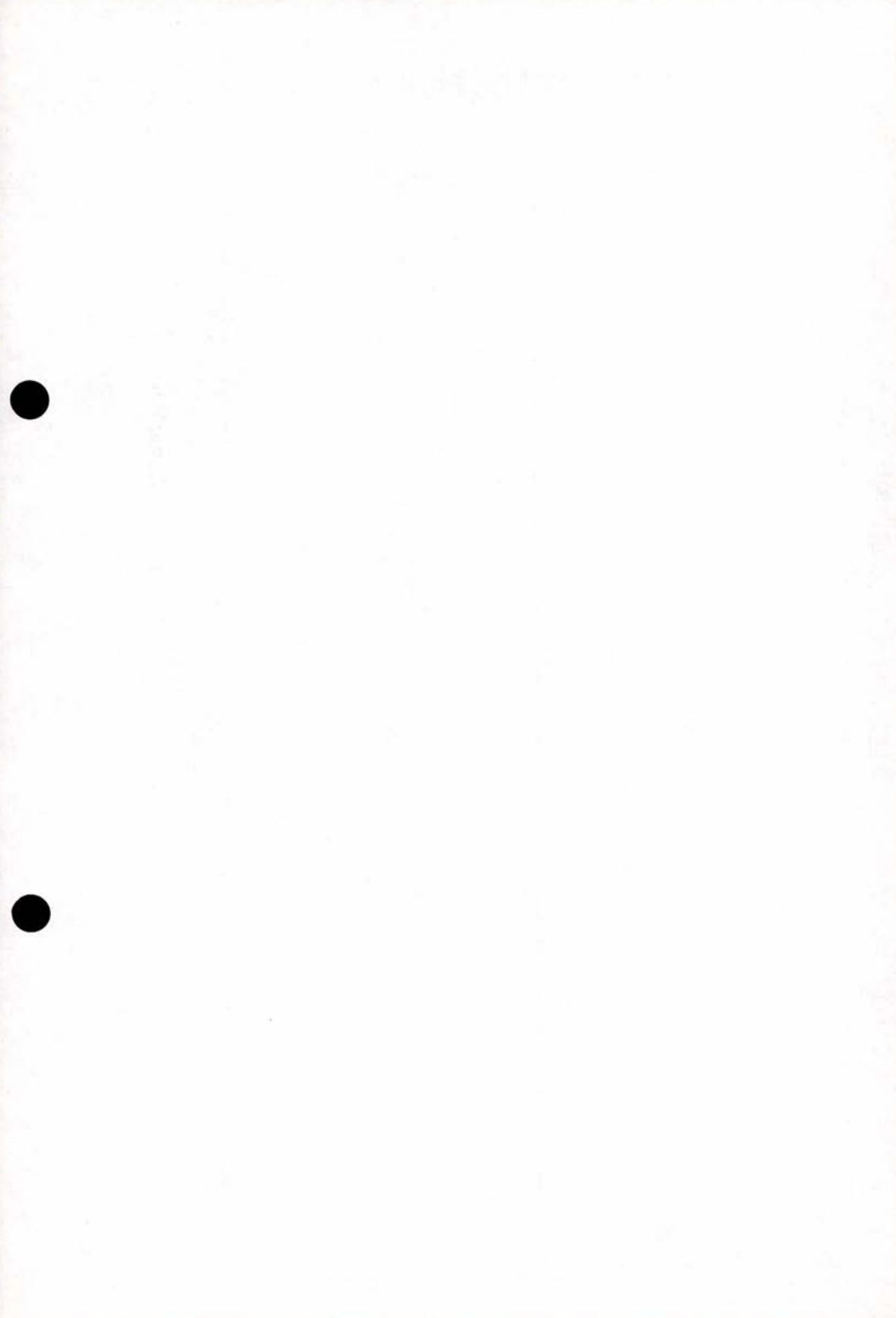
地名

姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

9月号発表(7月15日締切)

川柳塔(8句)	河内天笑選
水煙抄(8句)	板尾岳人選
愛染帖(3句)	波多野五楽庵選
茴香の花(3句)	藤田泰子選
課題吟(3句)	「ついで」
「驚く」	米原雪子選
「翼」	井上勝視選
「月」(3句)	安本晃授選

三宅保州担当

10月号
課題吟 「ラッシュ」「タクト」
「ソフツ」
初歩教室 「そろそろ」

路郎忌 本社7月句会

とき 7月7日(月) 午後5時半・6時半締切
ところ アウィーナ大坂 4階
天主寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「エプロン」

捨てる	高田美代子選
「いよいよ」	海老池洋選
「洗う」	板尾岳人選
「いのち」	磯野いさむ選
	橋高薫風選

席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

本社8月句会 8月7日(木)

兼題 「調子」「まるい」「ながなが」
「飾る」「疼く」

第22年度 夜市川柳募集

第2回「忍術」 古久保和子選
ハガキに3句 7月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料92円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇三年(平成十五年) 七月一日発行

編集兼 河内 權治

発行人 美研 アート

印刷所 大阪市阿倍野区三好町一〇一六

〒545-0005

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-6914

振替 〇〇九八〇一五二三三六八番

紀州梅干



おいしさ、田舎づくり
Sankō 三幸農園

〒640-8412 和歌山市狐島508

TEL 073-455-8899 FAX 073-455-8773

地方発送承ります。

商品パンフレット差し上げます。

ご注文は ☎0120-04-8899

●インターネットでも、ご覧頂けます。

<http://www.naxnet.or.jp/~sanko>

医療法人社団

湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科（内科・外科）

放射線科

ホスピス

診療時間 月～金 9:00～17:00

土 9:00～13:00

電話 大阪 (06) 6771-4861(代) 〒543-0033

<http://www.yukawa.or.jp>

大阪市天王寺区堂ヶ芝2丁目10-2
JR 大阪環状線桃谷駅徒歩3分